

# PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 2 October 2008

---

## Articles

- The Kyoto Grammar の枠組みによる品質を表す形容詞の分析 ..... 1  
藤田 透
- 日本語助動詞の研究：多義性から多機能性へ ..... 11  
船本 弘史
- Grammatical Intricacy, Genre, Language Function and Pedagogy ..... 23  
Howard DOYLE
- 日本語・英語の「説得」：観念構成的意味を中心に ..... 39  
佐藤（須藤）絹子
- Are There Modal Imperatives? — Just Someone Dare Say No! ..... 51  
David DYKES
- 英語教育におけるジャンルと過程型 ..... 67  
早川 知江
- サイコセラピーにおける問題の外在化のための語彙-文法資源 ..... 83  
加藤 澄
- 日本語テキストの Subject と Predicate の役割に対する一考察 ..... 97  
水澤 祐美子
- Honorifics and Interpersonal Function ..... 107  
Mirosława KACZMAREK
- イデオロギーの復興 ..... 123  
南里 敬三
- 「は」と「が」そのメタ機能からの再考 ..... 135  
龍城 正明

## Proceedings of JASFL 2008 第2号 発行によせて

昨年念願の Proceedings 第1号を発行でき、会員一同、心機一転して SFL 研究に精進する昨今ですが、このたび第2号の発行となりました。

今回発行されました Proceedings of JASFL 2008 は昨年の 10 月 20 日と 21 日の両日、立命館大学・草津キャンパスで開催された日本機能言語学会・秋期大会の研究発表内容を論文に改訂した論文集です。

若き新進気鋭の会員の精力的な発表から国内外からの中堅・古参の研究者による発表まで、2 日間にわたり活発な意見交換で盛り上がった学会の成果が遺憾なく発揮された力作揃いとなりました。英語と日本語の語彙文法やメタ機能から見た分析をはじめ、テキスト分析、ジャンル分析、英語教育関連など、日本語と英語の 14 編の論文が掲載されています。どれをとっても最近の SFL 理論を駆使し、それぞれの研究分野の第1線で活躍している研究者たちの大変興味ある秀作論文です。

また、特別講演としては、香港市立大学教授、ハリデーセンター所長の ジョナサン・ウェブスター博士をお招きし、The Influence of the Chinese language on the development of MAK Halliday's Systemic Functional Approach と題した内容で講演していただきました。SFL の歴史を概観したあと、英語とはその構造的類似を見るも、言語学的には全く異なる言語である中国を修めたハリデー教授による SFL 分析の発展過程。さらにそのような異なる言語への SFL 理論の応用や方法論、またそこでの問題点など、興味深いトピックに出席者一同、大いに啓発されました。

以上のような SFL に関する最新の情報や知見が満載された Proceedings of JASFL 2008 が、会員諸氏にとって今後の SFL 研究の一助になれば、編集者としては、大いなる喜びとするところであります。

日本機能言語学会会長  
龍城 正明

# PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 2 October 2008

---

## Articles

- The Kyoto Grammar の枠組みによる品質を表す形容詞の分析 ..... 1  
藤田 透
- 日本語助動詞の研究：多義性から多機能性へ ..... 11  
船本 弘史
- Grammatical Intricacy, Genre, Language Function and Pedagogy ..... 23  
Howard DOYLE
- 日本語・英語の「説得」：観念構成的意味を中心に ..... 39  
佐藤（須藤）絹子
- Are There Modal Imperatives? — Just Someone Dare Say No! ..... 51  
David DYKES
- 英語教育におけるジャンルと過程型 ..... 67  
早川 知江
- サイコセラピーにおける問題の外在化のための語彙-文法資源 ..... 83  
加藤 澄
- 日本語テキストの Subject と Predicate の役割に対する一考察 ..... 97  
水澤 祐美子
- Honorifics and Interpersonal Function ..... 107  
Mirosława KACZMAREK
- イデオロギーの復興 ..... 123  
南里 敬三
- 「は」と「が」そのメタ機能からの再考 ..... 135  
龍城 正明

Japan Association of Systemic Functional Linguistics

The Kyoto Grammar の枠組みによる品質を表す形容詞の分析  
An Analysis of Adjectivals of Quality in the Framework of the Kyoto Grammar

藤田 透

Toru FUJITA

同志社大学大学院文学研究科  
Doshisha University, Graduate School

Abstract

There has been a traditional assumption in the grammar of Japanese that the two parts of speech called *doshi* (i.e., verb) and *keiyoshi* (i.e., adjective) can be discriminated from each other in terms of the domain of meanings they realise. Although for the most part it seems that *doshi*, as the name suggests, realises the actions while *keiyoshi* realises the states, the closer examination on their meanings will reveal another picture.

Accordingly, this paper will consider the appropriate analyses for *doshi* and *keiyoshi* in Japanese within the framework of Systemic Functional Linguistics (SFL). The fundamental theory of SFL is regarded as general to various languages, while the particular descriptions should be considered for each language. This means that the parts of speech in Japanese should be analysed in contrast to the equivalents in English, which may lead to different analyses.

The analyses will show that *keiyoshi*, as well as *doshi*, functions as Processes in transitivity, which has been addressed in the Kyoto Grammar, an SFL application for Japanese. Furthermore, this paper will argue that both of the two parts of speech can be utilised to realise either of dynamic or static processes. This will result in the functional analyses where *keiyoshi* and *doshi* will not be distinguished in terms of the process types they realise.

1. はじめに

伝統的に、日本語の規範文法において、動詞と形容詞という二つの品詞は、対立する概念と考えられる場合が多い。この二つの品詞は、用言という一つのカテゴリの中で分析されるものではあるが、動詞は、動作や存在を表すのに対して、形容詞は、性質や状態を表すように記述されることが多い。しかし、このような意味的な差異が、動詞と形容詞を形式の観点から分離する活用体系の差異と、完全に一致しているという証拠は乏

しい。また、動詞の表す意味として、存在の陳述が挙げられる場合もあるが、存在という概念が、形容詞が表すとされる性質や状態と明確に異なるとも言いきれない。

そこで本論では、日英対照の観点から、日本語の動詞と形容詞が具現し得る意味を、比較分類し、英語の動詞と形容詞とは全く異なる機能的分析が必要であることを示す。特に、選択体系機能言語学 (SFL) の枠組みにおける日本語文法の研究プロジェクトである the Kyoto Grammar にて、提唱されている過程型 (process type) の選択体系 (Tatsuki, 2004, 2008, forthcoming) を用いて、日本語の動詞と形容詞が持つ観念構成的メタ機能の分析を試みる。

まず、形容詞がどのようにとらえられているかを、日本語文法の立場から概観する。次に、英語における動詞と形容詞の過程構成上の分析を概観し、日英語の形容詞の違いを見る。英語の分析では、形容詞と動詞は、形式的振る舞いも異なり、全く異なる機能を持つと考えられる。続いて、the Kyoto Grammar における形容詞の分析を通して、日本語の動詞と形容詞という二つの品詞が、同じ機能を持つということを見る。また、このことによって、動詞と形容詞という従来全く異なる機能を持つように考えられてきた二つの品詞を統一的に扱う方が、より妥当な分析になるということを示す。

## 2. 日本語の形容詞

日本語の形容詞は、加藤他 (1989) によると、自立語で活用を持ち、述語となることができ、状態・性質を表し、終止形が「い」「だ」で終わるという特徴を持つ。自立語であるということは、名詞や動詞といった品詞と共通することである。形容詞が述語となるのは、動詞と共通していて、日本語においては、どちらの品詞も節の述語として機能することができる。このことを反映して、日本語の動詞と形容詞は、用言としてひとまとまりに分類される。

形容詞と動詞を区別している特徴は、形容詞が状態・性質を表し、その終止形が「い」「だ」であるという点である。前者は、用いる品詞によって伝わる観念構成的意味が異なるという意味で、機能的な差異と位置づけることができる。これに対して、終止形の形式は、動詞と形容詞の形式的な差異ととらえることができる。このように、日本語の動詞と形容詞は、異なる観念構成的意味を具現すると同時に、異なる形式を持っていると考えられていることがわかる。

## 3. 英語の形容詞

日本語の分析とは異なり、英語において、動詞と形容詞は異なる品詞として分析され、ほとんど共通の特徴を持たない。英語では、動詞に節を構成する叙述機能があるのに対して、形容詞は叙述機能を持たない。

SFL では、このことを反映して、Halliday & Matthiessen (2004) は、英語の観念構成的機能を、以下のように分析している：

Examples	are	abundant.
Carrier	Process: relational	Attribute

SFL による英語の分析では、形容詞の *abundant* は、属性 (Attribute) として分析され、過程中心部 (Process) として機能する動詞の *are* とは異なる要素である。このように英語では、形容詞という品詞の語が過程中心部として機能すると分析されることはなく、形容詞を用いて物事を形容する場合には、動詞による叙述が必要とされる。

英語の形容詞によって、性質や状態を表すためには、必ず過程中心部による叙述が必要である。しかし、英語で状態や性質を表すために必ずしも、動詞と形容詞という二つの要素が必要であるとは言えない。

英語には、動詞であっても性質や状態を表す語が存在しており、それらを用いれば、形容詞を用いずに、物事の性質や状態を示すことができる。例えば、*abound* という動詞は、「たくさんある」という状態を示すが、動詞として用いるため、SFL による節の過程構成分析は以下ようになる：

Examples	abound.
Carrier	Process: relational

Halliday & Matthiessen (2004) は、*abound* のような動詞が持つ機能を、品質を表す関係の過程中心部としている。これは、過程中心部の中に、関係過程を具現する部分と、属性を具現する部分が両方含まれているという分析である。

この例のように、過程中心部によって関係過程と属性の両方を含むような語が多く挙げられている。以下にその一例を挙げる：

(1)	ache	「痛む」	appear	「みえる」	apply	「当てはまる」
	count	「重要である」	differ	「異なる」	do	「間に合う」
	dominate	「そびえ立つ」	figure	「目立つ」	hurt	「痛む」
	matter	「重要である」	seem	「みえる」	smell	「におう」
	stink	「臭い」	suffice	「十分である」	vary	「異なる」

(Halliday & Matthiessen, 2004, p. 238)

これらの動詞を用いると、動詞のみを用いて、あたかも動詞と形容詞を合わせたかのような観念構成的意味を具現することができる。言い換えれば、過过程中核部としての動詞のみで、過过程中核部と属性の機能を兼ね備えていると言える。

このようにして見てみると、英語における動詞と形容詞の区別は、日本語における区別とは異なっていることがわかる。日本語文法では、動詞と形容詞は、意味と形式の両面から区別できるとされている。これに対して、英語の動詞と形容詞は、(1) のような動詞を用いることによって、性質や状態を表すことができるという点で、同じような観念構成的意味を具現し得る。形容詞については、動詞による過过程中核部の補助を必要とし、動詞については一語で過过程中核部と属性を表すことができるという違いはあるが、双方とも属性を表すという意味では、動詞と形容詞が具現する観念構成的意味の区別は、動詞と形容詞が表す意味の範疇が異なるとされている日本語ほど明確ではないと言える。

#### 4. The Kyoto Grammar による形容詞の分析

上述のように、英語の形容詞は、単に属性を示すものとして分析されるが、日本語における形容詞は、英語とは全く異なる分析をされる。Halliday & Matthiessen (2004) は、英語についての分析を記述したものであり、それが同様に日本語の分析にも適用できるとは限らない。また、SFL の理論上、言語は文化が具現したものであるため、異なる文化圏の英語と日本語が、同じ語彙・文法を持つ必然性はなく、各言語の事情に合った記述が必要とされる。

SFL の理論的枠組みを用いた日本語の分析に関しては、the Kyoto Grammar が、構築されている (Tatsuki, 2004, 2008, etc.)。The Kyoto Grammar の枠組みでは、各メタ機能に関する日本語の分析が進められている。特に観念構成的メタ機能の中では、過程型の分析が進められている。この中では、図1のような日本語の過程型の選択体系網が提案されている：

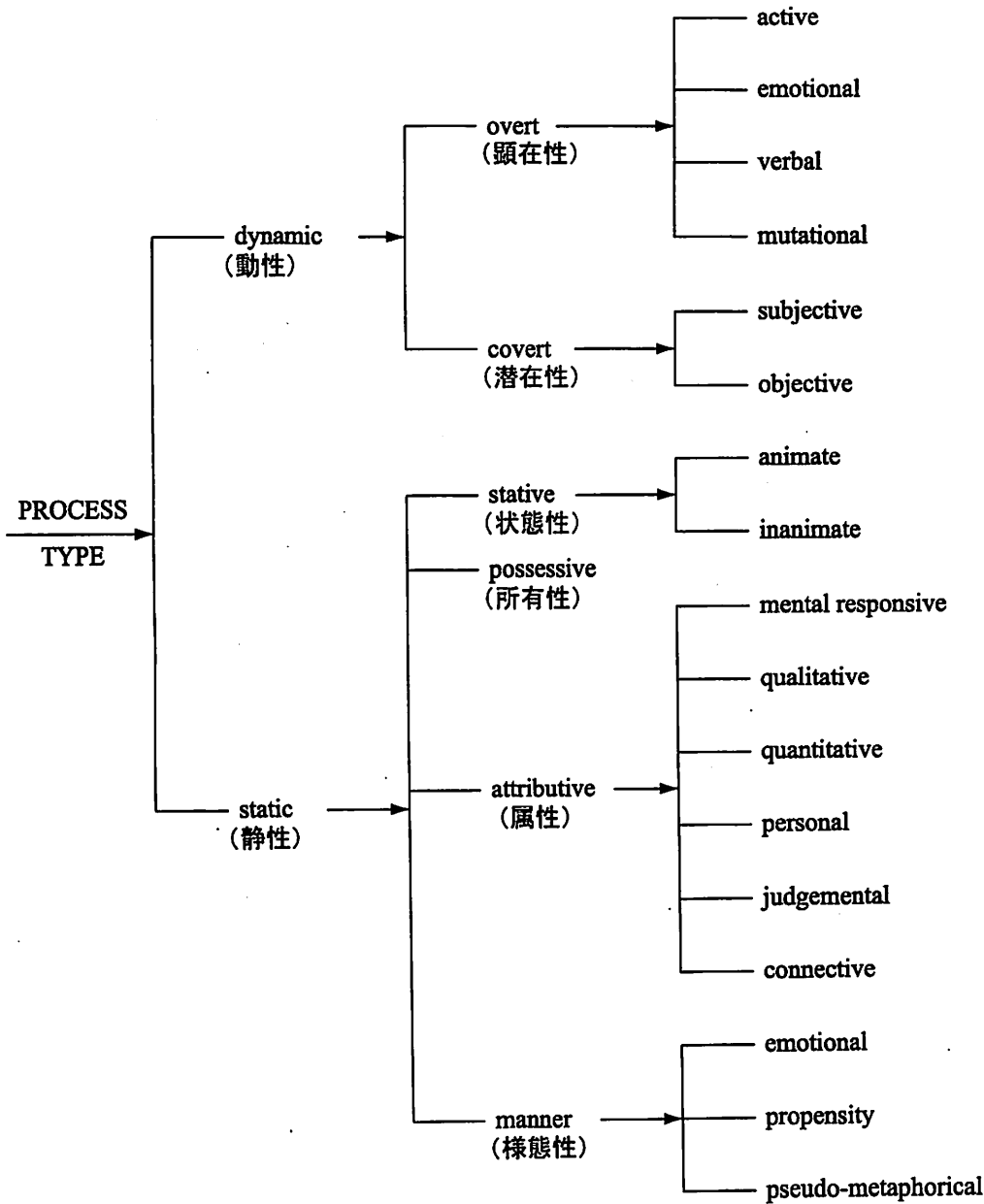


図 1：日本語の過程型の選択体系網 (Tatsuki, 2008)

図 1 の選択体系網によれば、まず日本語の過程型は、動性 (dynamic) または静性 (static) という二つの選択可能性を持つ。動性過程には、さらにその動作が外部から観察可能な顕在性 (overt) と、外部からの観察が不可能な潜在性 (covert) の選択がある。顕在性には、行動性 (active)、感受性 (emotional)、言動性 (verbal)、変容性 (mutational) とあり、それぞれ「作る」、「泣く」、「言う」、「なる」などによって具現される。また、潜在性の動性過程には、主観性 (subjective)、客観性 (objective) という選択があり、「思う」、「感

じる」に対して「思える」といった具現可能性の違いがある。

静性過程は、状態性 (stative)、所有性 (possessive)、属性 (attributive)、様態性 (manner) という四つの過程型の選択可能性を持つ。このうち、状態性過程は、ものの存在を示すものであり、有生の場合の「いる」と、無生の場合の「ある」という選択がある。また、所有性過程は、「持つ」、「持っている」などの過程中核部によって、所有という静的な過程を具現する可能性がある。属性と様態性の選択は、それぞれ「美しい」、「立派だ」などによって具現される。The Kyoto Grammar の枠組みでは、これらの過程に対して更なる選択可能性が考案されており、その内容は龍城 (forthcoming)、Fujita (2008) などに詳しい。

従来の日本語分析では、動詞と形容詞は異なるカテゴリに属しており、その表す意味の違いから、異なる分析がなされることが多かった。しかし、the Kyoto Grammar の枠組みでは、機能的な立場から、日本語における形容詞は、動詞と同じように、過程中核部として機能すると分析されている。日本語の形容詞は、英語のように属性そのものだけを表すのではなく、過程中核部の機能をも併せ持つ。

この機能は、上述の *abound* のように関係過程と属性を同時に含む英語の動詞の機能と似ていると言える。英語では、このような機能を持つ過程中核部を、関係過程と分析している。

図1の the Kyoto Grammar における日本語の分析では、英語の分析にあるような関係過程を認めておらず、形容詞が過程中核部として用いられたとき、主に静性過程の属性という過程を表すと分析されている。これは、形容詞が具現するのは、主に動きを伴わないような状態や性質であり、その属性を述べていると考える分析である。

このような分析は、動詞と形容詞で全く異なる観念構成的機能を担っていると考える英語の分析とは異なる。英語では、動詞は過程中核部、形容詞は属性と分析されるのに対して、日本語の分析では、動詞も形容詞も同様に過程中核部を具現しており、そこで具現している過程型が異なるという分析となる。

## 5. 日本語における過程と過程中核部

これまで見たように、the Kyoto Grammar の日本語分析においては、形容詞を過程中核部として捉え、主に属性の過程を具現していると考える。しかし、ここで問題となるのは、形容詞というカテゴリが過程中核部として機能するときに、属性過程のみを具現しているのかという点である。また、同じ過程中核部である動詞は常に属性以外の過程のみしか具現し得ないのだろうか。さらには、動詞や形容詞といった、形態によって定義される形式的要因が比較的強い品詞が、その具現する過程において形式と一対一の対応関係を築いていると言えるのであろうか。換言すれば、品詞という要因が、その要素が持つ機能を直接限定するような可能性を持ち得るのかとも考えられる。

品詞と具現される機能の関係を調べるためには、各品詞とその使用状況、実際に使用されている過程型を調査し、対応関係の有無を検討する方法がある。そこで、日本語語彙に関するデータベースを用いて、品詞と機能の対応関係に関する調査を行った。

調査の元にしたデータベースは、『日本語の語彙特性 (CD-ROM 版)』(天野&近藤, 2003)である。このデータは、日本語の語彙を品詞別に分類したもので、読み方、使用頻度などが網羅されている。頻度などのデータは、今回の目的からは外れるため、無関係なものとした。データベース中の約 800 項目の形容詞をリストアップし、過程型との関係について検討した。

検討を加えた形容詞の一部を抜き出すと、「明るい」、「浅い」、「軽い」、「白い」、「冷たい」、「広い」、「短い」、「速い」、「悪い」などがある。これらの形容詞は、確かに物事の属性を表すことができる。

ところが、同じ形容詞であってもこのようにはっきりと属性を表すとは言い切れないような例も存在する。例えば、「痛い」、「嬉しい」、「悲しい」、「痒い」、「悔しい」、「気だるい」、「楽しい」、「眠い」のような形容詞である。この類いの形容詞は、一人称の記述には用いることができるが、二人称以上の記述には単純に用いることができず、助詞類の補助を必要とする。

例えば、自らが怪我をして「痛い」と叫ぶことはできるが、他人が怪我をしているのを見て「痛い」と発言するのは、あまり適切な表現とは言えない。この場合、「痛そう」のように、助詞を補う必要がある。これは、「痛い」のような感覚を表現する過程では、当人にしかその感覚を直接感じ取ることができないためと考えられる。周りの者は、この感覚を想像することしか適わないため、助詞を補って表現することが適切になると考えられる。

また、これらの形容詞の使用法について考えてみると、「悲しい話」、「眠い授業」というように連体形を用いて名詞を修飾する場合には、それぞれ、人を悲しい気持ちにさせる属性を持つ話、人を眠い状態にする属性を持つ授業と解釈して、属性（特に、mental responsive）であるとも考えられる。しかし、過程中核部として一人称に対して用いた場合には、「僕は悲しい」や「私は眠い」のように、人間の心的な動きを具現する過程として用いられるのが普通である。

このように、「痛い」、「悲しい」、「眠い」などが過程中核部として用いられる際には、そのものの属性を表しているというよりはむしろ、「思う」、「感じる」といった動詞で具現される過程に近い過程を具現していると思われる。

これらの形容詞が、属性を具現するのではなく、「思う」や「感じる」と同じ過程型を具現しているならば、分析もそれに近いものにする必要がある。前述の通り、「思う」、「感じる」といった動詞は、動性過程の潜在性で主観性の過程を具現する例として挙げられている。従って、「痛い」、「悲しい」、「眠い」の類いの形容詞も、過程中核部として用いられた場合には、動性潜在性主観性の過程を具現するものとして分析されるべきで

ある。

従来、「痛い」、「悲しい」などは、形容詞として、「明るい」、「赤い」などの属性を具現するものと一括りにされてきた。しかし、その機能に着目した場合、決して同一の過程を具現しているものばかりではなく、主観性の過程を具現するものもあれば、属性の過程を具現するものもある。このように考えると、形容詞という一つの品詞が常に同じ機能を具現していると考えすることは難しい。

また、形容詞だけでなく、動詞について同様の調査をした結果、必ずしも動詞が具現する過程に決まった制限があるわけではない。主に属性を具現すると考えられる形容詞の中に、動性として機能するものがあるのと同じように、動詞の中にも属性をはじめとする静性過程を具現するものがあるということがわかる。

このような動詞の例には、「(丈が) 合う」、「(美しさに) 欠ける」、「(見方が) 異なる」、「(山が) そびえる」、「(色が) 違う」、「(あいつは) むかつく」などが挙げられる。これらの動詞は、形式こそ動詞であるが、静性過程的な機能を具現しており、動きを伴うという含意は少なく思われる。

例えば、「(美しさに) 欠ける」と言った場合、もし元々美しかったものが、その美しさを失ったという読みであれば、動性過程と捉えられるかもしれない。しかし、ここでの読みは美しさが存在しないという状態を示すのであって、静性過程によって具現される意味と捉えるのが妥当である。

また、「(山が) そびえる」の場合も、地形の隆起によってみるみるうちに平地から山に変わったという動きを具現するのであれば、動性過程を具現すると捉えられるであろう。しかし、山という高い地形が以前からその場所にあったと捉えると、そこに動きは含まれず、静性過程と考えることができる。

このことから、動詞の中にも過程中核部として用いられたときに、動性過程ばかりではなく、静性過程を具現するものが少なからず存在すると言える。

加えて、形式と機能という点から、動詞と形容詞の活用体系と過程型についても関連が見られる。現代日本語の形容詞には、命令形に当たる活用が存在しない。これは、青くなれという意味で、「\*空よ、青れ」などとは言えないことを示す。この点では確かに、動詞と形容詞には用いられる意味の可能性に違いがあると言えるかもしれない。

しかし、動詞の命令形について考えてみると、先に挙げたような属性過程を具現する動詞について、実際に命令形が使用される場面は少ないように思われる。例えば、「美しさよ、欠けろ」や「山よ、そびえろ」というような発言は、語彙・文法的には誤りではないもののかなり不自然であり、限られた場面でしか適切に使用することができない。活用体系という理論上は、存在している形式であっても、実際にはほとんど用いられないことがない形式である。

このことから、命令法として用いることができないという制約は、動詞や形容詞といった品詞に課されているというよりも、属性過程に課されている制約であると言い換え

ることができるかもしれない。このように考えると、属性過程を具現する動詞が、機能の面で形容詞と同じ制約を受けていると捉えることができ、属性過程の特徴を捉えることができる。

## 6. まとめ

従来、the Kyoto Grammar の枠組みにおいて提唱されてきた過程型において、動詞は動的な機能を具現しており、形容詞は静的な機能を具現しているという推量が存在した。しかし、動詞と形容詞のそれぞれが具現する過程型を詳細に調べてみると、必ずしもその対応が厳密に守られているわけではないということがわかる。つまり、動詞の中にも静的な機能を具現するものがあり、形容詞の中にも動的な機能を具現するものがある。これを日本語という独立した言語の分析の中で考えた場合、品詞の形式に関わらず具現する具現する過程を考えることが必要であると思われる。よって、日本語で具現される過程型を分析する際には、具現する品詞にとらわれない形で分析を進めることが必要である。

## 参考文献

- 天野, 成昭, & 近藤, 公久 (編). (2003) 『日本語の語彙特性 (CD-ROM 版)』. 東京: 三省堂.
- Fujita, Toru. (2008) An Analysis of English Transitivity System: From a Contrastive Study between English and Japanese Process Types. *Core*, 36,37, 15-42.
- 加藤, 彰彦, 佐治, 圭三, & 森田, 良行 (編). (1989) 『日本語概説』. 東京: 桜楓社.
- Tatsuki, Masa-aki. (2004, September) *A New Treatment of Japanese Transitivity: An Analysis of Adjectives as a Process Type -A Kyoto Grammar Approach-*. Paper presented at the meeting of International Systemic Functional Conference, Kyoto, Japan.
- Tatsuki, Masa-aki. (2008, January) *Applying SFL Theory to Specific Language Description: A Case Study of Japanese from the Kyoto Grammar Approach*. Paper presented at the lecture in Hong Kong City University, Hong Kong, China.
- 龍城, 正明. (forthcoming) 「日英語の過程型に関する考察: the Kyoto Grammar による日本語過程型分析」.

日本語助動詞の研究：多義性から多機能性へ

**A Study of Auxiliaries in Japanese:  
From Ambiguity to Multifunctionality**

船本弘史

**Hiroshi FUNAMOTO**

北陸大学

**Hokuriku University**

**Abstract**

This paper considers a functional analysis of 'auxiliaries' in Japanese. In this study, I will particularly analyze the items realizing two types of meanings, i.e., 'validity' (Halliday's 'modalization') and 'event-control' (Halliday's 'modulation'). According to Halliday, these two meanings are integrated into the broader concept of 'modality', which in turn is treated as a category in the interpersonal metafunction. On the basis of the semantic similarity between English modals and some auxiliaries in Japanese, modality is generally regarded as the 'tertium comparationis', so that it is applied to the description of the auxiliaries in Japanese.

In Japanese, however, by definition the class of 'auxiliary' in fact does not cover some frequent forms, such as *-nichigaina-i* (for certainty) and *-nakerebanarana-i* (for obligation), whilst these forms, like auxiliaries, express a certain modality meaning. Assuming that the choice of different semantic features in the system network, in effect, manifests itself in different forms, I will point out that the different items realizing different types of modality occur in significantly different structures. Through the analyses presented here, I will maintain that the different structures are derived from totally different areas of meaning at the semantic level. Accordingly, these items are assigned different labels serving distinct functions, that is, one expounding a Validity Marker as carrying an interpersonal function, and the other expounding an Event-Control Marker as carrying an experiential, respectively.

## 1. はじめに

本研究は、キョートグラマーの視点から現代日本語のいわゆる助動詞、なかでも命題内容に対する話者の心的態度の表出に関わる形態について考察し、その語彙文法構造の分析法を提案するものである。日本語の助動詞が命題の妥当性および事態制御・意向性を表すという点では、英語の法助動詞がそうであるように多義的な範疇であり、一般的にこの多義性はモダリティーと呼ばれる概念によって解釈される。英語においてたとえば *be*, *have* など過程型を具現する過程中核部のみならず、態および相など経験的意味を具現する助動詞としても使用される点でやはり多義的であるが、英語の法助動詞がとくにモダリティーというくくりで扱われるのは、他の助動詞とは機能的に分化したことによると考えられる。したがって、ハリデーは英語法助動詞が多義的でありながらも、意味層において発話機能との相互作用が根底にあるとして、モダリティーはそれ全体が対人的機能に含まれる範疇であるという。現代日本語におけるいくつかの助動詞も、このモダリティーを比較第三項として英語法助動詞と意味的にほぼ等価な語類として扱われることが多い。しかしながら、日本語のいわゆる助動詞に着目すると、それらの多くが多義的であるにせよ、モダリティーに含まれる個々の意味は、例えば英語の *will* に対し「するだろう」(推量)と「しよう」(意志)が、*should* に対し「するはずだ」(推量)と「するべきだ」(義務)が、*can* に対し「しうる」(可能性)と「することができる／(食べ)られる」(能力)があり、それぞれ個別の形式が与えられていることがわかる。

本研究では、異なる意味の選択は基本的に何らかの形で語彙・文法レベルにおいて反映されると捉え、モダリティーに含まれる意味の選択が個別の助動詞のみならず、テンス形式との共起関係においても大きな違いとなって具現することを見る。これは、助動詞の多義性をカバーするモダリティーが、実は機能的に分化されたことによると捉えるべきなのである。さらに、以下に示す例のごとく、助動詞を「付属語でありかつ活用する語」とするごく一般的な分類法では十分に扱いきれない形式の扱いについても触れることとする。

- (1) 太郎は来るにちがいない。 [蓋然性]
- (2) 太郎は来なければならない。 [義務]

この2例にみられるように、「蓋然性」と「義務」との差は別の助動詞のみならず述部におけるテンス形式との関係にも表れている。そこで、これらが果たす機能の違いから両者をそれぞれ「妥当性マーカー (Validity Marker)」と「事態制御・意向性マーカー (Event-Control Marker)」と呼んで区別することを提案し、

その機能的分析を示す。

## 2. 日本語研究における助動詞の扱い

助動詞という術語は、それ自体が構造的あいまい性を有するがゆえに、日本語の文法的記述でどのように位置づけられるかが不明瞭となることが多い。たとえば、松村明編『日本文法大辞典』（1971）の中で助動詞の項を見ると、助動詞は次のように定義されている。

- (3) a. 独立して用いることはほとんどなく、いつも他の語に付属して用いられ、上の語の意味を補ったり、表現者の判断を付与したりする語。  
b. 助動詞には活用があるのを本則とし、活用がない助詞とあわせて辞または付属語という。

この定義は、要するに助動詞が「付属語で活用する補助的形式」というごく一般的な解釈に基づくものであるといえるが、この定義によって助動詞が「助動・詞」、すなわち動詞を助ける（何か別の）品詞なのか、あるいは「助・動詞」、すなわち上接の語を助ける動詞なのかがあいまいである。周知のとおり、助動詞という術語は明治期に西洋語の文法用語として日本に入り、それが日本語にも適用されたという経緯がある。たとえば、初期のものと思われるものに田中義廉が明治7年に著した『小日本文典』がある。これによれば、動詞は「動作の次第・法及び時限等を定むる為に」活用をなし、これに「大有用のもの」は「他の動詞と結合して、其活用を示すに、最有用のもの」であり、「此動詞を助動詞と名づく」としている。つまり、助動詞は英語で *auxiliary verb* と呼ぶようにあくまで動詞（の一種）として理解されていることがわかるのである。しかも「西洋諸語の規矩に習ひて品詞を多種に分つ」ことで日本語を分析しても「毫も国語の法則を變することなし」と続けている。

しかしながら、国語学など伝統的な日本語研究では、いわゆる助動詞は形態的・統語的側面から論じられることが多く、このような研究によって明らかとされるのは、まず第一に助動詞の活用体系であり、それから助動詞間相互の結合関係である。しかし、これらは「西洋諸語の規矩」に習って分析できるものでは到底ない。たとえば、Huddleston (1976: 333) は NICE property という「規矩」によって英語助動詞を整理したが、そのなかで Inversion ひとつとってみても、これで日本語の助動詞を同定することは不可能である（龍城 1998）。

北原（1977）は、日本語の助動詞を5つのタイプに大別し、概ね(i) 受身・自発・可能・尊敬・使役・希望、(ii)丁寧体の「ます」、(iii)過去・回想、(iv)推量・

否定、(v)断定という分類をおこなっている。この中で特に注目すべきは、過去を表す「た」が含まれていることである。北原（1977）に限らず、「た」を助動詞とする分析は北原（1981: 138）森田（2007: 100）など最近の研究でも見られることであるが、これによるとたとえば「見る」のような簡単な動詞の活用表に照らしてみても、「た」と「る」の対立関係が文法的にまったく不均衡な分析によって解釈されてしまうことになる。

語幹	語尾	活用形
見	ない	未然形
	ます	連用形
	る	終止形
	る	連体形
	れば	仮定形
	ろ・よ	命令形

表1 「見・る」の活用体系

この表にあるように、「見・る」は語幹とその活用語尾によってひとつの動詞として扱われる。しかし、これが「見た」になると「た」が助動詞として動詞とは別に扱われるというのである。言うまでもなく、「る」であろうが「た」であろうが、いずれの場合も節を「終止」とするという文法上の用法に違いはない。しかも、「る・た」は意味的にも非過去・過去という対立軸によって並べて見ることができるにもかかわらず、後者では2語からなる結合体として解釈されることになるのである。「た」の解釈と分析法については、後で詳しく論ずる。

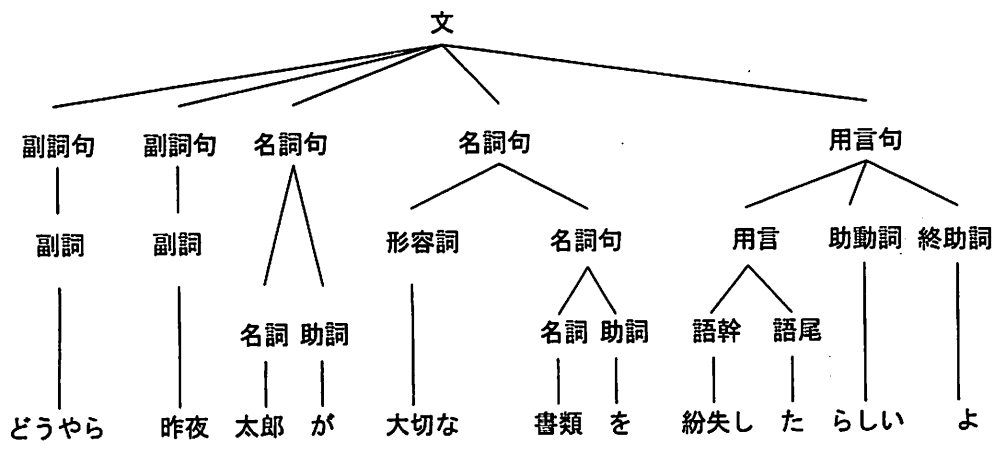
さらに、このような研究法においては、個々の形式の形態的分類がまずおこなわれるため、たとえば古典日本語では「らむ」を「推量の助動詞」と呼ぶように、意味解釈は補足的に付記されるのが通例である。これに倣って、現代日本語においても、「だろう」を推量の助動詞とするならば、「かもしれない」もまた意味的に同じ範疇によって捉えるべきであろう。しかし、普通これはさらに「か+も+しれ+な+い」のように品詞分解がおこなわれるが、これだけ細分化された形態素に対して意味解釈が個々に付与されるとして、母語話者がその総和によって「かもしれない」という表現を正しく理解しているかは甚だ疑わしい。

### 3. 節の階層性とモダリティー：益岡（2007）

モダリティーという用語は、日本語研究にも用いられて久しいが、これは上

述の助動詞ないし「文末表現」を意味的な観点から捉えようとする点で、個別言語の特定の形態に依存したいわゆる語の品詞論的研究とは一線を画する。しかし、モダリティーが自然言語、とくに英語法助動詞の分析に導入されたのは、この語類の曖昧性および多義性を epistemic と root によって横並びに分けて整理したことにとどまる (Coates 1983)。これは助動詞の意味分析という点で、意味ベースの研究として一步を踏み出したと評価することはできるが、意味化という点でさらに一步押し進めたのは、意味をさらに階層化し、従来モダリティーとして括られてきたものにまで意味的階層構造を提示した益岡 (2007) の研究によってである。これは、従来の研究とは異なり「文」の構成要素がどのような品詞であり、それにどのような意味解釈が付与されるかを論じるのではなく、「文論における意味的カテゴリーと語論における形態的カテゴリーの区別を重視すべき」(益岡 2007: 246) とする立場によってレベルの区別が明確化にされたことによる。これによれば、たとえば(2)は(3)のような外形上の構成素構造と(4)のような意味的階層構造を併せ持つことになる。

- (4) どうやら昨夜太郎が大切な書類を紛失したらしいよ  
(5)



- (6) [M2 [M1 どうやら [P2 昨夜 [P1 太郎が書類を紛失し] た] らしい] よ]

この分析からわかるように、(5)は(4)の構造を構成素間の統語的な関係を捉えているのに対し、(6)ではこの節が意味的に4層に分けられており、(i)「発話のモダリティー (M2)」を最上層として、(ii)「判断のモダリティー (M1)」、(iii)「個別事態 (P2)」、そして最後に(iv)「一般事態 (P1)」へと各層が意味的な包摂関係になっている。ここで注意すべきは、「紛失したらしいよ」という部分の、用言句としてまとめられる構成素間の統語的依存関係と、意味的階層構造にお

いて引かれる4つの層境界が一致していないということである。さらに、モダリティーを担う2層が、モダリティーの下位区分として同列に扱われておらず、それぞれが別の層を形成している点は、本研究が主張する助動詞の多機能性と通ずる点で、示唆的である。

このようなアプローチは、意味の階層化という手法によってより日本語の実態に迫る研究であるといえるが、日本語にいくつの層が認められるのか、各層における意味的内部構造がいかなるものであるかなど、不明な点も多い。たとえば、三島由紀夫『金閣寺』には「有為子は自転車に乗ったらしかった」というくだりがあるが、これをさらに拡大して(7)のような形にして考えてみるとどうであろうか。

#### (7) 有為子は自転車に乗るべきだったかもしれなかったらしい

現実にはひとつの発話で話者が処理できる情報量には限りがあり、(7)は節末要素の情報過多であると言わざるを得ない。しかし、日本語でこれだけの構造が一応は可能であるかぎり、潜在的な文法体系自体は(7)を予測できなければならない。とくに、ここでは「べき」、「かもしれな」、「そしてさらに「らし」にテンス形式の対立が可能であるが、益岡(2007)ではいわゆる助動詞に起こるテンス形式の対立は認めていない(つまり、「らし[助動詞]+い[語尾]」という構造にならない)。逆に、(7)では「乗る」が過程中核部を担う動詞でありながら、この文脈においてはテンス形式の対立が起こりえない(「\*乗ったべきだった」)。それにもかかわらず、益岡が主張するようにここでも「乗っ[語幹]+た[語尾]」と分析するのであれば、そのような解釈を妥当とするだけの根拠を示す必要がある。

次節では、各テンス形式が付加される形態は意味的(または多層的)に分化するだけでなく、それらの意味が属する機能的範疇もまた分化していると考え、キョートグラマーの枠組みで分析をおこなう。

### 4. 伝達的単位における助動詞の分析：その独立性と文法化

2節で見たように、一般的に日本語の助動詞は独立性が弱いとされる(松村明編、『日本文法大辞典』1981: 332)。たしかに、助動詞をはじめ節末表現が話し手の心的態度を具現する場合、累積的に付加されるという性格がある。(8)を見てみよう。

(8) 中学二年生の息子の雅也くんは、勉強はそこそこできるがおとなしい性格

で、学校でいじめのような仕打ちも受けている、らしい。奥さんのしつけは厳しく、幼い頃にはきつと、おそらく、もしかしたら、家庭内暴力を受けていた可能性もあるかもしれない、というもっぱらの評判、だという話を石井さんの知り合いの知り合いがしていた、らしい。

(重松清『リビング』)

(8)のもっとも中核となる命題（益岡の用語を借りれば一般事態）は、単純化して言えば「雅也君はいじめのような仕打ちをうけてい」と「家庭内暴力を受けてい」という2つに集約される。とくに後者に対しては、蓋然性（「可能性」、「かもしれない」）および伝聞性（「というー」、「らしい」）などが付加されており、これらすべてが助動詞ではなくとも、テキスト内で話し手の心的態度を具現する点で同じ機能に関わっている。実は、この付属語的な形態が有する命題への依存性こそがテキストの結束性を強めることとなり、その結果、(9)の下線部にあるように、それが単独で現れても何についての妥当性ないしそれに類する話者の判断であるのかが当事者にとって理解可能なのである。

(9) 「今、明倫にいます」

太郎は言った。

「入学金払いに来たんだよ」

「でしょう？あなた、そうすると私思ったのよ」

千頭さんの満足そうな声が聞えた。

(曾野綾子『太郎物語』)

ただし、すべてのいわゆるモダリティー表現がこのような働きをもつわけではない。この点については、(10)と(11)を見てみよう。

(10) A: 「彼は来るの」

B: 「らしいね」／cf. 「かもしれないね」

(11) A: 「彼は来るの」

B: 「\*べきだね」／「\*ねばならないね」

(10)の「らしい」と「かもしれない」は、それぞれ本論文で伝聞性と蓋然性と呼ぶ意味を具現し、両者とも話者の心的態度に関わる妥当性に属する。したがって、意味レベルにおいて「かもしれない」はこれ全体が蓋然性というひとつの意味素性を具現する語彙項目であり、現代日本語においてはこれ以上細分化

できない形態として文法化されたと見るべきである。この点に鑑み、「らし」や「かもしれない」といった形式は、「妥当性マーカー (Validity Marker)」と呼ぶこととする。

この妥当性マーカーについて重要な点は、(10)において「来る」と「らしい／かもしれない」の結合関係においては、(12)のようにテンス形式の対立が2つの位置に見られるということである。

(12)

$$\text{来} \left\{ \begin{array}{c} \text{る} \\ \text{た} \end{array} \right\} \text{らし} \left\{ \begin{array}{c} \text{い} \\ \text{かった} \end{array} \right\} / \text{かもしれない} \left\{ \begin{array}{c} \text{い} \\ \text{かった} \end{array} \right\}$$

いうまでもなく、時制は命題を時間軸上におくことで節を具体化するという機能を有するが、ひとつの節でこれを2度おこなうということはいえなない。(12)では、話者がリポートしているのは「来る (来た)」という内容であり、「らしい (らしかった)」は命題内容の妥当性についていわば話者が外部的な視点からその命題を評価していると解釈するのが自然である。このような解釈にたてば、描かれる経験世界を時間的に具体化するテンス形式は最初の「る・た」であり、後出のテンス形式の対立は、話者の視点を表すための手段として使われているということができる。したがって、(12)における「い・かった」は形式上テンスであるが機能的には話者の視点を具現する要素であり、対人的機能に関わるのである。この点に鑑み、このようなテンス形式は「時間的視点マーカー (Temporal Viewpoint Marker)」と呼び、テンスマーカー (Tense)」とは区別することとする。

一方、伝統的な日本語研究ではふつう「らしい」と「べきだ」は助動詞として扱われるが、(11)に示されているとおり、その用法は(10)のような独立的用法がないばかりでなく、テンス形式の対立も(13)のように(12)で見た場合とは根本的に異なる分布を示している。

(13)

$$\text{来} \quad \text{る} \quad \text{べき} \left\{ \begin{array}{c} \text{だ} \\ \text{だった} \end{array} \right\} / \text{ねばならな} \left\{ \begin{array}{c} \text{い} \\ \text{かった} \end{array} \right\}$$

この例で、「べき」は命題部で述べられる内容を当然の事態として描写するマーカーであり、「ねばならな」は命題部で述べられる事態が義務として課せられ

ている状況を描写するマーカーであると解される。したがって、このような形式に対しては、助動詞ではなく「事態制御マーカー (Event-Control Marker)」という機能的レーベルを付与することにしたい。この事態制御マーカーは、いずれもある力によって制御された経験世界のありようそのものを表しているのであり、「べき」が具現する「当然」および「ねばならぬ」が具現する「義務」は命題内容の作用域に含まれる経験的意味である。言い換えれば、過程中核部がおかれたあとさらに経験的意味を担う要素が後続する場合、過程中核部はあたかも「原形不定詞」のごとくテンスの対立が保留され、経験的意味を完全に作用域に含んだところでテンス対立が起こるのである。

以上の考察から、テンス形式の少なくともひとつは時間を表し、命題をひとつのまとまりとして完結させるという機能を有する一方で、テンス形式は話者が経験世界を眺めるための視座を定める手段としても使われるのである。この意味で、「た」を助動詞とする北原 (1977)、北原 (1981) および森田 (2007) などの主張は、上述の条件下において不当なものとは言いきれない。しかし、テンス形式が非過去であれ過去であれ、そのような解釈をするためには、それが結合する助動詞そのものが機能的に分化されているということを看過してはならないのである。

本研究では、助動詞の研究を出発点として、品詞論およびモダリティー論における助動詞の扱いには問題点があることを指摘したが、日本語で助動詞と呼ばれる形態は、英語の法助動詞のように定性オペレータという一定の文法機能を有しつつ、それがモーダライゼーションかモデュレーションかという点で多義的であるという性格のものではない。日本語では、伝統的に助動詞とよばれる形態もそうでない形態も、まず機能が分化されており、Halliday のモーダライゼーションに相当する妥当性是对人的機能に、モデュレーションに相当する事態制御は観念構成的機能にそれぞれ属するのである。このようにして見ると、なぜ伝達的単位の中にあっても単独で現れることができないのか、さらにはなぜ過程中核部においてテンス形式の対立が起こらないのかという問題は、事態制御マーカーが命題の一部を表す経験的意味として機能していると考えることによって説明されるのである。

助動詞を含む節末表現は、機能的観点から妥当性マーカーと事態制御マーカーという2つの異なる要素として大別されることを見た。しかしながら、3節の(7)で見たように、この2要素に含まれる形式は、さらに複雑な統合関係を形成する。(13)で(7)を再掲する。

(13) = (7) 有為子は自転車に乗るべきだったかもしれなかったらしい

この例にあるように、同じ妥当性から得られるマーカーであっても、その中で「かもしれな」が可能性を、「らし」が伝聞を具現するというように、異種の素性が付与される場合は共起することが可能であり、その語順は命題に対する指向性が高い形態ほど先行要素となり、逆に聞き手に対する指向性が高い形態ほど後におかれる傾向がある。事態制御マーカーと妥当性マーカーの統合関係と独立性の分布は、図1のように示すことができる。

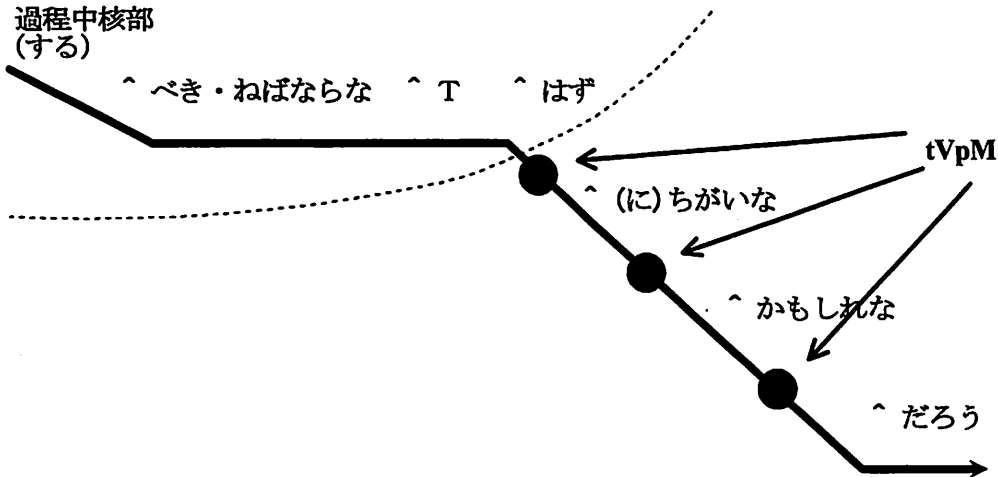


図1 事態制御マーカーおよび妥当性マーカーの統合関係と独立性

図1では、時間を具現するテンス(=T)が事態制御マーカーである「べき・ねばならな」に隣接する後続位置に置かれ、時間的視点マーカー(tVpM)がそれぞれの妥当性マーカーに後続する境界位置に付加されることが●で示されている。さらに、各マーカーが伝達的単位内で独立して生起するかは、図1内の点線によって境界が示されている。面白いことに、「はず」は後に時間的視点マーカーを伴う妥当性マーカーでありながらも、それがテキスト内に単独で現れることはない。このことは、この要素が聞き手よりも命題に対する強い指向性を具現するためであると解される。

このように、日本語はとかく語順が自由な言語といわれるが、いわゆる節末表現とされる形式の統合関係的配列は固定され、その順序を決定づける要因は観念構成的および対人的機能への分化によるものということができる。ただし、図1が示すように、この機能的分化は不連続的な二分法によるのではなく、命題と聞き手を両極とする連続体(cline)を形成すると見るべきなのである。

## 5. おわりに

本研究では、現代日本語において、いわゆる助動詞には経験的意味を具現する観念構成的機能と、話者の心的態度を具現し対人的機能に関わるものがあることを示した。このような機能的分析では、狭義での助動詞のみならず、「かもしれない (い)」や「ねばならぬ (い)」のような、ともすればさらに細かな形態素からなる複合形式ともいわれる形態を、「だろう」や「べき」のようないわゆる助動詞と機能的に等価なものとして分析することが可能である。このような分析法では、ある形態がひとつのまとまりとして完全に意味化された素性を具現すると考え、節の語彙文法構造においても意味ベースの機能的分析が要求される。したがって、助動詞を含むこのような節末表現は、「事態制御マーカー」および「妥当性マーカー」と呼ぶ2つの範疇に分けられることになる。前節で見たとおり、これは単なる意味解釈上の区別ではなく、それぞれの形態がテンス形式とともに一定の作用域を形成することからも明示的な分析をおこなうことができる。

現代日本語は、節末部において複合的な形態素がひとつの「モダリティー表現」として文法化された要素も含めると、古典日本語の助動詞にくらべその意味・用法は大きく変化しているといえる。このような現代日本語の実態に即して日本語テキストを記述するのであれば、品詞論的な見方においてふつつ付属語とされる助動詞がなぜ単独で現れる形式があるのかを説明するためには、キョートグラマーで示されている伝達的単を基本的分析単位としなければならない。事態制御マーカーが過程中核部と切り離して現れることがないのは、それが経験的意味を表し、すなわち命題内の一要素として機能するからである。それに対して妥当性マーカーは命題部の境界より外側に作用域を持つ要素であるために、単独でいわゆるピリオド越えも可能となる。

本研究は、キョートグラマーを記述的枠組みとする日本語分析に寄与する一環としておこなわれている。今後は、本稿で提案した分析法をさらに発展させ、一方で意味的選択体系網の構築を進めるとともに、伝達的単位の中で、たとえばスーブラテーマが構築する展開パターンにどのように参与しているか、そしてさらに、伝達的単位の終末部の境界設定に一定の役割をはたしているかどうかを明らかにしていきたい。本研究が今後 SFL および日本語研究におけるキョートグラマーの発展に寄与するものであれば幸いである。

参考文献

- 北原美紗子 1977. 「助動詞 (3)」大野晋ほか『岩波講座 日本語 7 文法Ⅱ』岩波書店
- 北原保雄 1981. 『日本語助動詞の研究』大修館書店
- 龍城正明 1998. 「選択体系機能言語学における finiteness に関してー日英語比較対照の観点からー」同志社大学英語英文学研究 No.69.
- 益岡隆志 2007. 『日本語モダリティ探求』くろしお出版
- 森田良行 2007. 『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版
- Halliday, M.A.K. and Matthiessen, C.M.I.M. 2004. *An Introduction to Functional Grammar, Third Edition*. Arnold.
- Huddleston, R. 1976. 'Some theoretical issues in the description of the English verb'. *Lingua* 40, pp.331-383.

## **Grammatical Intricacy, Genre, Language Function and Pedagogy**

**Howard DOYLE**

**Kochi University**

### **ABSTRACT**

In Systemic Functional Linguistics, (SFL) Grammatical Intricacy (GI) often goes underplayed or unnoticed, yet it is a measurable phenomenon based on an established principle of language analysis. This paper primarily attempts a critical discussion of its validity and utility value for pedagogical purposes. First the bases for this principle are reviewed and its application is demonstrated. Genre and language functions are considered for their bearing on the utility value of GI. Finally, suggestions for its pedagogical applications are given based on outcomes of the discussion.

-

My interest in GI developed from a pedagogical need: basically to provide a basis for a short grammar course to university students of English as a foreign language (EFL). Rather than specific or explicit language points and with no opportunity for diagnosing students' needs, the broader, more holistic aim of grammatical consciousness-raising was adopted. As GI is countable (demonstrated later), it was planned that through the process of examining texts and calculating their GI, students could increase and register their grammatical consciousness. To gauge and assess progress and achievement, tasks involving transformation of spoken language texts into written language, and written language texts into spoken, emphasising accurate and appropriate grammatical choices were incorporated. In effect students were using their existing grammatical knowledge and repertoire in the context of a fixed communicative function. Twice the course has been delivered and each time almost all students have performed the tasks satisfactorily and in post-course questionnaires have stated explicitly learning more about various grammatical forms and functions and other features of spoken and written language (reported in Doyle and Ishinuki, 2007).

In the course of these programs GI analysis was found to be problematic, as shall be discussed later. These problems become apparent when differences between spoken and written

language are considered. Figure 1 lists features of these two modes, assuming that spoken and written texts are constrained only by their topic and message content and intended audience. The first three points are commonly observable phenomena, while the latter points are salient features drawn from relevant literature.

	Written Language		Spoken Language
Commonly	shorter		longer
observable	(generally speaking) fewer clauses		(generally speaking) more clauses
	(in particular genres) more		(in particular genres) less challenging
	challenging lexis		lexis
	Audience usually not immediately		Audience frequently immediately present
	present when the language is		causing immediately introspective and
	produced		subjective choice and variation of
			language and message content to meet
			for contextual and pragmatic
			requirements for effective
			communication
From relevant	lexically dense	Halliday 1985	<b>grammatically intricate</b>
literature	"... modal tendency is process	Halliday 1985 p	"... modal tendency to represent
	oriented"	81	phenomena as facts"
	"... organised and grammatical"	Baynham 1995	"... disorganised and ungrammatical"
		p 128 (NB.	
		Baynham	
		considers these	
		to be "Myths")	
	"... organisation of language is	Baynham 1995	"... organisation of texts is
	<i>crystalline</i> "	p 129	<i>choreographic</i> "
	<b>"grammatically simple"</b>	Baynham 1995	"lexically sparse"
		pp 128-29	

Figure 1: *Some Contrastive Features of Spoken and Written Language*

The highlighted features relating to grammar lend themselves easily to GI. Below, three approaches to GI are presented and discussed. In a nutshell, GI is observable simply by focussing on units of language at certain levels (ie word, phrase or phrase group, clause, clause complex, etc.) in which organisation of the language or the meaning conveyed in the language is organised.

At each level, GI has the common characteristic of being measurable and quantifiable as ratios, normally with reference to the total number of words in the text. However, the ways to measure vary from that point on. Below, three approaches to GI are demonstrated and critically discussed: GI according to *grammar word-count*, *grammatical clause-count*, and *ideational clause-count* in relation to total word number.

### **Grammatical Intricacy:**

#### **i. Grammar Word-Count**

The first approach to GI springs from the lexical density phenomenon more commonly discussed in the systemic functional grammar (SFL) field. Halliday (1985 pp 61 – 62, 80 - 81) demonstrates how this principle operates in a series of example sentences, of which a selection are reproduced below. Included also are counts for numbers of Lexical words (L) and Grammar words (G); also Total word-count (T) and Clause-count (C); and GI ratios according to Grammar Word-Count (GWC) and GI according to Grammatical Clause-Count (GCC – examined later).

In these examples, Halliday considers grammar-words - words of syntactical significance - inversely to words of significant lexical or semantic value. The increase in grammar words is noticeable but without significant inverse decreases in lexical words. Hence the spoken versions are longer. Elsewhere Halliday (1985 pp 82 – 89) refers to clauses and clause-complexes (similarly referred to as ‘sentences’) as syntactical units being the basis of spoken language organisation. If this analogy is applied to the examples in Table 1 the clause counts would be as listed below.

Other features of these examples are:

- The sentences seem to be short chunks of longer texts, and are therefore reproduced out of context. This removes much of their communicative purpose and situational pragmatics making it nigh impossible to consider their fuller significance.
- However spoken language of texts longer than these examples usually necessarily includes more information than written (for instance for pragmatic orientation purposes such as deictic reference – “this” referring to the whole first clause in Spoken Language Example 2 is illustrates this point). This feature offers one reason for spoken language to be longer than written

	Written	Spoken
1.	<p>Investment in a rail facility implies a long-term investment (L:7; G:3) T: 10; C: 1 <math>GWC: 3 / 10 = 0.300</math></p>	<p>If you invest in a rail facility, this implies that you are going to be committed for a long time (L:7; G:13) T: 20; C: 3 <math>GWC: 13 / 20 = 0.650</math></p>
	$GCC: 1 / 10 = 0.100$	$GCC: 3 / 20 = 0.150$
2.	<p>The growth of attachment between infant and mother signals the first step in the development of a child's capacity to discriminate amongst people. (L: 12; G: 11) T: 23; C: 2 <math>GWC: 11 / 23 = 0.478</math></p>	<p>When an infant and its mother start to grow attached to each other, this is a sign that the child is beginning to discriminate amongst people. (L: 10; G: 16) T: 26; C: 5 <math>GWC: 16 / 26 = 0.615</math></p>
	$GCC: 2 / 23 = 0.087$	$GCC: 5 / 26 = 0.192$
3.	<p>A grey-faced Dr Coffin unlocked the door. (L: 6; G:2) T: 8; C: 1 <math>GWC: 2 / 8 = 0.250</math></p>	<p>Dr Coffin unlocked the door, and as he did so his face was grey. (L: 5; G: 9) T: 14; C: 3 <math>GWC: 9 / 14 = 0.643</math></p>
	$GCC: 1 / 8 = 0.125$	$GCC: 3 / 14 = 0.214$

Table 1: *Examples of Lexical and Grammar Word Counts, Grammar-Word and Grammatical Clause GI* (Source: Halliday 1985 pp 61 – 62) (NB Grammatical clauses include both finite and non-finite clauses (as long as the main verb morpheme is a process rather than nominalisation; calculations rounded off to the next decimal.)

- Halliday's intention is to demonstrate lexical density rather than GI thus seeming to use the written texts as starting points for making spoken-language paraphrases. In this sense different language forms (including grammatical) are used across different language modes

to achieve the same generic function. However paraphrasing as such can also go in the other direction, from spoken into written.

Thus in summary here grammatical intricacy is demonstrated from two angles: grammar word-count and grammatical clause-count. So far the grammatical intricacy principle remains constant. Or does it?

ii                    **Grammatical Clause-Count**

Gerot and Wignell (1994 pp 162 -3) present clause-count as the way to measure GI. This is in spite of the realisation that grammar word-count increases in spoken language as Halliday inadvertently showed when demonstrating lexical density. Gerot and Wignell (p 163) emphasise the grammatical complexity and extra information common in clause complexes in spoken language (though without providing any reason for it) in contrast to written language.

Besides this, so far in this paper there are no new points regarding GI outside of the literature. Yet in the courses referred to at the outset, GI was demonstrated and students actually attempted clause-count GI calculation of a spoken-language Explanation text and a written-language paraphrase of it. It was actually students who pointed to an anomaly with GI by grammatical clause-count. Eventually this anomaly was found in analyses of texts in two out of three genres, in that the written language texts had higher GI than spoken language texts, in contrast to the accepted GI principle.

Table 2 shows calculations of GI by grammar word-count, grammatical clause-count and ideational clause-count (discussed in the next section). The written and spoken texts of the three genres – Explanation, Process and Advice – are ‘artificial’ rather than ‘authentic’ texts (the distinction is made below) composed for their ease of contrast between spoken and written modes, for instance with unreported speech in the process and advice texts to highlight the distinction. The anomalous scores occur both in ideational clause-count GI for the Explanation and Advice genre texts and the grammatical clause-count GI for the Explanation genre texts. They are highlighted in grey in Table 2, and are anomalous because they show negative percentage differences between the GI ratios for the spoken and written texts, calculated as

$$(Spoken\ text\ GI - Written\ text\ GI) \ / \ Spoken\ text\ GI \ [as\ a\ percentage]$$

Negative figures as such develop simply if the written text GI ratio is larger than the spoken one. In the analyses presented in this study – which are too few to be generalisable – most GI

<b>Text Genres</b> according to mode	Grammatical Intricacy by <b>Grammar Word-Count</b> [no. of grammar words / total no. of words]	Grammatical Intricacy by <b>Grammatical Clause-Count</b> (including non-finite clauses) [no. of clauses / total no. of words]	Grammatical Intricacy by <b>Ideational Clause-Count</b> [no. of clauses / total no. of words]
<b>Explanation</b> (Spoken mode)	72 / 118 = <b>0.610</b>	15 / 118 = <b>0.127</b>	16 / 118 = <b>0.135</b>
<b>Explanation</b> (Written mode)	24 / 47 = <b>0.510</b>	4 / 47 = <b>0.085</b>	7 / 47 = <b>0.149</b>
GI Ratio Percentage Differences between Spoken and Written-Mode	16.3%	33.0%	- 10.3%
<b>Process</b> (Spoken mode)	64 / 105 = <b>0.610</b>	17 / 105 = <b>0.161</b>	20 / 105 = <b>0.190</b>
<b>Process</b> (Written mode)	33 / 71 = <b>0.465</b>	11 / 71 = <b>0.155</b>	12 / 71 = <b>0.169</b>
GI Ratio Percentage Differences between Spoken and Written-Mode	23.7%	3.7%	11.0%
<b>Advice</b> (Spoken mode)	121 / 201 = <b>0.602</b>	34 / 201 = <b>0.169</b>	38 / 201 = <b>0.189</b>
<b>Advice</b> (Written mode)	47 / 89 = <b>0.528</b>	16 / 89 = <b>0.180</b>	18 / 89 = <b>0.202</b>
GI Ratio Percentage Differences between Spoken and Written-Mode	12.2%	- 6.5%	- 6.8%

Table 2: *GI Ratios and GI Ratio Percentage Differences for Explanation Process and Advice Genre Texts in Written and Spoken Language Modes used in the Short Grammar Course.*

ratio percentage differences are positive as in theory they should be. However there are three outstanding observations to be made:

- None of the grammar word-count calculations are anomalous and they also show the narrowest range of GI ratio differences (12.2% to 23%)
- GI by grammar word-count ratios are the most consistent

- GI by clause-count may by its nature be problematic having relatively larger range fluctuations as well as negative percentage differences just mentioned.

Reasons for the inconsistencies are evident on examination of the anomalous texts. For instance the Advice written text had four non-finite clauses and two relational processes which could alternatively be nominalised thereby becoming parts of other clauses thus reducing clause-count. In other words this text maintained some language forms more common in spoken language – arguably they are not quite appropriately paraphrased as grammatically sparse written language texts.

Further speculation would suggest that, hypothetically, a given spoken or given written-language text could have some language forms or structures more common to the other modes. If so, the principle that spoken language is more grammatically intricate becomes less firm, that in reality written language can also be less organised - less ‘crystalline’ and actually sharing something of the structure of spoken language. The Advice written text (used for the Grammar course mentioned at the start and also for which GI analysis was carried out as reported in Table 2 above) for example contains elaboration with a relative clause in the middle of an independent clause –

#### Example 1

*However, long-sleeved clothes ..... [continues after next clause]*  
*which covered my back and legs [clause]*  
*... were needed*

This makes its structure more complex than it need be (the clause complex having three rather than two parts!).

An extra point relates to the basis of the GI analysis – by clause-count. Currently grammatical clause-count has turned up an inconsistent pattern in one example. A different understanding of what constitutes a clause turns up more dramatic results.

### iii Ideational Clause-Count

Sociolinguists like Fairclough (1992) demonstrate a view of language which departs from the textual and considers reasons why a text (or a chunk of text) may have resulted in the form it has and also the effects it has or may have when it is communicated. Fairclough for instance has the following discourse-based typology of

... functions of language which coexist and interact in all discourse – what I shall call the ‘identity’, ‘relational’, and ‘ideational’ functions of language. The identity function relates the ways in which social identities are set up in discourse, the relational function to how social relationships between discourse participants are enacted and negotiated, the ideational function to ways in which texts signify the world and its processes, entities and relations. The identity and relational functions are grouped together by Halliday (1978) as the ‘interpersonal’ function. Halliday also distinguishes a ‘textual’ function which can be usefully added to my list: this concerns how bits of information are foregrounded or backgrounded, taken as given or presented as new ...

(Fairclough 1992 pp 64 – 65)

These dynamics take place in a social context made up of participants in communication who are affected by their situation in that milieu, and also by factors such as power disposition and ideas (often discussed in terms of *discourses*) – all of which effect how the meaning is articulated, how it is communicated and also taken in by participants in those communication events. This point is alluded to later, but at this point this sociolinguistic aspect needs to be established in the context of the third way to do GI analysis.

Traditional grammar and also much systemic functional grammar (SFG) consider clauses as language units for syntactical organisation, especially for language as written down. This can be labelled grammatical, such as paying attention to *grammatical language functions*. At another level language has communicative functions (and of course in a sociolinguistic view, ‘social’ functions), which becomes immediately evident if clauses are considered for their ideational or informational (basically their semantic) content. In this paper this view is referred to as *ideational* – GI is and remains a phenomenon embedded in language which is the medium through which meaning (and the various functions of language) are conveyed, not the meaning or functions themselves!

This is easily demonstrated with spoken language which normally is used when a speaker has an audience present (eg conversations) or at least is quite conscious of who the audience is (eg lectures). For instance the opening of the spoken Explanation text (a model text in the Short Grammar Course runs thus:

## Example 2

OK,

*much of the instructions in the written materials in this course are in a spoken style – as if I was actually speaking to you.*

Starting with “OK,” as the first clause, syntactically, if traditional grammar rules (for written language) were applied, the only thing separating it from the second clause is the comma. Two problems with this are that it is spoken language which registers no punctuation (ie one does not say ‘*OK comma much of the instructions in this ...!*’), and that there is no verb. In other words, there is a strong case for the “OK,” to be made part of the next clause just for syntax purposes, such as:

### Example 3

*OK, much of the instructions in the written materials in this course are in a spoken style –  
as if I was actually speaking to you.*

But there are problems with this view as well: for instance, Saying “OK,” has no ideational connection with ‘instructions’ or ‘spoken style’ which are basically the key parts of the theme and rheme respectively in the second clause – the function is different. The function of ‘OK’ in traditional grammar is either nil or so hard to gauge and articulate it may as well be nil. Pragmatically its communicative function is to gather attention, to confirm that people understand something (such as that the act is about to begin) or it acts as a discourse marker signalling or introducing the next (or in this case first) stage of the explanation. The only syntactically relevant point is that the syntactical function (referred to here as *grammatical function*) of “OK,” is that it is very different from the function of the second clause. But it needs to figure somehow, simply because it was said.

Because it was said, it was communicated – probably because the speaker wanted to say (or communicate) it, and also because for all intents and purposes it was heard by an audience. This gives “OK,” a *communicative function*. This relates to the pragmatics of ‘OK’ mentioned above. If the same pragmatic goals of the speaker are maintained it is possible to envision alternative utterances which may or may not have the same grammatical structure or function:

### Example 4

*Shut up!*

*much of the instructions in the written materials in this course are in a spoken style –  
as if I was actually speaking to you.*

or

### Example 5

*Is it OK*

*if everybody listens now?*

*much of the instructions in the written materials in this course are in a spoken style – as if I was actually speaking to you.*

or

#### Example 6

*Excuse me,*

*much of the instructions in the written materials in this course are in a spoken style – as if I was actually speaking to you.*

In these examples the communicative function may remain similar or the same, but the syntax is quite different: each variation of the first clause contains a verb (the second actually is two clauses with two verbs) and much clearer verbal processes (imperative in the first and third; interrogative and behavioural in the second).

GI analyses here would vary too. For instance, grammatical clause-count for Example 3 would be 0.080 (2 clauses divided by 25 words), 0.120 (3 clauses divided by 25 words) for Example 2, 0.115 in Examples 4 and 6 (with 3 clauses each divided by the total 26 words in each), then 0.129 for Example 5 (with 4 clauses and 31 words). It needs to be remembered that this calculation has a strict grammatical base and does not consider meaning, ideational or informational content. From the other end of the spectrum, a different, ideational concept of 'clause' could throw up different calculations: the longer segment,

*much of the instructions in the written materials in this course are in a spoken style*

could be further broken up into smaller units, depending on their ideational salience within the whole text, or depending on the communicative significance the speaker puts on them (for instance through prosodic emphasis which is not easily transferable into written text). In systemic functional grammar (SFG) this is possible through the dynamic of clause complexes occurring in spoken language, which, as Halliday (1985) points out, "... yields not only clause complexes but also phrase complexes, group complexes, and word complexes" (p 66). This ideational clause view also accommodates non-finite clauses, some nominalisations and word groups with ellipted verbs because the strictness of arbitrary grammar 'rules' is removed.

This is best demonstrated by the written Explanation text: as can be seen in its GI statistics grammatical clause-count (0.085) and ideational clause-count (0.149) in Table 2. There are just four clauses in the grammatical clause-count, but seven in the ideational clause-count. There are two points worth noting here:

- The differences reflect significant variation in the concepts of clause operating;
- The larger ideational clause-count is the direct cause of the same anomaly in the GI principle as was found for grammatical clause-count in the Advice genre texts.

### Grammatical Intricacy: to sum up

It has been found that GI should be held more as a guiding tendency than a defining principle holding that spoken language is grammatically intricate and written language is not. Yet, in the GI analysis process grammatical and also discursive features of texts become more apparent, as texts become broken down into clauses or other units of language. Three approaches to GI have been discussed: grammar word-count and grammatical clause-count attend more to grammatical functions while ideational clause-count requires alternative definition of the concept of 'clause' which results in identification of units of language acting as units of meaning. In this sense, GI analysis can be seen as a tool to assist examination of communicative functions and language forms needed to perform those functions.

The next section considers the sources of texts which hold better and less well with GI analysis and how purpose embedded in the composition of such texts of such texts can be an affective factor.

### Genre and Language Function

Generally speaking, 'genre' refers to *type* of language or type of text, although in systemic functional linguistics (SFL) it has a narrower application: ie the form and/or style of language or discourse for a given social or communicative purpose. Earlier distinction was made between spoken and written language. It was across specific genres that anomaly in GI analysis was found, the point being that if clause analysis is the basis for GI then at least on occasion, written language can be grammatically more intricate than spoken. There one variable was stated to account for this in these texts, the language of the written texts actually containing features of spoken language. This suggests that, rather than arbitrary distinction between characteristic features of either spoken or written language, there is more a continuum extending from one to the other and any given text could potentially incorporate features of either for a given purpose in a given context.

A further variable evident in the examples texts in this paper is that among Explanation, Process and Advice texts, the written texts for Explanation and Advice genres were *paraphrases* of the spoken language. This is significant because the primary intention in composing these texts was to NOT use spoken language if possible – *there was no apparent intention to communicate a message to an audience*, no authentic communicative function. The Process genre texts worked in the opposite way – the initial and authentically communicative text was the written language text, the spoken one being the paraphrase. In fact this follows the pattern of Halliday's lexical and grammar word-count examples cited and given above.

In the preceding section the distinction between grammatical and communicative functions was made. Considering these at this point, it should be clear that if a given text is analysed for lexical or grammar word-count, for grammatical clause or ideational clause-count, such a text maintains more of a real-world or authentic quality than any subsequent paraphrase. This is especially true if such a text is taken from a real-world context rather than more *artificial* texts (say, as constructed by a teacher to present in their lesson or teaching materials). In this way, further distinctions can be made:

- real-world or truly *authentic* texts tending toward fuller communicative and grammatical functionality;
- *artificial* texts (essentially constructed as examples or for demonstration) with less communicative but still high grammatical functionality; and
- *paraphrase* texts with negligible communicative function and even perhaps less grammatical functionality than artificial texts (due to the intention to paraphrase in order to re-shape the syntactic or semantic content into pre-conceived form)

The point in establishing this text typology is more pedagogical than anything else. GI of course can be analysed for any text, but in the process a deeper and more detailed view of the language results. However it is more worthwhile if this serves a purpose. The next section details how language pedagogy may be served by GI.

### Pedagogy

So far no pedagogical field has been explicated, though the examples are English and the GI analyses and discussion naturally correlate. But this is not to say that GI can not be used for any other language. Possibly the only limitation is that such a language would need to be able to be recorded as text (even if a grammar system has not been drawn up for that language ideational units hopefully could still be identified). Often too it is assumed that to focus on one language is to allude to its pedagogy, which is undeniable in this paper (ie texts, examples, etc. are from English). Yet it is hoped that lessons to be drawn from this examination of GI can be extended to other pedagogical fields. An attempt is made in this section to suggest applications of GI in second and first language (L2 and L1) literacy pedagogical fields.

So far two types of language function have been differentiated: grammatical and communicative. Regarding GI, significance is drawn to this functional perspective because the analytical approaches have worked in two different ways; focus on language micro-structure on one hand; and what how meaning is conveyed and what lingua-pragmatic form it takes on the other (not to mention contextually relevant purposes if also genre is considered). Figure 2 gives a

more detailed summary of how different measures of GI could apply to investigating and understanding different types of language function.

As mentioned before, no attempt has been made to distinguish among L1, L2 and other fields of language pedagogy. However, rather than seeing arbitrary distinctions between each field, there is overlap which can be attributed to one common goal for each field: bettering a person’s language awareness. Figure 3 shows possible teaching/learning points which could incorporate different approaches to GI.

As can be seen, continuums - from language form-specific to meaning and social purpose - are shown: ie from ideational clause count to grammar word-count /lexical density; and from translation and L2 to literacy pedagogy. It could be thought that pedagogical approaches focussing on grammatical function cluster under the L2 field intersected by grammar word-count, and also those dealing with social contextual functions on one hand are concentrated around L1 and literacy pedagogy and ideational clause count on the other. However it can be seen that many pedagogical approaches lend themselves widely across the L2-literacy pedagogy continuum.

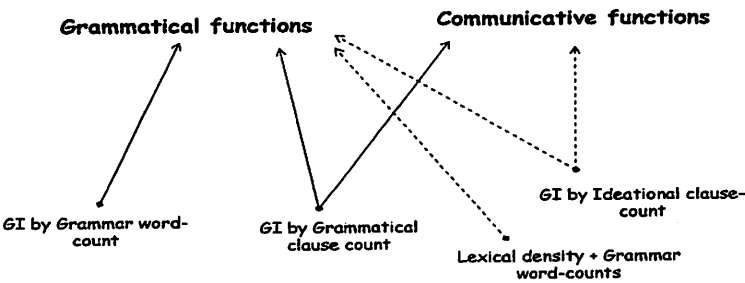


Figure 2: Applications of GI measuring systems to Grammatical and Communicative Language Functions.

Translation	-	L2 pedagogy	-	L1 pedagogy	-	Linguistic awareness/Literacy pedagogy
GI Ideational Clause-count						- Semantics awareness - Communicating meaning appropriately in various social contexts and purposes - Genre awareness relevant to literacy practices, including spoken and written
L		- Order of information - R e g i s t e r - Lingua-pragmatic awareness & more purely pragmatic awareness - Genre awareness: appropriate language for particular purposes and contexts				
GI Grammatical clause-count		- Genre awareness - across particular modes (spoken /written) in particular contexts - Reading: text readability, accessibility - M a c r o - s t r u c t u r e - Clause structure (eg binding, non-binding) - Dependent/Independent clause structure in clause complexes/sentences			- Spoken & Written language forms - Significance of mode and tenor choices	
I		- Grammatical consciousness-raising				- Register
GI Grammar Word-count & Lexical density		- Word and morpheme order - Morpheme and other grammatical forms - Micro-structure of language				
		- Contrastive language awareness (IdL/L2) - Spoken & written language forms relevant to each macro-skill				

Figure 3: *Language and other teaching/learning points potentially incorporating different approaches to GI.*

Rather the key question is how to incorporate GI analysis into any pedagogical approach. This question is complicated by the observation in this study that GI may not always follow the principle of higher GI in spoken language. Instead the GI principle should be used as a guide, whose applicability is dependent on mode, register, tenor, context and communicative purpose within a given genre.

Thus, the focus of GI in this study grammar on word-count then later on clause-count can determine GI's applicability in any pedagogical context (in terms of language function, this is demonstrated above in Figure 2). For instance, for learners to identify the significance of various ideational or pragmatically salient content of clauses, first they need to be able to recognise those clauses, which in plainer terms means they need to recognise grammar words. Then, having learners further be able to assess or calculate GI can have two pedagogical effects:

- To obtain a measure for comparing different texts from a grammatical perspective; and
- More profoundly to gain a means to view the syntactical structure of language in a holistic and also contextualised way.

This was the approach and goal of the five-lesson grammar course described at the outset. Post-course feedback from students reported elsewhere (refer to Doyle and Ishinuki, 2007) produced numerous references to: concepts of 'clause' and genre; more grammar in occurring in spoken language; distinguishing between grammar words and 'content words'; mentioning various specific language forms which had occurred in texts they had to paraphrase – suggesting increased holistic awareness of language and specific language points in the texts they had to take in and to produce. Consequently there was some measure of success, but if more time had been available more attention to genre and contextualised use of language could have incorporated - more scope as represented in the horizontal axis in Figure 3.

### **Conclusion**

GI could do with a great deal more investigation across a greater range of genres and larger number of texts than in this study. However it has been found that GI according to grammar word-count seems to lie closest to the original GI principle asserted by Halliday. This brings this study back full circle to where it began – GI as the less noticed component of lexical density analysis. Even so it has been shown how variations of GI measurement can shed light on different kinds of language functions in given texts of different genres communicated for different purposes.

### **References**

- Baynham, M. (1995) *Literacy Practices: investigating literacy in social contexts*, Harlow: Longman
- Doyle, H. & Ishinuki, F. (2007) *Experiences with Action Research: Seeking Effective Ways to Do Japanese Writing and English Grammar Lessons*. PowerPoint Presentation at JALT Nagasaki, 30 June 2007.
- Fairclough, N. (1992) *Discourse and Social Change*, Cambridge: Polity Press.
- Gerot, L. and Wignell, P. (1994) *Making Sense of Functional Grammar*, Cammeray: Antipodean Educational Enterprises.
- Halliday, M. (1985) *Spoken and Written Language*, Geelong: Deakin University Press.

日本語・英語の「説得」：観念構成的意味を中心に  
“Persuasion” in Japanese and English: Ideational Meanings<sup>1</sup>

佐藤（須藤）絹子  
Kinuko SATO (SUTO)

元・東北大学大学院  
Tohoku University, Graduate School

Abstract

This paper aims to reveal Japanese and English ways of persuasion by observing lexico-grammatical choices found in texts of “persuasive meta-genre”. Persuasive meta-genre consists of texts that have a shared purpose of making a proposal by promoting a product/service to potential customers/consumers. Text examples are taken from expositions, reports, newspaper articles, magazine ads, narratives, or a catchphrase/slogan. Firstly, the functional/meaning structure of persuasive meta-genre will be observed by focusing on the fractal pattern of Problem-Solution. Secondly, Japanese and English ways of persuasion will be considered by elucidating lexicogrammatical choices for Problem-Solution and contextual factors that affect the choices.

1. 研究概要（目的と方法）

本研究では、選択体系機能理論 Systemic Functional Theory の思考法に基づき、読み手にマクロ提言 macro-proposal の遂行を説得する日本語・英語のテキスト群（「説得のテキスト群」）の意味のしかたを総合的に明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の三点が主眼である。

---

<sup>1</sup> 本稿は、2007 年に東北大学大学院 国際文化研究科 言語機能論講座 に提出した博士論文 *Lexicogrammatical Resources of Persuasion in English and Japanese: Meta-categorisation of Persuasive Genres*（英語と日本語における説得のための語彙-文法的資源 — 説得のジャンルのメタカテゴリー化 —）要旨を改正したものである。

## ● 機能的枠組み

第一に、説得のテキスト群というメタジャンル meta-genre を想定し、ジャンルの区分を超えたテキスト間の連続性を示す。具体的には、様々なジャンルに属する説得のテキスト群を比較分析し、「問題-解決法」のフラクタルな構造という観点から、説得のテキスト群がもつ機能構造上の共通性を論じる。このことで、様々な段階構造や長さをもつテキストとして具現される説得のテキスト群を、同じ機能（意味）的枠組みで説明できるようにする。分析テキストには、以下のものを含む。

### <分析テキスト：一部>

#### <英語>

1. 政府文書： *New Labour: Because Britain Deserves Better*. Labour Party. 1997
2. 新聞社説： *The Bush Doctrine*. The New York Times. September 22, 2002. p.6
3. 雑誌広告： *Domestos*. British Country Homes & Interiors. 2004. p.93
4. 物語： *The Crow and the Pitcher*. The PaperLess Readers Club. <http://www.fullbooks.com/5817.html>

#### <日本語>

1. 政府文書： 『民主党の政権政策 MANIFESTO（マニフェスト）』 民主党 2003
2. 新聞社説： 『脱線事故 人間のミスを補うには』 朝日新聞 2005年9月7日
3. 雑誌広告： 『アタック漂白剤 in』 LEE 2003 12月号 pp.106-7
4. 物語： 『はなさかじいさん』 いもとうこ 2000 東京：岩崎書店

## ● 語彙-文法的枠組み

第二に、説得のテキスト群の語彙-文法的資源を分析するための枠組みを構築する。具体的には、情報の具体性 specificity と介入可能性 negotiability という観点から、書き手が考える「問題-解決法」を、読み手に対して承認された事実として共有させるための語彙-文法的資源を考察する。分析テキストは、以下のとおりである。

<分析テキスト：一部>

テキスト① 政府文書

↑ ↑ ●The Bush Doctrine (The National Strategy of the United States of America『国家安全保障戦略』) 2002年9月20日  
●作成 ●反対 ☆先制攻撃を容認することを明言し、後にイラク攻撃を行う根拠になった文書

テキスト② マスメディア

●The New York Times 2002年9月20日、22日  
☆ブッシュ政権の軍事戦略についての新聞記事

テキスト③ 国民(読者)

●Letters to the Editor (The New York Times) 2002年9月27日  
☆新聞記事を読んだ読者の反応

● 説得の方略の分析

第三に、機能的枠組み、語彙-文法的枠組みの両方を用いて、説得の方略という観点から具体事例 instance を比較分析する。具体的には、問題-解決法のパターンと、その具体性・介入可能性という二つの次元から、日・英与野党の政党マニフェストの類縁性をとらえ、それぞれの選択に影響を与えるコンテキスト要素との関連性を示す。このため、以下のテキストを分析した。

<分析テキスト>

<英国>

テキスト① 与党のマニフェスト

↑ ●British Conservative Party (1997) You Can Only Be Sure with the Conservatives.  
(The Conservative Manifesto 1997) ☆主要政策 “1. Jobs and the Economy”  
●賛合

テキスト② 野党のマニフェスト

●British Labour Party (1997) New Labour: Because Britain Deserves Better. (The Labour Party General Election Manifesto 1997) ☆主要政策 “1. Education”

<日本>

テキスト③ 与党のマニフェスト

●日本自民党 (2003) 『小泉改革宣言 自民党政権公約 2003』  
●賛合 ☆主要政策 「宣言 3: 行政のムダをはぶき、簡素で効率的な政府を目指します。」

テキスト④ 野党のマニフェスト

●日本民主党 (2003) 『民主党の政権公約 Manifesto』  
☆主要政策 「約束 3: 道路公団を廃止し、高速道路の料金を無料にします。(3年以内)」

## 2. 理論枠組み

M.A.K Halliday の選択体系機能理論 Systemic Functional Theory (以下 SFT, cf. Halliday 1994, Halliday and Matthiessen 2004) は、以下の点において、当研究の枠組に適している。

➤ SFT は、意味層、語彙-文法層、音韻音声/書記層という三層で言語の意味を捉える。したがって、説得のテキストが、「問題-解決法」という内容(意味層)をどのような表現(語彙-文法層)で具現しているかを具体的に分析することができる。

➤ SFT は、単一の語 word から成るテキストや、言語以外のテキストも選択によって意味をつくと想定する。したがって、言語に対して画像が占める割合の大きい雑誌広告なども、分析対象として説得のテキスト群に含めることができ、言語と画像が協同してつくる包括的な意味を分析することができる。

➤ SFT は、言語をそれが用いられるコンテキストや語り手の価値観・イデオロギーとの関係で捉える。したがって、テキストの機能的・語彙-文法的選択(意味層、語彙-文法層)が、どのようなコンテキスト要素の影響を受けて選択されたのかを明らかにすることができる。

このような SFT の思考法を拠り所としながら、書き手の選択が作り出す「説得の方略」を明らかにし、またそれを解釈するための手立てを探った。

## 3. 研究結果

### 3.1 機能的枠組み：「問題-解決法」のフラクタルな具現

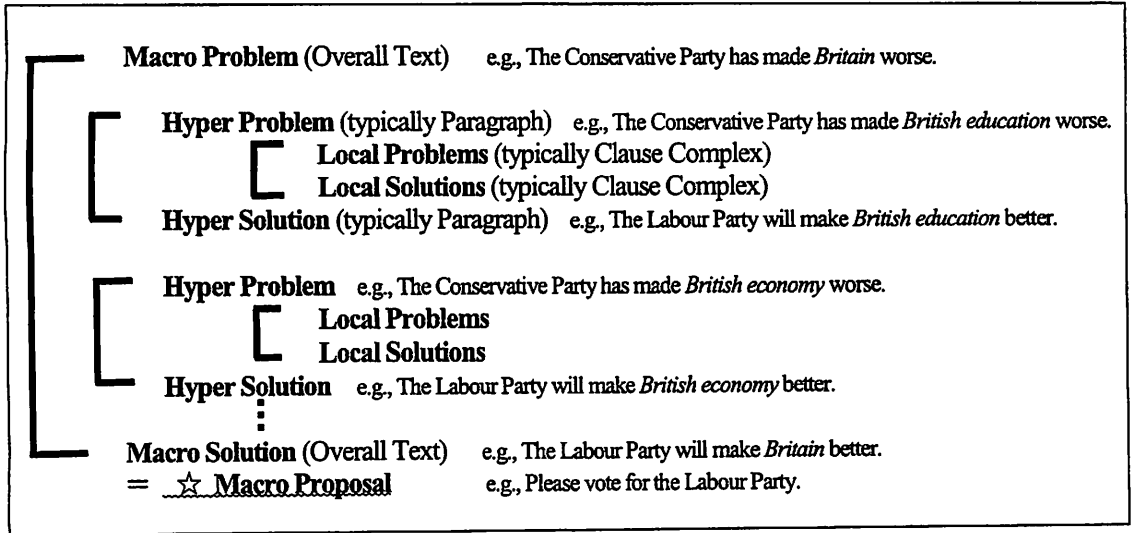
ここでは、説得のテキスト群の機能構造を考察し、マクロ提言の遂行を促すテキストの意味構造を分析する。

説得のテキスト群は、「問題-解決法」という機能構造、具体的には、課題の提示(Problem)とその課題の好ましくないものとしての構築(Negative Evaluation)をする「問題」、解決法の提示(Solution)とその解決法の好ましいものとしての構築(Positive Evaluation)をする「解決法」を共有する。

図 1 のように、「問題-解決法」は、テキストの大小様々なレベルで重

層的かつフラクタル<sup>2</sup>に具現され、Macro → Hyper → Local の順に、より下位の階層の問題-解決法がより上位の階層の問題-解決法を具体化する。一番上位の解決法 (Macro-Solution) は、テキストが説得するマクロ提言に当たる。

図 1 説得のテキスト群の機能構造：「問題-解決法」のフラクタルな具現  
例：英国労働党の選挙マニフェスト (1997)



語彙-文法的な視点からは、「解決法」の内容は、「問題」とその有害さ (= 否定的評価) を語彙-文法的に示すことで、間接的に伝えることができる。つまり、語彙-文法的には、図 1 の機能構造のうち「問題」が必須・義務的要素である。このような規則を踏まえると、様々な形態の説得のテキスト群を、図 1 に示した一つの機能 (意味) 的枠組みで捉えることができる。テキストの分析により、図 1 の機能構造が、多様なジャンル (政府文書、新聞記事、雑誌広告、物語) の形式、様々な長さ (一冊の本、一つの名詞群から成るキャッチフレーズ) のテキストとして具現されることが分かった。

### 3.2 語彙-文法的枠組み：前提の共有化・旧情報化

ここでは、説得のテキストの語彙-文法的資源を考察するための分析枠組みを構築し、説得のテキストにおける語彙-文法的資源の選択とマクロ提言の説得との関係を考察する。ここでの議論の基盤となる概念は、「前提の共有化・旧情報化」である。読み手を説得するためには、テキストの情報を既に承認

<sup>2</sup>フラクタルな構造とは、同じパターンが様々な規模で繰り返される構造である (Halliday and Matthiessen 1999: 26)。

された既知の事実として構築・伝達し、読み手に共有させることが必要だからである。この前提の共有化のための資源として、次の二つを挙げたい。

「前提の共有化・旧情報化」：既に承認された既知の事実としての構築

① 主題/旧情報の位置（節頭）に現れる：

節は相互作用者の既知情報を出立点とするから⇒新旧情報構造

② 物化される：物の中身にある意味関係については問えないから

⇒文法的比喩（名詞化）

これらの観点から分析することで、説得のテキストの機能構造が、どの程度既成の事実として提示されているか、あるいは解釈や吟味が可能な情報として提示されているかを考察することができる。

①の新旧情報構造に関しては、書き手は、読み手が既に知っているはずの内容を節頭に置き、それを前提として新情報を後続させる。したがって、ある情報を旧情報の位置（節頭）に提示することで、その内容を承認された事実として構築することができる。

②の文法的比喩は、意味層と語彙-文法層における選択の不一致から生じる。両層の選択が一致し、自然な結びつきが生じるのは、意味層では物、語彙-文法層では名詞群の選択がされる *boat* のような場合である。一方、例えば意味層ではできごとが選択されたのに、語彙-文法層では（意味と一致した表現である過程中核部を含む節ではなく）名詞群が選択された場合には、名詞化という文法的比喩が起こる。この場合、できごと全体が一つの物として構築されているため、その内部の意味関係は、反駁できない事実として構築される。

これらの分析枠組みは、説得のテキストにおける語彙-文法的要素の選択とマクロ提言の説得との関係を考察する際に有効だと考えられる。例えば、米政府がイラクへの先制攻撃の妥当性について述べた文書（米国防報告）と、その文書の内容を報道する新聞記事（インターテキスト群<sup>3</sup>A）との関係をみると、新聞記事は、政府の見解に対する賛否両方の意見を述べてはいるものの、政府が説得する「マクロ解決法」とそれに対する「マクロ問題」に

<sup>3</sup> インターテキストとは、引用や言及、話題の共有などを通して結びつき、互いに前提にしあうテキスト群である（cf. Lemke 1995: 23）。この場合、新聞記事は、政府文書の内容に言及し、話題を共有するテキストという点で、政府文書のインターテキストである。

関しては、政府の見解の旧情報化・前提の共有化を進めていることが分かる。

下線：問題    太字：解決法    囲み    論理-意味的關係（因果関係）

(1) 政府文書（米国防報告）：「問題」が物であり旧情報の位置

Defending the United States **requires** prevention and sometimes pre-emption.

**Striking first** to prevent aggression (is not unreasonable ...)

(2) 新聞記事（The New York Times）：「問題・解決法・論理-意味的關係」が物であり旧情報の位置

上記の例では、政府文書では、*defend the United States* という「問題」が物として構築され、節頭の旧情報位置に現れている。一方で、その内容を報じる新聞記事では、同じ内容の「問題」に加えて、政府文書では新情報の位置にあった「解決法」と両者の論理-意味的關係（因果関係：目的）が、節頭の旧情報位置で一つの物として具現されている。このように新聞記事は、政府文書の提案する「マクロ問題-解決法」に関して、旧情報化を進めていることから、政府文書的前提を共有し、説得に応じていることが分かる。

本研究では、②の文法的比喩（名詞化）に関して、意味と一致した表現と文法的比喩という単純な二分法ではなく、様々な比喩化のレベルを想定し、連続体 *cline* として整理した。連続体とは、各要素がある範疇に属しているかないかという二者択一的な思考法とは対照的に、様々な中間体を許容する考えかたである。この連続体上に語彙-文法的資源を序列化する基準としては、情報の「具体性 *specificity*」と「介入可能性 *negotiability*」という観点をを用いた。

・ 具体性 **Specificity**: 「意味層」で選択された過程構成（“why/when/where/how/ who does what to whom”）の要素が、読み手に対してどの程度まで「語彙-文法的」に明示化されているか。

・ 介入可能性 **Negotiability**: 読み手による表現への介入（命題内容の疑問化・否定化）がどの程度可能か。

この連続体を利用することで、説得のテキストで、「問題」「解決法」の意味内容を具現するのに、どの程度「具体性・介入可能性」のある語彙-文法的要素が選択されているか、つまり、それらの内容がどの程度「前提を共有化された既成の事実」として、あるいは「解釈や吟味が可能な情報」として提示されているかを分析することができる。例えば、*The politician*

*illegally accepted political donations from public-works contractors* という「問題」は、定性をもつ階層遵守節（節として具現されたできごと）と具体名詞（名詞群の主要部として具現された物）を両極にもち、具体性・介入可能性の段階的移行を示す連続体上の、様々な語彙-文法的要素として具現できる。

意味と一致した表現： 具体性・介入可能性 **高**

↑ ●節として具現された「できごと」

‘The politician illegally accepted political donations from public-works contractors.’

●依存節（時や条件などの状況）として具現された「できごと」

‘When the politician illegally accepted political donations from public-works contractors, (he has been charged with tax evasion).’

●被投射節として具現された「できごと」

‘(The newspaper reported that) the politician illegally accepted political donations from public-works contractors.’

●階層下降被投射節として具現された「できごと」

‘(the report that) the politician illegally accepted political donations from public-works contractors’

●名詞群の主要部として具現された「できごと」 & 修飾部による修飾  
‘the illegal acceptance of political donations’

●名詞群の主要部として具現された「物」

↓ ‘the graft’

文法的比喩（名詞化表現）： 具体性・介入可能性 **低**

このような具体性・介入可能性の度合いという観点から、イラク攻撃開始（「解決法」）を議会に説得するためにブレア首相が 2003 年に発表した報告書（インターテキスト群 B）を分析した。この報告書では、イラクは 45 分以内に核兵器を整備できるという情報（「問題」）が提示され、後にこの情報が「イラクの大量破壊兵器の脅威を政府が誇張した疑惑」の対象として話題になった。この報告書の作成過程を考察すると、イラクの大量破壊兵器保有の情報（「問題」）が、草稿練り直しの過程で、段階的により具体性・介入可能性の低い表現に訂正されていたことが分かる。

太字： 名詞群主要部

節として具現された  
「できごと」

Iraq **programmes** for weapons of mass destruction.



名詞群の主要部として具現された「できごと」

草稿 A (9月16日)

Iraq's **Programme** for Weapons of Mass Destruction:  
the British Government **Assessment**



名詞群の主要部として具現された「物」

草稿 B (9月19日)

Iraq's **Programme** for Weapons of Mass Destruction:  
the **Assessment** of the British Government

最終案 (9月24日)

Iraq's **Weapons of Mass Destruction**:  
the **Assessment** of the British Government

草稿 A の主題 (*Iraq's Programme for Weapons of Mass Destruction*) では、イラクが大量破壊兵器を計画しているという過程が、記号的物として構築されている。草稿 B の副題では、節の語順(主語+述語)を保った副題(*the British Government Assessment*)が、名詞群特有の語順(主要部+修飾部)をもつ表現(*the Assessment of the British Government*)に移行している。最終案の主題 (*Iraq's Weapons of Mass Destruction*) では、名詞群主要部に大量破壊兵器という物が選択されているため、イラクが大量破壊兵器を開発しようとしているという「過程」が省略され、既に開発済みの大量破壊兵器の存在という「状態」に移行している。この語彙-文法的要素の選択の推移から見てとれるように、とりわけ政府文書などでは、特に説得のテキストの必須・義務的要素である「問題」を、具体性・介入可能性の低い語彙-文法的資源、つまり共有化された既成の事実として提示する傾向が見られた。

マクロ提言の説得という目的のためには、書き手が考える「問題-解決法」を読み手にも共有させることが必要である。ここでは、①新旧情報構造の旧情報位置におく、②名詞化表現を選択する、という二つの観点から、説得のテキストの「前提の共有化・旧情報化」について考察した。

### 3.3 説得の方略の分析

本節では、3.1、3.2 節で構築した機能的枠組みと語彙-文法的枠組みの両方を用いて、説得の方略という観点から、具体事例を比較分析する。具体的には、日英与野党の政党マニフェスト(インターテキスト群 C)を比較分析し、両国で互いに政権を競い合う政党が、自党への投票という「マクロ提言」を説得するためにどのような選択をしているかを概観する。図 2 は、機能構造の

選択パターン（横軸）と、その語彙-文法的資源の具体性・介入可能性（縦軸）という二つの次元で、四つのテキストの類縁性をトポロジー的<sup>4</sup>に表し、それぞれの選択に影響を与えるコンテキスト要素との関連性を示している。

### ●機能構造のパターン（横軸）

意味的な選択には、与党・野党としての対人的状況が関連していた。日英の野党（日本民主党、英国労働党）は、政権政党である与党の（過去・現在の）行為に否定的評価を与えることでそれを「問題」として構築し、それに対する自党の（未来の）「解決法」を示すという機能構造で、自党への投票という「マクロ解決法」を説得していた。一方、48年間与党として安泰な地位を築いてきた日本自民党は、否定的評価を与えられた「問題」ではなく、これまで自民党が達成した（過去・現在の）「課題」の継続を「解決法」として示すという機能構造で、自党への投票を促し、与党としての現状を維持しようとしていた。一方、当時の英国与党である保守党は、現状維持を目指す与党でありながら、野党と同じような機能構造を選択していた。つまり、野党第一党の労働党の（未来の）行為に否定的評価を付与して「問題」とし、それに対する自党の（未来の）「解決法」を示すという機能構造で、自党への投票を説得していた。

このような日英与党の機能構造の違いは、50年余り与党が変わらず政権交代が現実的ではない日本と、二大政党制をとり政権交代が頻繁におこる英国という政治的コンテキストの違いを反映していると考えられる。当時英国ではブレアの労働党の人気が増していたという社会的背景からしても、与党保守党の立場は、現状維持ではなく、現状を変えなければいけないという野党の立場により近かったのだと予想される。このような考察を反映させ、図2のトポロジー空間では、英国保守党を、機能構造の横軸上、野党寄りに位置させた。

### ●語彙-文法的資源の具体性・介入可能性（縦軸）

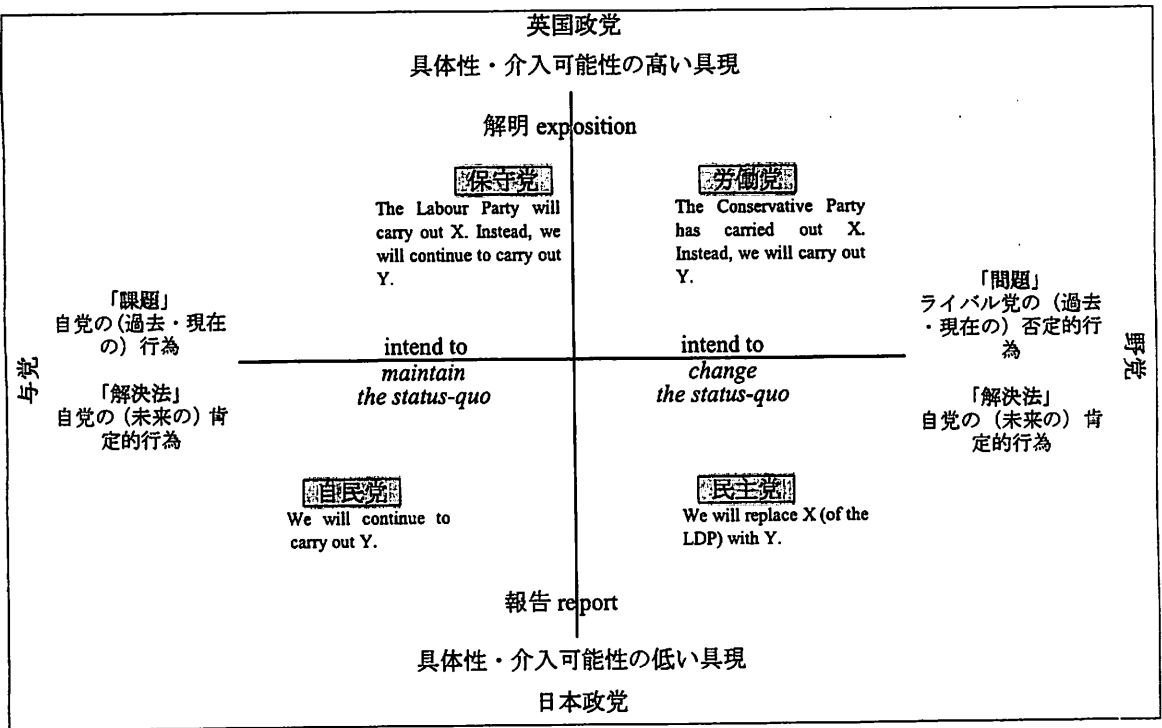
語彙-文法的な選択には、テキストのジャンル形態が関連していた。日本政党（自民党、民主党）は、「拡張 extension」の論理-意味的關係で各政策分野の「問題-解決法」を列挙する「報告 report」の形態をとっており、個々の政策

<sup>4</sup> トポロジー的（空間的・弾力的）な観点とは、テキスト同士の関係を、類縁性の度合いでとらえる思考法である。この観点では、一つの空間上に複数の基準を設け、対象同士の位置関係で、それぞれの基準についての類似性を示す。これは、テキスト同士を同じか違うかの二択でとらえるタイポロジー的（システムの・タイプ別）な観点と相補的な考えを成す（cf. Halliday and Matthiessen 1999: 68）。

は具体性・介入可能性の限られた表現でのみ構築されていた。

一方、英国政党（保守党、労働党）は、「敷衍 elaboration」の論理-意味的關係で各政策分野の「問題-解決法」を詳細化する「解明 exposition」の形態をとり、個々の政策を、様々な具体性・介入可能性の度合いをもつ表現で構築していた。

図2 政党マニフェストの説得の方略：トポロジー的観点から  
(横軸) 機能構造のパターン：「書き手の対人的状況」と関連  
(縦軸) 語彙-文法的資源の具体性・介入可能性：「ジャンル形態」と関連



4. まとめ

以上の分析により、説得のテキスト群とは、大小様々な問題-解決法を積み重ねること、マクロ提言の遂行を促す対人的相互作用であり、様々なジャンルの枠を横断して存在するメタジャンルであることが分かった。また説得のテキスト群が、マクロ提言の説得という目的を果たすために、新旧情報構造や文法的比喩などの語彙-文法的資源を結集して、書き手が考える「問題-解決法」を読み手にも共有させようとする様子も見られた。さらに、個々のテキストでなされるあらゆる機能的、語彙-文法的選択には理由があり、書き手の対人的状況やテキストのジャンル形態の影響を受けて選択されることが明

らかになった。

### 参考文献

- Halliday, M.A.K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd edition. London: Arnold.
- Halliday, M.A.K. and Christian M.I.M. Matthiessen. 1999. *Construing Experience Through Meaning: A Language-based Approach to Cognition*. London and New York: Continuum.
- Halliday, M.A.K. and M.I.M. Matthiessen. 2004. *An Introduction to Functional Grammar*. 3rd edition. London: Arnold.
- Lemke, Jay L. 1995. *Textual Politics: Discourse and Social Dynamics*. London and Bristol: Taylor and Francis.
- ハリデー M.A.K. 1994/2001. 『機能文法概説—ハリデー理論への誘い—』 山口登・笥壽雄（訳）、東京：くろしお出版

## **Are There Modal Imperatives? – Just Someone Dare Say No!**

**David DYKES**

**Yokkaichi University**

### **Abstract**

It is usually taken for granted that functions that are well developed in the indicative moods of English are barely developed at all in imperative use. One of these is modality: nobody says '*may sit down*' imperatively. However, imperatives are not always short and blunt. Some prefacing imperatives occur with another verb or projecting clause following, and allow a speaker or writer a range of attitudinal, perceptual or interactive subtlety, not unlike what is achieved with modal verbs, adverbs and adjectives in modalised or modulated statements. Apart from the best known ones *do*, *don't* and *let*, two others that are very common but little recognised are *try* and *make sure*. In this article, based on my 2007 Conference presentation, I review some examples of how items like these are used in parenting advice writing, and end with some ideas as to how this usage might be systematically described.

### **1. Introduction**

In what follows, I want to think about uses of the imperative mood in a parenting advice book called *Your New Baby* by Miriam Stoppard (1998, 'YNB'). Like most books of this kind, YNB has a practical social function; what a reader most wants from it is not emotions, values or a world view, but help in getting through the first six months of bringing up a baby. Nevertheless, the emotions, values and view behind the text are still important, because they are what the advice refers back to, and what give it coherence. At the same time, they provide the bridge to the outlooks and values of the readers: that is, the presentation of problems and advice has to be elastic enough to suit readers who differ in their inclinations and practices, and are also subject to advice from other quarters. For these reasons, an advice book needs to be more (or less, if measured in factual content) than a simple instruction manual.

Instruction manuals and advice books are both rich in imperative clauses. But one difference is that while most imperatives in a manual are likely to be bare instructions to perform material processes, the ones in an advice book will generally include more mental verbs such as *be careful*, *remember*, *avoid*, and especially *try* and *make sure*. Many of these uses are followed by specifying complements, like the ones underlined in *try to get someone else to be responsible* (YNB: 22). In Huddleston and Pullum (2002: 1225), verbs which require completion in this way are called ‘catenative verbs’, from Latin *catena*, ‘a chain’, and interestingly enough these include auxiliaries like modal *will* and *can*. Here, I want to suggest that one way of describing the difference between *get someone else to be responsible* and *try to get someone else to be responsible* might be to say that the version with *try* is in some way quasi-modal, or in systemic functional parlance *modulated* (Halliday, rev. Matthiessen 2004, *Introducing Functional Grammar* (‘IFG’): 147)

## 2. Imperative mood – but imperative modality?

In the past, grammatical mood was thought of as a verb feature, and this made sense as long as most English speakers still had at least biblical access to imperatives like *go thou* which were different from indicatives like *thou goest*. Nowadays it has become more common to talk of an imperative ‘clause type’, or to reinterpret *mood* as a clause feature. For example, IFG calls the imperative ‘the mood for exchanging goods-&-services’ (IFG: 138). But the reality is less tidy, as can be seen from the fuller form of the ‘*try to get someone else to be responsible*’ example which I quoted in the Introduction:

- (1) In the first few weeks at home with your baby, try to get someone else to be responsible for all the household chores, or simply cut back the amount and what you do to the bare minimum, until you become used to the schedule that your baby follows naturally. (YNB: 22)

There are two ways of taking ‘*simply cut back the amount you do to the bare minimum*’ here; it could be a second imperative stretch in parallel with ‘*try to get someone else to be responsible ...*’ as in (1a), or a second complement for *try to* in parallel with ‘*get someone else to be responsible ...*’, as in (1b):

(1a) In the first few weeks at home with your baby,  
try to get someone else to be responsible for all the household chores,  
or  
simply cut back the amount and what you do to the bare minimum,  
until you become used to the schedule that your baby follows naturally.

(1b) In the first few weeks at home with your baby, try to  
get someone else to be responsible for all the household chores,  
or  
[to] simply cut back the amount and what you do to the bare minimum,  
until you become used to the schedule that your baby follows naturally.

I find (1a) a better fit than (1b), but on grounds which in an indicative context would best be described as better modal matching. Let me explain.

First, the point of the opening and closing time circumstances seems to be to supply a frame for the directive content between: *in the first few weeks at home with your baby*, [follow this strategy] *until you become used to the schedule that your baby follows naturally*. However, the only way to accommodate this within clause boundaries would be by adopting the less plausible one-clause arrangement of (1b). When I say that this is less plausible, I do not mean only that it is less elegant (although it is), but more specifically that there is an awkward strain in this talk of ‘trying’ (with effort) to ‘simply cut back’ (which implies relaxation).

With the arrangement in (1a), the contrast between *try to* and *simply* is not only neater, but it is also more supportive of overall coherence. This can be shown by separating out some of the constituent details:

(1c) In the first few weeks at home with your baby,  
try to  
get someone else to be responsible  
for all the household chores,  
or  
simply  
cut back the amount and what you do  
to the bare minimum,  
until you become used to the schedule that your baby follows naturally.

Here, in the common time and disjunction frame, the imperative arguments both break down into three matching parts but with differences: the effort in *try* contrasts with the relaxation in *simply*, the strategy of getting things done by others contrasts with that of avoiding work oneself, and the goal of receiving maximal help (*all the household chores*) contrasts with the one of doing a minimum of work. As the person doing the chores is different in each case, the differences express alternatives rather than contradictions: the preferred strategy is the first one, in which an initial positive effort is amply rewarded; the second plan is a fallback, in case the first one fails. The point-by-point matching between the preferred and the fallback strategy cannot be obtained in full from the (1b) reading, and that is why (1a) gives the richer coherence.

But if *try* and *simply* both provide support for action proposals in this way, and are in contrast with each other, their functions are not far removed from those of a modal verb and adverb. That is, they are lexical substitutes for what IFG would call *modulators* (IFG: 147), words used in an auxiliary way to make modal adjustments characteristic of action proposals:

<i>get someone else to be responsible</i>	→	<i>try to get someone else to be responsible</i>
<i>cut back what you do</i>	→	<i>simply cut back what you do</i>

It is not obvious how far these modulations can be said to have ‘high’, ‘median’ or ‘low’ modal value (IFG: 620); but another reasonable measure of modal strength is in terms of whether the resulting range of outcomes is expanded (as with *you may*), normalised (as with *you should*), or reduced to one (as with *you must*). By this measure, *try* expands the potential for work redistribution while *simply* reduces it, and this is what leaves them complementary with respect to feasibility: *try to get someone else to be responsible for all the household chores [if you can], or [if you can’t] simply cut back the amount and what you do to the bare minimum*.

In systemic functional grammar, it is generally assumed that a language system, from the inertia of usage, can provide sets of resources, such as self-complete clauses or graded modal verbs, for regularly required functions. No doubt this is roughly so, and a high proportion of speech and writing makes use of these resources. But to claim that such regularities are absolute, so that moods are clause features by definition, or modality is the same thing as the use of a modal resource system, is going too far. (1) is a clear example of an imperative clause

complex which does not include self-complete clauses; while *try* and *simply* are modulators that do not fit into recognised sets of inclination and obligation words, in part because they have to do with effort, which places them in a less well regimented area of dynamic modality; and in part because they occur frequently in imperative environments, where modal-like phenomena are not looked for.

I have no space to go further into theoretical questions, but wish now to proceed to a simple survey of how frequent this sort of usage is in parenting advice books. I then want to suggest a more rhetorically based approach to analysing it, in terms of how *sure* the writer claims to be, or assumes the reader to be, with regard to the propositions and proposals being presented.

3. Uses of imperatives in parenting advice books

The first thing I want to establish is the relative frequency in advice writing of mental attitude imperatives such as *try*, that are general in meaning and require completion through chaining (see Introduction, Huddleston and Pullum), as compared with more directly meaningful verbs such as *wash*, *talk* or *look*. Here is a list of the ten most frequent imperative verbs in YNB, by numbers of occurrences and as percentages out of a total of approximately 844 imperative uses on 87 pages of text. This total excludes 65 uses of *see* in page references, but includes separate entries for *don't* and *do*, and for the very frequent phrase *make sure*.

Table 1: Finite verbs in imperative use in *Your New Baby* (Stoppard, 1998)

Verbs	Count (%)	Remarks
1 <i>don't</i>	53 (6.3)	Including: 7 x <i>don't be</i> , 5 x <i>don't worry</i>
2 <i>make</i> ( <i>make sure</i> )	52 (6.2) (43 (5.1))	Including: 43 x <i>make sure</i> 39 x <i>make sure (that)</i> ; 4 x <i>make sure to</i>
3 <i>try</i>	41 (4.9)	21 x <i>try to</i> ; 7 x <i>try -ing</i> ; 5 x <i>try not to</i> ; 4 x <i>try + thing</i>
4 <i>use</i>	37 (4.4)	Including: 17 x <i>use + thing + . to + verb</i>
5 <i>put</i>	26 (3.1)	Including: 21 x <i>put + thing/person + into place</i>
6 <i>take</i>	24 (2.8)	Including: 11 x <i>take + thing/person (with you)</i>
7 <i>keep</i>	23 (2.7)	Including: 10 x <i>keep + thing/person + value state</i>
8 <i>be</i>	15 (1.8)	All followed by attitudinal adjective
9 <i>choose</i>	15 (1.8)	All followed by desirable type specification
10 <i>do</i>	15 (1.8)	Including 4 x <i>do + verb</i>

Of these top ten imperative verbs, only *put* is predominantly used in a direct material sense that an outside observer would also recognise as ‘putting’. Half of the uses of *take* are similarly material, while others are idiomatic, as in *take care*. *Keep* and *choose* are material under one aspect, but mental (precautionary or selective) under another. All of the uses of *be* and *don’t*, and most uses of *make*, are attitude setting, and require completing with some other verb or predicate, as in *don’t worry*. Well over half of the uses of *try* are for end proposals while another quarter are for means selections; similarly, half of the uses of *use* are for means or instrumental selections. *Do* is very diverse in its uses.

In this group of the ten most frequent imperatives, then, general attitude verbs, or those which include a general attitude of preparation or the like as part of their meaning, are in the majority. It is in the second group of ten verbs (14 occurrences: *avoid*; 13: *clean*, *consult*, *remove*, *wash*; 12: *leave*, *rinse*; 11: *check*, *hold*, *look*) that more definite verbs of the material, communicative or perceptual types (*clean*, *consult*, *look*) begin to show up more plentifully, among others that are attitudinal or mixed in character (*avoid*, *leave*, *check*). In other parenting advice books, the particular verbs vary with the content or emphasis of the subject matter, but the prevalence of attitude setting imperatives is similar in every case:

Table 2. Finite verbs in imperative use in Hayes, 2004; Godridge, 2004; Ford, 2002

Hayes	Count (%)	Godridge	Count (%)	Ford	Count (%)
1 <i>try</i>	29 (9.4)	1 <i>don’t</i>	32 (11.5)	1 <i>try</i>	33 (8.9)
2 <i>keep</i>	16 (5.2)	2 <i>make</i>	19 (6.8)	2 <i>do not</i>	29 (7.8)
3 <i>take</i>	15 (4.9)	( <i>make sure</i> )	(14 (5.0))	3 <i>make</i>	26 (7.0)
4 <i>be</i>	12 (3.9)	3 <i>let</i>	16 (5.7)	( <i>make sure</i> )	(23 (6.2))
5 <i>don’t</i>	12 (3.9)	4 <i>keep</i>	11 (3.9)	4 <i>choose</i>	14 (3.8)
6 <i>use</i>	11 (3.6)	5 <i>give</i>	10 (3.6)	5 <i>check</i>	12 (3.2)
7 <i>give</i>	9 (2.9)	6 <i>stay</i>	10 (3.6)	6 <i>allow</i>	10 (2.7)
8 <i>make</i>	9 (2.9)	7 <i>try</i>	10 (3.6)	7 <i>offer</i>	10 (2.7)
( <i>make sure</i> )	(5 (1.4))	8 <i>encourage</i>	9 (3.0)	8 <i>avoid</i>	9 (2.3)
9 <i>remember</i>	8 (2.3)	9 <i>remember</i>	9 (3.0)	9 <i>ensure</i>	9 (2.3)
10 <i>talk</i>	8 (2.3)	10 <i>be</i>	8 (2.7)	10 <i>express</i>	9 (2.3)

The verbs *try* and *don’t* (or *do not*, in the case of Ford) appear among the top ten in all four of these books, while *make sure*, *keep* and *be* appear in three out of the four.

Following this broad view of things, I now want to look more closely at usage in the three pages of the '*Arranging childcare*' section (YNB: 22 – 24), from which I have already quoted the imperatives '*try to get someone else to be responsible for all the household chores*' and '*simply cut back the amount and what you do to the bare minimum*' in (1) above. There are only 12 imperative uses on the three pages, compared with an average of 10 per page for the whole book; but the 12 are employed in varied functions, and a look at what these are should be instructive, I think.

Before tackling imperatives, I first have to say that this '*Arranging childcare*' section marks the sharpest changing point in the book's organisation. It comes at the end of the first chapter, dealing with events and concerns after the birth, and preceding the division into specific content topics. For most mothers, this will also coincide with the homecoming from hospital and the need to start looking after the baby independently, a time of extreme stress for which advice needs to be thorough and sympathetic. Perhaps for that reason, this is one of the rare sections addressed explicitly to the mother; as opposed to the new parent of either gender, which is the assumption behind the book as a whole.

One thing that becomes evident is that the definite sort of imperative, with little marking for attitude, is especially prevalent in captions to illustrations:

(2) Look at your baby while you are feeding her. (YNB: 22)

(3) If you are breastfeeding, express milk into a bottle (see pp. 42 – 3) so that your partner also has the pleasure of feeding the baby. (YNB: 22)

The bareness of these examples can be seen by comparing them with the fuller versions of the same advice taken from running text in the later '*Feeding and nutrition*' chapter, where *look at your baby* is replaced by '*make sure your baby can see you*', and *express* is expanded into '*remember that it is possible to express*'. There are also further elaborations, including added imperatives of behaviour in the *make sure* example and of interaction in the *remember* one:

(4) When feeding time is both relaxed and pleasurable, breastfeeding creates a strong bond between mother and baby. Make sure your baby can see you, and smile and talk to her while she is suckling. (YNB: 40)

- (5) ... but remember that it is also possible to express enough milk so that your partner or a childminder can feed your baby while you are away from home. (...) Encourage him to hold the baby close and talk or sing to her while feeding, so that she will get used to the feel of his skin, his smell and the sound of his voice.

(YNB: 37)

The difference between the bare and elaborated versions of Stoppard's text seems to be systematic: an attitudinal imperative (*make sure, remember, encourage*) is inserted ahead, or in place, of an equivalent plain version: *look, express, get him to hold*. If these were declarative passages, it would not be hard to recognise that reinforcements like these (e.g., '*it is very important that your baby can see you* ') are equivalent to modulations, which in these contexts would be for obligation enhancement.

Given the fact that such sophisticated imperative uses occur later in YNB, it is a curious to find that there is no use at all of imperatives but only of value statements in a column of starting advice that recommends involving the mother's partner:

- (6) In many households, the father becomes the main helper when his partner comes home with their new baby. Some men immediately involve themselves in caring for their partner and child, but those who do not need prompting into action.

(YNB: 22)

This links up with passages like (5), but not with any imperatives on page 22. This may be from the recognition that the child's father is not always the mother's partner, or it could be a strategic avoidance: if the father is of the helping type, no imperative will be needed; if he isn't, too much urging (as opposed to prompting) risks leading into open conflict.

The rest of the imperative uses on these pages come in a discussion of outside help sources, for situations where help from the mother's partner is not enough. As a first stage of argument, the writer insists on how hard the first weeks will be, and warns the mother against trying to get through on her own. Here, as in the illustration captions, the imperatives are more direct; in fact they go further than directness, and are blankly dismissive of any inclination the reader may have to disagree:

- (7) It is a mistake to try to impose a routine on your baby, and will only cause you more work; you have to take your lead from her. As far as your sleep is concerned, get it when you can: new babies don't know night from day and need the same attention during the night as during the day. (YNB: 22)
- (8) Unless you want to become extremely tired, even depressed and weepy, you will need some help to tide you over at least the first few days with your baby, and preferably the first week or two. Don't be too proud to ask for or accept help; if you are too reticent, you may soon come to regret it. Having someone help out does not mean that you are in any way inadequate as a mother. The best solution is some live-in help, so that your day can be split into shifts. That way, you can at least make sure that you get sufficient rest and pay attention to your diet. (YNB: 23)

One of the cornerstones to Stoppard's approach to childcare is that parents should initially conform to their baby's sleeping and feeding patterns. Passages (7) and (8) are grounded in the negative and positive implications of this belief. If the parent has to be led by the baby, '*get [your sleep] where you can*' in (7) is an imperative that just has to be followed. A further implication, in (8), is that '*you will need some help to tide you over*, and '*reticence*' in the face of this need is dismissed as pride masquerading in what Martin and White (2005: 53) also present one-sidedly as the positive 'tenacity' category of social esteem.

Between these attitude-oriented imperatives (7) and (8) come the action-oriented ones '*try to get someone else to be responsible for all the household tasks*' and '*simply cut back the amount and what you do to the bare minimum*' which were discussed earlier, in (1). The only fresh insight that needs adding here, I think, is that as (1) immediately follows (7), '*try to get someone else to be responsible*' can be understood as an implication of the advice to '*get [your sleep] when you can*'.

The rest of the content of the '*Arranging childcare*' section is more informational in nature, outlining the benefits, drawbacks and pitfalls of various sorts of short-term live-in help: family and friends, nannies, maternity nurses, and au pairs. It seems to me that there are two kinds of imperative use in this part of the text: a review use for introducing choices and consequences, and a recommending use to ensure the taking of adequate precautions.

Review uses can be seen in passages (9) and (10):

- (9) If you want short-term, live-in help, consider hiring a maternity nurse. She will join your household just before or after the baby is born and will help you with all of the baby care. (YNB: 23)
- (10) An au pair is cheaper than a nanny, but bear in mind that most will probably have no training in childcare, and may speak little English. (YNB: 24)

The verb *consider* usually has a new proposal or aspect as its object, and '*consider*' in (9) is a weaker alternative to *try* in a means selecting sense. Similarly, *bear in mind* has a known aspect or implication as its object; and '*bear in mind*' in (10) is an alternative to *remember*. Imperatives like these are appeals to the reader's attention and, by implication, to her readiness to engage with the ideas or implications being presented.

Finally, (11) and (12) offer cautionary counsels for dealings with nannies:

- (11) If you decide that you would like a nanny, try to arrange for her to be settled in with your family before the baby is born. This is a good idea because it gives you a chance to get to know each other. You will develop a sense of rapport (or not, as the case may be) and you should be able to tell whether or not you are going to get on together. (YNB: 23)
- (12) Draw up some kind of employment contract in which you cover the most important aspects of the job, including the required approaches and attitudes. Make certain any tasks are carefully and clearly laid out; make it plain that instant dismissal may follow if your instructions are not followed. (YNB: 24)

Stoppard's suspicion of nannies can be seen by comparing (11) with (9), where she assumes that the maternity nurse will settle in well without any testing of her approaches and attitudes, or of the development of the right sort of rapport. But where a choice for a nanny has already been made, '*try to arrange for her to be settled in with your family before the baby is born*' is similar to the advice to '*try to get someone else to be responsible for all the household chores*' in (1): there is the same call to invest effort in return for an optimal outcome, and the same risk that this effort may prove too much amid the stress of the homecoming. In contrast, what is said of the nurse in (9): '*she will join your household just before or after*

*the baby is born and will help you with all of the baby care*', reads like the release from effort implied in the *simply cut back ...* part of passage (1). In (9), however, this is not because the nanny option is presented as better but harder to achieve, but because the nurse's duties are presented as more dependable. It may be significant that 'super-nannies' were the rage on British television at the time YNB came out, and that super-nannies are associated with the imposed routine approach to childcare which Stoppard calls '*a mistake*' in (7). The maternity nurse and nanny options are given separate columns in YNB, and are never directly compared or connected, but it is easy to imagine a reader who feels drawn to the nanny option being put off by the apparent difficulties of *trying to arrange* for the nanny to settle in with the family, and attracted instead by the less fussy prospect of a maternity nurse settling in and helping in the more usual way. For such a reader, (11) and (9) interpreted together would make an analogous pair of choices to the effortful and effortless options in (1).

Of the three imperative uses in (12), two are obviously attitudinal, one with regard to the reader's attitude ('*make certain*') and the other with respect to dealings with another person ('*make it plain*'); this balance is similar to the one between '*remember*' and '*encourage*' in (5). The third use, '*draw up*', could be taken as a plainer or barer support imperative, like '*smile*' and '*talk*' in (4), or the particle '*up*' could itself be regarded as an attitudinal elaboration, meaning presumably '*certain and plain*' in this context. None of these verb phrases are at all common in parenting advice books, it might be added. They are characteristic of texts in which systems, layouts, documents and conditions need verifying, which is precisely the case in this passage (12).

To sum up the results so far then, a bare sort of imperative use, without much attitudinal marking, can be seen in illustration captions ('*look at the baby*', '*express milk*') and following more elaborated uses ('*smile and talk to her*'), as well as in a markedly dismissive sort of use ('*get it when you can*', '*don't be too proud*'). A recommending sort of attitudinal marking is often added to elicit more effort or more relaxation from the reader ('*try to get someone else*', '*simply cut back*', '*make sure*', '*try to arrange*', '*draw up*' (?), '*make certain*') or from people with whom the reader has dealings ('*encourage*'). Less often, a reviewing sort of attitudinal marking can be added to elicit attentiveness or readiness for engagement, again either from the reader ('*remember*', '*consider*', '*bear in mind*') or from other people ('*make it plain*'). The page reference use of '*see*' in (3) is a barer sort of review imperative, with an apparent affinity to the caption

recommendations; but it lies outside of my self-imposed scope.

#### 4. Declarative and imperative '*making sure*'

The results of the survey suggest not only that imperatives can be modulated with catenating verbs (*try to*), adverbs (*simply*) and adjectives (*make sure*) in ways that have a resemblance to those found with indicatives, but that this can be done for reviewing established or assumed situations as well as for promoting future purposes. This may not be quite the same as the difference between the epistemic and deictic tendencies of modality in the indicative moods, but it looks similar enough to be worth comparing. Much the same view is implied in Huddleston and Pullum's cautious definition of the primary '*directive function*' of imperative clauses or verb groups as being the promotion of '*compliance*' in the realisation of the outcome proposed in the imperative, irrespective, for example, of which party's interests stand to be restrained or furthered as a result:

- (12) There is no everyday word whose normal sense is general enough to embrace the quite wide range of (direct) uses of imperatives: we therefore extend the sense of 'directive' so that it covers not just orders, requests, instructions, and the like but also advice or merely giving permission. Similarly, 'compliance' covers obeying orders, acceding to requests, following advice, or simply doing what one is given permission to do. What is common to the various more specific kinds of directive is that they all 'promote' compliance – with varying degrees of strength, of course. At the stronger end of the spectrum, compliance is required, whereas at the weaker end it is merely accepted: the range of the imperative is therefore comparable to that of the deontic modals *must*, *should*, *may/can* together.

(Huddleston and Pullum 2002: 929)

In particular, this extended sense of the directive function is at odds with the usual systemic functional metaphor of the command and offer functions of speech as the demanding and giving of goods-&-services. In so far as a command such as '*give me that teapot!*' (IFG: 107) can be described as a demand for goods-&-services, it is only because the example sentence includes the same word '*give*' that was used to fix the demanding – giving axis of description in the first place. If the example chosen were '*take as much tea as you like*', common sense suggests that the function of the imperative would be a quite different one of

offering or giving permission. And if the example were '*dangling a teabag in a cup makes a bad impression; buy a teapot*', in an advice situation where the advisor does not stand to lose or gain anything from whether the advice is followed, the very notion of demanding and giving (as represented in the clause at any rate, perhaps not as externally enacted through the giving of advice) seems irrelevant. Yet this is the usual situation in operating instructions, menus, procedure protocols and advice texts; and these are precisely the texts that are most rich in imperatives. So far as I can see, none of the 844 imperatives in YNB raises much of a suggestion of an exchange of goods or services between the writer and her readers, except in the external form of a service of instruction and reassurance in return for the buying of the book.

I do not have enough space left to give a full account here of how the various strengths and directions of attitude appearing in examples (1) – (12) can be accommodated in one framework to fit Huddleston and Pullum's general description of the directive function as 'promoting compliance' irrespective of the lie of interests. But clearly, there would be a need for some base proposal from which to begin. This could take different forms, one of which would be a *yes – no* question (e.g. '*whether to get someone else to be responsible?*'). A scale of modulation could then be provided, building up to imperatives such as *do!* or *don't!* at the ends of the scale, roughly as in the IFG scales of obligation and inclination (IFG: 619). However, the language uses being considered here are all imperative in mood, so that a more delicate distinction is needed between plain imperatives such as *do!* and modulated ones like *consider doing* at the weaker, and *make sure you do* at the stronger end. I would suggest that this could be achieved by treating the span from the starting proposal to *do!* as half of the modal field, and the span from the starting proposal to *don't!* as the other half:

	+ !	<i>do!</i>
High positive		<i>make sure you do it, etc.</i>
	+ ?	<i>sure?</i>
Low positive		<i>consider doing it, etc.</i>
	? Q ?	<i>do you get someone else to be responsible?</i>
Low negative		<i>consider not doing it, etc.</i>
	– ?	<i>sure?</i>
High negative		<i>make sure you don't do it, etc.</i>
	– !	<i>don't!</i>

Figure 1. Low and high areas of modality around a neutral central axis

The forms with '*consider*' are mutually compatible: by this I mean that it is possible to consider doing something or not, without contradiction, which in declarative usage would be a sign of low-value modality. Substituting '*try to do it or not*', the compatibility would be lost, but there would still be a distinction between '*try to do it*' and '*make sure you do it*', in that *try* calls only for a reasonable effort to be made, whereas *make sure* places an obligation on the reader to achieve success as far as lies in her power.

This use of *try* comes close to the sort of modal *should* use in declarative clauses which IFG calls '*median*'. But if the term '*median*' is used, I would prefer to regard it as an expectation level taken for granted in a well established context. The IFG criterion, that '*median*'-value: is unaffected when 'we transfer the negative feature from the proposition itself to the modality' (IFG: 148) has two weaknesses: first, it is vacuous to define a thing on the basis of behaviour it does not show; and second, it is mysterious what it can mean to transfer a negative 'feature' (what 'feature' – the word '*not*'?) in a modal field that supposedly only exists in the first place as a set of intermediate degrees between the *pre-transfer* positive and negative poles (IFG: 147).

The way out of this difficulty is to redefine '*median*' modality positively as an expectable way of foreseeing outcomes in some area of perception and action, or, more colloquially, as '*common sense*'. In general, people agree that they '*should*' abide by common sense, and will advise one another to '*try to*'. Where this is inadequate, they will seek new possibilities ('*consider this*'), or narrow down their options in line with necessity ('*make sure of this*'). These principles will apply to imperative usage as well as to indicative, although interpreting them may not be so easy, and allowances will be needed for such contextual factors as whose values and interests to follow, from what viewpoint and in what particular circumstances.

A reasonable label for the + ? and - ? spaces in the positive and negative spans of the combined modal field is '*sure?*'. '*Sure*' is the most common modal adjective in English; in the CD-ROM database attached to the *Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary* (Sinclair (ed.), 2006), *sure* makes 1988 appearances, compared with 1286 for *possible*. Some 800 or so uses are for the phrase *be sure*, while 675 or so are for *make sure*; and whereas *be sure* usage is

most likely to be first-person, most *make sure* usage is likely to be second. The complementary distribution between the two phrases is conducive to a dual application of the label *sure?* in the epistemic (*‘are you sure?’*) and in the deontic and volitional areas (*‘make sure!’*). Propositions or proposals which fall *‘short of sure’* can be classed as *‘conceivable’* on the positive span of the modal field (*‘consider doing it’*) or *‘questionable’* on the negative one (*‘consider not doing it’*), whereas propositions or proposals which cross the *sure?* boundary and pass *‘out of doubt’* can be classed as *‘unquestionable’* on the positive span (*‘make sure you do it’*) or *‘inconceivable’* on the negative (*‘make sure you don’t do it’*).

The following figure sums up this whole set of relationships:

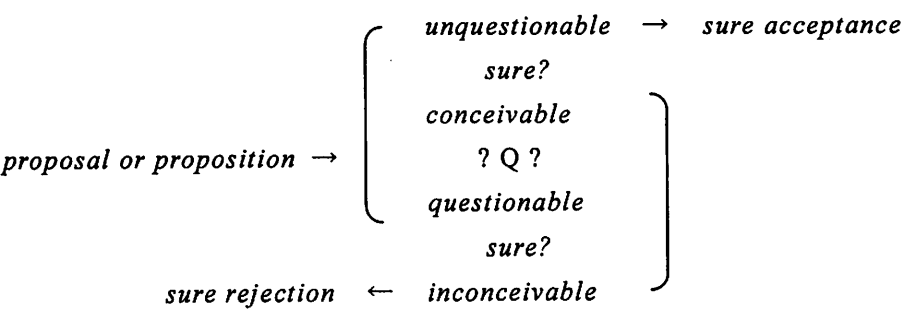


Figure 2. Cross-symmetries between sureness and doubt

5. Conclusion

I am aware that this rapid final sketch of an alternative representation of modality to the one current in IFG is too summary to be tried out and tested. It is simply a glimpse into what I am currently developing in a PhD thesis. Here, my main purpose has been to examine some tendencies in the use of imperatives in advice writing, and to suggest that modality is not wholly absent from imperative speech functions.

References

Ford, G., (2002). *The New Contented Little Baby Book: The Secret to Calm and Confident Parenting*. London: Vermilion.

Godridge, T., (2004). *Johnson’s Potty Training*. London: Dorling Kindersley.

Halliday, M., rev. Matthiessen, C., (2004). *An Introduction to Functional Grammar*

(3<sup>rd</sup> edition). London: Arnold.

Hayes, E., (2004). *Johnson's Crying & Comforting*. London: Dorling Kindersley.

Huddleston, R. and Pullum, G., (2002). *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

IFG: See Halliday, rev. Matthiessen (2004).

Martin, J. and White, P., (2005). *The Language of Evaluation: Appraisal in English*. Basingstoke: MacMillan Palgrave.

Sinclair, J., (2006). *Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary*, Fifth Edition. London: Collins.

Stoppard, M., (1998). *Your New Baby*. London: Dorling Kindersley.

YNB: See Stoppard (1998).

## 英語教育におけるジャンルと過程型

### Genre and Transitivity Patterns in Education of English

名古屋芸術大学

Nagoya University of Arts

早川 知江

Chie HAYAKAWA

#### Abstract

This paper is a part of the research which seeks to introduce the genre theory into the teaching of English in Japanese schools. Genre-based education aims to teach students how to use language in appropriate ways in various social contexts to achieve goals. For Japanese students who learn English as a second language, it is useful to show how Japanese and English texts of the same genre differ linguistically.

In order to see how, and in what respects Japanese and English texts differ, I will conduct a comparative analysis of art book texts in Japanese and English focusing on their transitivity patterns. The analysis will show the necessity to teach students the differences in lexico-grammatical features of Japanese and English texts, which are far more difficult to notice than the differences in contents without explicit teaching.

#### 1. はじめに

本稿は、日本の英語教育にジャンル理論を取り入れることを目指した研究の一環である。文法的に正しいだけでなく、社会の中で様々な目的を果たすのに適切な英語テキストを読み・書く能力を育成するためには、「ジャンル」という概念が欠かせない。ジャンルとは、“a staged, goal-oriented social process”<sup>(1)</sup>と定義されるように、ある言語断片を、単に文法的に正しい文の連続としてではなく、一定の社会的コンテキストの中で、一定の目的を果たすために用いられるテキストとしてとらえた場合の、その目的によるテキストの分類のことである。

第1節で詳しく見るように、これらのジャンルは、言語によって何らかの目的を果たすために、特定の展開段階を踏み、かつ、それぞれの展開段階に特徴的な

文法資源を用いる。外国語として英語を学ぶ学生にとっては、英語のテキストが、同じジャンルの日本語テキストとどのように異なるのかを明示的に教えることが効果的だろう。

では、同一ジャンルの日本語と英語のテキストは、実際にどの程度似ていて、どの程度異なっているのか。また、異なる場合には、具体的に何がどのように異なるのか。本稿では、特に過程構成 (TRANSITIVITY) のシステムに焦点を当て、英語と日本語の「美術解説」のジャンルを比較分析する。それにより、学習者が気付にくい語彙-文法的な違いがあることと、それらを明示的に教える必要性を示したい。

## 2. ジャンルと選択蓋然性

まず、ジャンルという概念をまとめたい。その特徴を3つ述べると、第一に、ジャンルはある一定の目的をもつテキストの総称である。例えば、日記というジャンルは自分の生活を記録する目的をもち、レシピは料理の作り方を伝える目的を、議論は相手に自分の主張を納得させる目的をもつ。

次に、ジャンルは一定の展開段階をもつ。なぜなら、一定の目的を達成するためには、いくつかの段階を順序どおりに踏まなければならないからである。例えば、レシピのジャンルであれば、「料理の名前」「材料」「作り方」の順が典型的だろう。

3点目として、特定のジャンル、あるいはジャンルの各展開段階では、それぞれ特徴的な語彙や文法資源が用いられる。再びレシピを例として取り上げると、まず、料理の名前や材料は、節(「肉じゃがをつくろう」「ジャガイモを用意します」)ではなく、通常名詞群のみ(「肉じゃが」「ジャガイモ1コ」)で書かれる。手順の段階は、英語の場合命令法(例: Peel potatoes.)で、日本語の場合主語のない叙述法(例: ジャガイモは皮を剥きます)で書かれ、各節の過程型(動詞のタイプ)は、物質過程(「切る」「煮る」といった物質世界での動きを表す動作)が中心となり、心理過程(「思う」動作)や発言過程(「言う」動作)などは、まず用いられない。

そして、ジャンルによってどのような文法資源が特徴的に選ばれるかは、言語によっても異なる場合がある。例えば叙法システム(MOOD)からの選択に関して、Matthiessen (1995: 14) はこう述べている:

in the MOOD part of the network, declarative clauses are the most probable. [...] These probabilities are part of the general system, but they may be skewed in particular contexts. For instance, the probability of the selection of imperative is very much higher in instructional contexts than in context in general.

つまり、英語の選択体系網においては、言語のすべての使用状況を平均すると叙述法が最もよく用いられるが、ある特定のコンテキスト（この場合はジャンルと考えても良い）、つまり「指示 (instruction)」というコンテキストでは、命令法が選択される蓋然性が高まるのである。

しかし、言語が異なればこのパターンも異なってくる。指示の代表的なジャンル、レシピの「作り方」の段階を見てみると、英語では先ほど見たように命令法が選択されるが、日本語では叙述法が選ばれる。例えば英語によるレシピは以下のように書かれるが、

**Heat butter and oil in a large skillet over medium-low heat.**

**Add onions and cook, stirring occasionally, for about 10 minutes.**

**Add sugar, 1/2 tsp salt, and 1/4 tsp pepper, and cook until onions are golden brown.**

日本語によるレシピは以下のような書き方が一般的である。

① 玉ねぎはみじん切り、サラダ油少々で透きとおるまで炒めて冷まします。

② ボウルに A の卵と牛乳を混ぜ、パン粉を浸しておきます。

上記の例は、対人的メタ機能に属する MOOD 選択システムの話だが、1. ジャンルにより特定の語彙-文法的資源が多く選ばれる傾向がある、という点と、2. 同じジャンルでも言語によってその選択傾向は異なる、という二点は、過程構成のパターンや主題の選択など、ほかのどの文法のパターンにも当てはまることだろう。

こうした特徴を教えることは、英語教育に非常に有用であろう。つまり、学生はすでに日本語のテキストには日頃たくさん接していて、どのような文法資源を用いてどのように書くか、無意識にはあっても、ある程度知識がある。その知識を顕在化するとともに、同一ジャンルに属する日本語テキストと英語テキストがどの程度似ていて、どの程度異なるかといった点や、異なる場合には、具体的にどこがどう異なるかを明らかにすれば、英語テキストの読解や作文能力の向上に役立つと考えられるからである。

本稿はこの考え方にに基づき、一つのジャンルに焦点を当て、それが日本語と英語でどのように違うかを見ていく。

### 3. 分析テキスト

今回、分析対象として選んだのは「美術作品の解説」というジャンルである。この選定の背景には、芸術大学で日常的に利用されるこのジャンルに関し、いくつかの疑問があったからである。というのは、日本人学生が自分の作品について解説した作品集の英語や、もともと日本語で書かれた作品解説を英訳したものが、英語として不自然であると感じられることが多いからである。これは、そもそも

日本語と英語とでは、「作品解説」というジャンルがもつ言語的特徴が異なるためではないかと考え、具体的に英語と日本語の作品解説で異なる文法的特徴は何なのかを探ることを目指した。

今回は、過程構成 (transitivity) のパターンに注目して、日本語と英語の「作品解説」を比較分析した。扱うのは、学生の英作文ではなく、彼らがモデルにし、かつ文体的に影響を受けているだろうと考えられる、出版済みの作品解説である。ここで作品解説と呼ぶのは、画集や美術展の図録などに、美術作品の写真とともに載せられている解説文のことである。

例えば今回の分析テキストの中から例をあげると Text 1 のようなものである(強調は早川による)：

#### Text 1: 「作品解説」の例

描かれているのはセーヌ河畔の行楽地ラ・グルヌイエール。モネとルノワールがイーゼルを並べて描いた絵として有名である。二人は同じ画塾で学んだ友だち。年齢も同じで、このとき両者二八歳。

ラ・グルヌイエールという地名が何かぬるっと思うたら、「カエルの多い沼地」という意味。セーヌ河の中州に作られた水浴場で、レストランやダンスホールなどがあった。水遊びがはじまったのもこの時代の特徴で、休日にはここがパリ市民の行楽地として賑わったという。水辺に遊ぶ人々のざわめきが水面に映える。その水面も人々の気持ちのよう揺れざわめいている。

モネの絵は陰の位置にイーゼルを据えて、逆光気味に水面のゆらめきを描いている。筆づかいは粗いけど、絵の全体で見たときに、木陰の水の冷たさをまざまざと感ずる。

『印象派の水辺』p.6-7

Text 1に見られるように、「作品解説」というジャンルは、実際には、いくつかの下位ジャンルが集まったもののようだ。下線部は「伝記 (biography)」に近く、モネとルノワールという人について書かれている。太字部分は「報告 (report)」となっており、絵に描かれた「ラ・グルヌイエール」という土地がどのような場所か、背景的な情報を報告している。残りの部分が「解説 (exposition)」であり、作品自体について解説している。このように、異なる下位ジャンルが数行ずつ入り組んだ形で、総合的に作品について語るのが「作品解説」の特徴である。これは日本語でも英語でも全く同じパターンだった。学生はおそらく、日本語で書かれた作品解説の方に慣れ親しんでおり、彼らの書く解説文の過程構成選択パターンはその文体にいくらか影響されていると思われる。

分析テキストは、解説する題材によって過程構成のパターンが違ってくのを避けるため、なるべく同じ作品について解説したテキストを、日本語と英語で比較した。そのため、以下の美術書の中から、同じ作品について解説した箇所を抜粋して分析テキストとした：

- Karin H. Grimme. (2007) *Impressionism*. Köln: Taschen.

- Arthur K. Wheelock, Jr. (1995) *Vermeer and the Art of Painting*. New Haven / London: Yale University Press.
- 赤瀬川 原平 (編、解説) (1998) 『赤瀬川 原平の名画探検：印象派の水辺』講談社
- 日本アート・センター (編)、黒江 光彦 (解説) (1975) 『新潮美術文庫 13 フェルメール』新潮社

分析テキストは、英語は全部で 194 節、日本語は 192 節となった。これは階層節 (ranking clause) の数ではなく、埋め込み節 (embedded clause) も含む数である。分析テキスト中には、埋め込み節を数多く含む節が多数あった。例は以下のとおりである：

[[[[水面に映る]]建物の黒影の上を、ひょいひょいと踊りながら]] [[走る]]  
波の水色の絵具が、何の躊躇もなく生き生きとしている。

これは全体で一つの階層節である。しかし、分析する節に埋め込み節も含めるのは、「言語によってできごとをどう構築しているか」、という特徴を見るためには、「(建物が) 水面に映っている」という部分と、「(波の水色の絵の具が) 走っている」という部分も分析に含むべきと考えたためである。よって、例えば上記の節は、「(建物が) 水面に映る」という節と、それを含んだ「(波の水色の絵の具が) ...[[水面に映る]]建物の黒影の上を走る」という節、さらにその節全体を含んだ「[[[[水面に映る]]建物の黒影の上を...走る]]波の水色の絵の具が...生き生きとしている」という節をそれぞれ別々に、3 重に分析したため、全部で 3 節と数えた。

#### 4. 分析枠組み：過程構成システム(TRANSITIVITY)

今回中心的に分析した過程構成とは、「誰が・なにが、いつ・どこで・どのように、何をしたか」を表すための言語のシステムである。このシステムによって、さまざまな事象は、過程中核部 (Process)、参与要素 (Participant)、状況要素 (Circumstance) という 3 つの要素から成り立つものとして言語的に構築される。

このうち、過程中核部は、物質過程 (material process)、関係過程 (relational process)、心理過程 (mental process)、発言過程 (verbal process) の 4 つの過程型 (process type) に分かれる。参与要素は過程型によって特有の種類があり、例えば物質過程には、以下のように、その行為をする行為者 (Actor) と、その行為の対象となる対象 (Goal) という参与要素などが関わる：

John      kicked                      a ball.  
行為者   過程中核部：物質過程      対象

また、状況要素はどの過程型にも表れることができ、時間や場所を表す Location (例：in the park) や、どのようにその過程を行うかを表す Manner (例：quickly)

など、さまざまなタイプがある。これらの要素の集まったパターンとして、言語はさまざまな事象を解釈し、構築する。よって、同じ事象であっても、それを言語によって、さまざまに違った形で捉えることも可能である。例えば、似たような事象であっても、「モネは薄い色の絵具で光を描いた」のように物質過程で表すことも、「モネの薄い色の絵具は光を表している」と関係過程で表すこともできる。また、起動性 (AGENCY) の選択の違い、すなわち、そのできごとが自然に起こった (middle) か、ほかの者 (起動者 Agent) によって起こされたか (effective) を表す選択のパターンに違いがでることもある。例えば、「モネは水面を光らせた」のように、モネという起動者がその行為を引き起こしたように構築することもできれば、「水面が光っている」のように、その現象が自然に起きたように構築することもできる。

Fig. 1: 英語の過程構成のシステム (Matthiessen (1995) に基づき、簡略化)

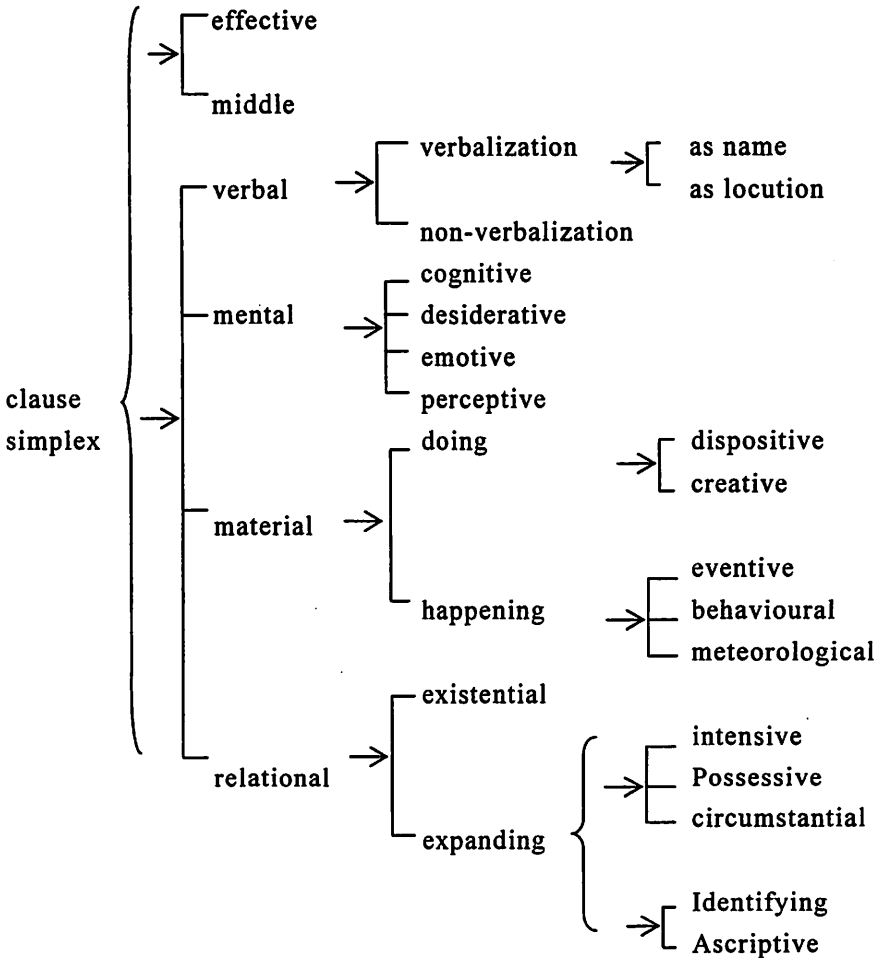
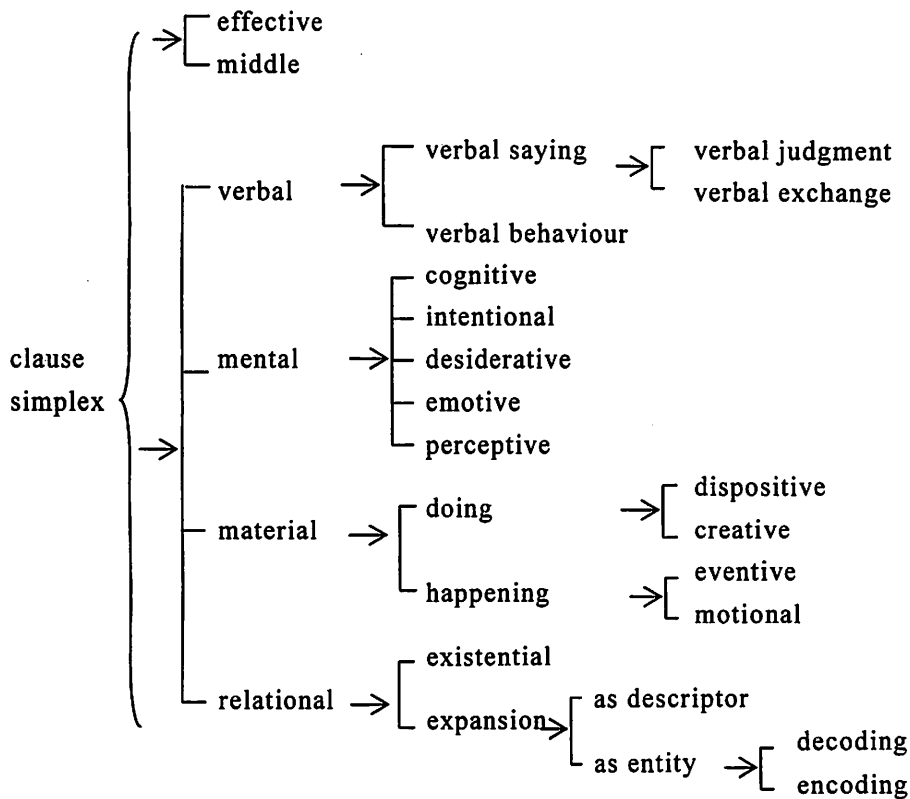


Fig. 2: 日本語の過程構成のシステム (Teruya (2004) に基づき、簡略化)



このように考えると、英語と日本語の作品解説ジャンルで、事象の解釈・構築のパターンに異なる傾向があれば、同じ絵について解説しても、過程構成の選択パターンは異なってくる。このことを調べるため、英語と日本語の分析テキスト中の各節について、1. どの過程型を使用しているか、2. 参与要素に何が選ばれているか、3. 起動性のパターンはどうか、の3点を中心に分析した。分析の基準として、英語については Figure 1 のような過程構成のシステムを、日本語については Figure 2 を利用した。Figure 1 は Matthiessen (1995) の過程構成システムに、Figure 2 は Teruya (2004) に基づいているが、本稿ではそれほど細密度の高いところまで分析しなかったため、いくらかシステムを簡略化した。

## 5. 分析結果

### 5. 1 過程型 (Process Type)

まず、英語と日本語の分析テキストで用いられていた過程型の割合を見てみる。最も再密度の低い、物質過程、発言過程、心理過程、関係過程の4つの過程型の使用頻度は Table 1 のとおりである。Table 1 に見られるように、このレベルの細密度では、日本語と英語の間にほとんど違いが見られなかった。日本語でも英語

でも、物質過程と関係過程がほとんど全体を二分する形で多数を占める。物質過程は、例えば「マネはこのように水面を描いた」のように、画家が絵にどのような作業を加えたかを表すために用いられ、関係過程は、「この色使いが美しい」とか「構図が印象的だ」のように、絵や絵に描かれたもの、技法などがどのようなものかを表すために用いられている。

Table 1: 分析テキスト中の節の過程型の割合

	Material	Verbal	Mental	Relational
日本語 (計 192 節)	77	3	14	98
	40.1%	1.6%	7.3%	51%
英語(計 194 節)	75	8	16	95
	38.7%	4.1%	8.2%	49%

また、それぞれの節で用いられている状況要素のタイプを見てみると、Table 2 のようになる。

Table 2: 使用されていた状況要素の種類と数

		日本語	英語
Extent	distance	2	1
	duration	0	3
Location	place	28	44
	time	9	11
Manner	means	6	6
	quality	23	19
	comparison	5	3
Cause	reason	2	0
	purpose	0	2
	behalf	0	0
Contingency	condition	0	2
	concession	3	1
	default	0	0
Accompaniment	comitation	3	4
	addition	1	2
Role	guise	6	6
	product	0	1
Matter		5	2
Angle		0	2
計		93	109

Table 2 に見られるように、どのタイプの状況要素がいくつ使われていたかに関しても、日本語と英語では大きな違いはなく、似た傾向を示している。どちらも Location と Manner を表す状況要素が多く利用されている。

この二つのタイプをさらに細かく見てみると、Location の中でも、「場所」を表す Location: place の要素が、Manner の中でも、どのようにという「様態」を表す

Manner: quality の数が非常に多かった。それぞれの状況要素の具体的な役割は以下のとおりである：

- Location: place : 画中の人・ものがどこに配されているかを表す  
日本語例) 町の外れに静かに川が流れている  
英語例) Immediately below this red roof we see a group of peoples...
- Manner: quality : 画中の人・ものがどんな様子が描かれているかや、作者がどのように絵を描いたかを表す  
日本語例) 町の外れに静かに川が流れている  
英語例) White was also used abundantly

もう一つの特徴として、Location: place は実際の「場所」というより、比喩的な「場所」を表す場合も多い。例えば以下のような節である：

日本語例) [[[ぐじゅぐじゅとつづく]]絵具のタッチが、空と水にはさまれて横に伸びる]]リズムに味わいがある。

英語例) since there is no sign of either line or drawing [[to guide the master to this perfection]]

これらの例の「リズム」とか「to this perfection(この完成度)」というのは、実際には場所ではない。リズムが味わい深い、という意味を、リズムという所在地に味わいがある、としたり、絵の技術が完成した、という意味を、完成という到達点に達した、というように文法的比喩を用いて表したものである。このような比喩的状況要素の多用も、日本語・英語ともに作品解説ジャンルの特徴だった。

以上の二つの分析結果をまとめると、日本語・英語に拘らず、作品解説はまず以下のような文法的特徴があるジャンルと言えるだろう：

A.. 過程型のパターンでは、物質過程と関係過程を選択する蓋然性が高い

- 物質過程：画家の絵に対する作業を言語で説明する
- 関係過程：絵そのものや、画中の人・もの・技法などに性質を付与する

B. 状況要素のパターンでは、Location: place や Manner: quality を選択する蓋然性が高い

- Location: place : 絵の構図を言語で説明する
- Manner: quality : 絵の描かれ方を言語で説明する

以上の結果は、日本語と英語に共通の特徴である。それでは、日本語と英語の作品解説の違いはどこにあるのか。それは、もっと選択の細密度の高い部分にある。日本語でも英語でも、物質過程と関係過程が多く用いられていたが、その下位タイプの選択が異なるのである。まず Table 3 は、物質過程の節の下位タイプの割合を示している。

Table 3: 分析テキスト中の物質過程節の下位タイプの割合

日本語		英語	
	計 77 節		計 75 節
Material: doing: creative	19 (24.5%)	Material: doing: creative	7 (9.3%)
Material: doing: dispositive	21 (27.3%)	Material: doing: dispositive	53 (70.7%)
Material: happening: eventive	24 (31.2%)	Material: happening: eventive	11 (14.7%)
Material: happening: motional	13 (16.9%)	Material: happening: behavioural	4 (5.3%)

Table 3 に見られるように、日本語では、英語に比べて Material: creative の使用が多く、英語では代わりに Material: dispositive が大半を占める。Creative というのは、「彼はケーキを焼いた」のように、その過程によって初めて対象が生み出される過程で、dispositive というのは、「彼はボールを蹴った」のように、もともと存在する対象に、行為者がどう影響を与えるかを表した過程である。

日本語で creative と分類されたのは、ほとんどが「(絵を) 描く」に類する過程であり、例えばこのように用いられる：

- 同じ場所で何枚もの絵を描いている

日本語では、「描く」や、それに類する動詞の使用頻度が高く (Material: creative 19 節中 17 節)、特に以下のような要素との組み合わせで用いられる：

<<Manner + 描く>>

- 逆光気味に水面のゆらめきを描いている。
- 画家のアトリエそのものを輝かしく描き表すことによって、
- 一枚の絵を早く描きたいという

<<Role + 描く>>

- 水も人も樹の緑も、すべて[[目に映る]]風景の等価な要素として描かれている
- ただフェルメールはアレゴリーをアレゴリーとして描き出すのではなく、

<<抽象的な Goal + 描く>>

- [[中の島に群がる]]人々の風俗やその雰囲気を描く
- そのわずかな連なりを描く
- 日差しの変化を描き止めるためだが、
- [[でも水を感じて描く]]画家の絵筆が、[[あるかなきか]]の反映を描き出して

一方、英語の作品解説はパターンが異なっている。絵画の作品解説なのだから、「描く (paint, draw)」という動作がたくさん出てくると予想されるのだが、英語では実際にはほとんど使われていない (全体で 4 節)。例は以下のとおりである：

- Claude Monet, and the Post-impressionist Paul Signac, were later also to paint in

**boats.**

- **Sisley painted a ferry across the river, a village on the riverbank, a path [[running down to the bank]], and little human figures as accessories.**
- **which had been executed five years earlier.**
- **Vermeer's older contemporary, Rembrandt, painted single figures and heads in exotic costume all during his life,**

英語の分析テキストでは、代わりに、同じ内容を違う表現で表す傾向が強く、それには様々なパターンがある。例えば、「...を描いた」とする代わりに、「(絵の題材として) ...を使った」と表すパターンがある。「構成ラインとして Path (小道) を描いた」の代わりに「小道を用いた」とする以下の例のように、実際に描かれる対象は、Material: dispositive 過程の対象として構築される (例 1)。

例 1) As his composition line, Sisley once again uses a path,

**Actor**

Process	Goal
---------	------

他にも、「…を用いて…を描いた」と言う代わりに、「…のために…を使った」というパターンもある。その場合も Material: doing: dispositive となるが、描かれた対象は purpose の状況要素として構築される（例2）。

例 2) White was (also abundantly) used for the numerous dabs all over the picture.

## Process

**Circumstance: purpose**

また、「…を描く」と言わずに、「…を（画中に）配した」（例 3）とか、「…を強調した」（例 4）というパターンを用いたり、「…の制作に自分自身を捧げた」という日本語にはない書きかたもする（例 5）。

例 3) Both artists **placed** a bridge on the right-hand side of the picture [...]

## Process

## Goal

## Location

例 4) In this case, Vermeer has focused on the act of physical adornment.

**Actor**

## Process

## Goal

例 5) **to which** Renoir devoted himself in Chatou on the Seine in 1879/80.

## Process

## Goal

## Location

Time

これらは全て、material: doing: dispositive に分類される。よって英語では creative ではなく dispositive の割合が高くなっているのである。

## 5. 2 起動性 (Agency)

過程型以外にも、起動性、つまりある過程を自然に起こったものとして構築するか、何かによって引き起こされたものとして構築するかのパターンにも日本語と英語で差が見られる。そして、過程が何かによって引き起こされたとする場合、その過程を引き起こしたもの、つまり起動者 (Agent) として何を選ぶかも異なっている。

Table 4 は、日本語と英語の分析テキストで、起動的 (Effective) 過程と、中立的 (Middle) 過程の割合を表したものである。

Table 4: 分析テキスト中の起動節と中立節の割合

	Effective					Middle				
	Effective & Material	Effective & Verbal	Effective & Mental	Effective & Relational	合計	Middle & Material	Middle & Verbal	Middle & Mental	Middle & Relational	合計
日本語	40	0	0	4	44	37	3	14	94	148
	90.1%	0%	0%	9.1%	22.9%	25%	2%	9.5%	63.5%	77.1%
英語	60	0	0	4	64	15	8	16	91	130
	93.8%	0%	0%	6.3%	33%	11.5%	6.2%	12.3%	70%	67%

Table 4 に見られるように、英語のほうがそもそも起動的な節の割合が高い。

また、何を起動者として構築するかも、日本語と英語では異なる。日本語では、物質過程の行為者としての起動者が 33 個、関係過程の性質付与者 (Attributor) としての起動者が 3 つで計 36 の起動者が、英語では、行為者として 50 個、性質付与者として 4 つの、計 54 の起動者があった。Table 5 は、こうした起動者として構築されたものの内訳を表している。

Table 5: 起動者として構築されたもの

	日本語	英語
人: 作者	22	39
人: 鑑賞者	1	2
人: 画中の人物	2	3
もの: 絵	4	0
もの: 技法(含: 筆致・構図)	3	5
もの: 画中的もの	2	4
もの: 道具(絵筆・絵の具)	2	0
その他	1	3

Table 5 に見られるように、日本語・英語どちらも、「人: 作者」の数が最も多いが、英語では「もの: 技法 (作者の筆致や構図も含む)」と「もの: 画中的もの (= 絵の中に描かれたもの)」が、日本語より若干多く起動者として選ばれている。また、先ほど見たように、日本語は「描く」を表す creative の物質過程が多く、起動者となっている「人: 作者」は、ほとんどが creative の過程の行為者、すなわち「描く人」である。

こうした選択パターンの違いは、誰が・何が作品に影響を与えるものとして構築されているかが、日本語と英語では異なることを示すと考えられる。つまり、日本語の起動者はほとんどが「人: 作者」で、そのほとんどは creative な過程の「描く人」であることから、「絵を生み出す」人としての画家に焦点を当てている。

一方、英語の起動もほとんどが「人：作者」であるが、その大部分は *dispositive* な過程の行為者であり、「絵に対し影響力・支配力を持つ」人として画家をとらえている。また、英語の起動者は「技法」や「画中のもの」であることが日本語よりは多いと述べたが、例は以下のとおりである（下線部が起動者）：

- The picture is given, in addition, expected tension by the crossing of two divergent directions of movement
  - given us a perfectly balanced moment [[which seems to eternalize the act rather than capture it]]
  - Since the Last Judgment painting on the wall in the Washington picture makes the negative implications of these secondary elements abundantly clear,
- これらの節は、画家の技術や画家が描いたものが絵全体に影響力や支配力をもつ、というありようを構築している。

5. 3 関係過程 (Relational Process)

また、関係過程も日本語・英語ともに使用頻度が高かったが、その過程によって描写されるもの、すなわち、体现者 (Carrier) やトークン (Token)、存在者 (Existent) としてなにが選択されるかのパターンにも、日本語と英語で違いがあった。Table 6 は、体现者、トークン、または存在者として構築されたものの数を表している。日本語では英語より、「もの：画中のもの」と「人：画中の人物」の数が多い。英語では「画中のもの」が一番多いが、それに続いて「もの：絵 (= 絵そのもの)」と、「もの：技法 (作者の筆致や構図を含む)」もかなり選択されている。日本語ではこの二つは少ない。

Table 6: 関係過程の参与要素 (体现者、トークン、存在者) として構築されたもの

	日本語	英語
人：作者	11	10
人：鑑賞者	1	2
人：画中の人物	4	1
もの：絵	8	20
もの：技法(含：筆致・構図)	9	20
もの：画中のもの	34	28
もの：道具(絵筆・絵の具)	0	5
その他	27	9

実例は以下の通りである（下線部が体现者、トークン、あるいは存在者）：

- 日本語：「画中の人物」「画中のもの」を描写・説明
  - 空がぐんと広い。
  - それだけでその風景画の空気がさーっと透明になっていく。

- [[[[斑のある]]白い毛皮の縁取りのついた]]黄色の上衣も華やいでいる。
- 英語：「技法（含：筆致・構図）」を描写・説明
- In fact with numerous Impressionist pictures, the amazing similarity of painting style, technique and choice of motif is striking.
- Sisley's brush-strokes too have become more powerful,
- and the application of paint is no longer quite so transparent as in the 1870s.

前節の、何が起動者を担うかという分析と、本節の、何が関係過程で描写されるかという分析をあわせると、日本語と英語の作品解説の言語パターンはこのようにまとめられるだろう。つまり、日本語の作品解説においては、画家は絵を「描く」だけの存在であり、あとは、「描かれた人・もの」がどのような（美しい・心地よい ect.）を筆者が主観的に解説する。いわば、産物（PRODUCT）としての絵画に注目しているといえる。一方、英語の作品解説においては、画家や画家の技法が絵に対しさまざまな影響力を及ぼす。その技法がどのような（誰と似ている・どう変化した etc.）かを解説するのが作品解説である。この場合、産物としての絵画ではなく、その制作の過程（PROCESS）に注目しているといえるだろう。

#### 5. 4 分析のまとめ

以上の分析をまとめると、日本語と英語の作品解説ジャンルのテキストは、過程構成のパターンとして以下のような特徴をもっていた：

- 過程型は、細密度の低い部分ではよく似た選択パターン（物質過程と 関係過程が多い）である
- 状況要素の選択も似ている（Location: place と Manner: quality が多い）
- 過程型は、細密度が高くなるほど選択のパターンに差異が出てくる（Material: creative か Material: dispositive か）
- 参与要素（起動者、体現者・トークン・存在者）として何を選択するかにも差異がある

そしてこれらの差異は、絵画を産物（Product）としてみるか過程（Process）としてみるかの違いが表れていると考えることができる。

こうした過程構成のパターンを知り、日本語・英語間の選択の違いを明示的に教えることによって、日本人の学生も、英語の美術解説書の文体・書き方をより明確に知ることができる。また、日本語を直訳したような英文がなぜ不自然なのか、どのような過程型や参与要素を選択すると、より「英語の美術解説らしい」テキストになるのか、といった点を教える手がかりにもなると考えられる。

今回は、芸大の学生を対象学生として想定し、彼らの専門に関わるジャンルを分析テキストとして利用したが、同じ考え方は、他の専門領域を学ぶ学生についても応用できるだろう。つまり、各領域の専門書の特徴を分析することで、その

結果を英文読解や作文教育に応用することが期待できるのである。

6. 今後の課題：「作品解説」というジャンル

今回、日本語・英語各2冊の美術解説書からの抜粋を用いて分析を行ったが、まだ分析テキストとして量的に不十分である。したがって、今回明らかになった差異は、英語の作品解説ジャンルと日本語の作品解説ジャンル自体の違いによるものではなく、作者の文体の違いによる可能性もある。今後は、より多くのテキストを分析して、作品解説というジャンル自体の言語的特徴を明らかにしたい。

また、分析に伴い浮かび上がってきた最大の疑問点は、そもそも「作品解説」は一つのジャンルなのか、また、そうであるとする、そのジャンル構造はどのようなものか、という点である。言い換えるならば、「作品解説」というのは一つのジャンルか、あるいはいくつかのジャンルが集まったマクロ・ジャンル macro-genre (Martin 1993: 121)か、という問いでもある。

Table 8: 分析テキスト中の下位ジャンルごとの使用過程型の割合

		Material	Verbal	Mental	Relational
日本語	伝記(計18節)	8	0	1	9
		44.4%	0%	5.6%	50%
	報告(計22節)	8	0	1	13
		36.4%	0%	4.5%	59.1%
	解説(計152節)	61	3	12	76
		40.1%	2%	7.9%	50%
英語	伝記(計24節)	13	4	1	6
		54.2%	16.7%	4.2%	25%
	背景(計19節)	9	1	2	7
		47.4%	5.3%	10.5%	36.8%
	解説(計151節)	53	3	13	82
		35.1%	2%	8.6%	54.3%

第2節で Text 1 を用いて見たように、「作品解説」に含まれる micro-genre には、以下のようなものがあると考えられる：

- 伝記 biography：作者の履歴や制作当時の作者の生活環境などを記した部分
- 報告 report：作品に描かれた人・物・場所・モチーフなどについて、それがどのようなものか報告する部分
- 解説 commentary：作品そのもののテーマ・技法・美的効果などについて論じた部分

これらの micro-genre ごとに、過程型の選択パターンが大きく異なるかと予想した

が、Table 8に見られるように、実際にはそれほど顕著な違いはなく、「伝記」と「背景」に当たる部分の節数が非常に少なかったので、有意な比較はできなかった。

よって、分析テキスト中のどの部分がどの下位ジャンルに当たるのかについて、明確な語彙-文法的基準を設定することはできなかった。また、どの下位ジャンルがどのような順であられるか、といういわゆるジャンルの段階構造も今回は明らかにできなかった。今後、分析テキストの数を増やすと同時に明らかにしてゆきたい点である。

#### 参考文献

- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. 2<sup>nd</sup> ed. London: Edward Arnold.
- Martin, J.R. (1992) *English Text: System and Structure*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Matthiessen, Christian. (1995) *Lexicogrammatical Cartography: English Systems*. Tokyo International Language Science Publishers.
- Teruya, Kazuhiro. (2004) Metafunctional profile of the grammar of Japanese. In Alice Caffarel, J.R. Martin and Christian M.I.M. Matthiessen (eds.) *Language Typology: A Functional Perspective*. 185--254. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

サイコセラピーにおける問題の外在化のための語彙-文法資源  
-節の起動的視点からの解釈に焦点を置いて-

**Patterns of Language in an Interpersonal Interview**

**- Focusing on Problem Agency -**

加藤 澄

**Sumi KATO**

青森中央学院大学

**Aomori Chuo Gakuin University**

**Abstract**

As a part of my attempts to formulate Sullivan's interview technique in terms of semiotic and lexicogrammatical resources, this study focuses on grammatical constructions that realize problem externalization. It will be shown that problem agency plays an important part in changing the client's ways of construing experience.

Regarding materials and methods, qualitative analysis based on SFL (Systemic Functional Linguistics) was made on seven interview sessions with a schizophrenic conducted by Sullivan during the years of 1926 through 1927.

It was found that the identification of problem agency was one of the means available for treating the patient's/client's formulation as externalized phenomena. Making the Agent a real and separate entity by using available lexicogrammatical resources such as analytic causatives promotes the externalization of the patient's/client's problems. The Agent portrays the patient's/client's formulation as an externalized phenomenon, available for thought, rather than an inherent aspect of his/her personality.

In the case of many schizophrenics, however, externalization of problems tends to be already accomplished by ascribing them to false external agents such as God, the Devil or some other external existences, all of which are the products of hallucination. Unlike when counseling clients with no psychosis, the first thing the therapist must do is to identify the existence of such entities. If such entities are found to exist, the therapist must challenge them by demonstrating that the problem phenomena are self-instigated behaviors. After this pre-stage corrective negotiation is complete, the process of externalizing the patient's problems can now begin in earnest.

## 1. はじめに

Sullivan 註)の面接記録を基に、サイコセラピーにおける語彙-文法資源の定式化を試みようとする研究の一貫である。本研究では、選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistics、以後、SFL と略記する) における起動的表現に焦点を置いて論じる。

サイコセラピーでは、患者が悩まされている問題を外在化することは治療上の重要な概念である。問題の外在化は、患者の否定的な自己認識と社会との関係を解き開くことである(White and Epston 1990)。つまり患者の否定的な自己認識によって、問題がともすれば自己に固有の、または本来備わったものとして捉えられがちになるが、それを外在化することは、患者自身に固有のものとして捉えられていた問題が、外的な働きかけによって一時的に、または社会的に構築されたものであるという認識を患者に植えつけることになる。

これを実現する語彙-文法資源がいくつかあげられるが、ここではそのひとつとして、起動的視点から患者の陳述を捉えることで、起動者 (Agent) の特定がなされる点について論じる。セラピストが患者が述べたことを起動的解釈による表現で言い換えることによって、問題の起因となるものとしての起動者が顕在化され、問題の外在化が実現される。問題の起因となるものが、外部起動者として明示的に表されれば、患者は新たな視点を持って問題解決に取り組んでいくことができるのである。

## 2 資料と方法

資料は、Sullivan によって 1920 年代に行われた面接記録で、治療初期の 6 セッションと、最終セッション、計 7 セッションからなる。患者は引きこもりと妄想を有する 23 歳、高卒、独身の男性統合失調症患者である。精神療法面接の他に、入院後約 2 ヶ月後に始まったアルコール療法がほどこされる。入院 11 ヶ月後に退院に至る。抗精神病薬のような薬物がこの時期には存在しなかったため、薬物療法は行われていない。薬物療法なしに統合失調症者を治癒に至らせることはほとんど不可能に等しいが、Sullivan の臨床記録では、数多くの治癒例が報告されている。アルコール療法の他に、Sullivan 独自の治療的環境の創出が治癒にあずかっているとはされるものの、面接が治療手段の大きなウエートを占めることは疑いのないものである。

上述 7 セッションに、SFL に基づく質的分析がほどこされる。

3 理論的枠組み

3.1 他動的解釈と起動的解釈

次の例を考えてみよう。

- (1)     a. The boat sailed.  
          b. The cloth tore.

(1)a では boat が帆走したとあるが、boat が勝手に帆走するはずはないし、また (1)b では cloth が破けたとあるが、cloth がひとりでに破けるはずもない。誰かが boat を操縦したから帆走するのであるし、また誰かがあるいは何かが cloth を破いたからそうなのである。これらの事象を引き起こした行為者がこれらの節に隠れていることが、意味解釈上、暗黙の了解とされているのである。そこで、本論であるセラピーにおける問題の外在化に入る前に、本セクションでは、「過程を引き起こすものは何か」(Halliday 1994)、つまり、「過程がみずからの内部から引き起こされるのか、それとも外部から引き起こされるのか」(Halliday 1994) といったように、過程が生じる因果関係を視点とした英語の過程型の捉え方について検討する。

Halliday(1994)は、過程の因果関係を捉えるのに、起動的解釈を導入している。起動的解釈は「原因と結果」を基本的視点として、過程を捉えるものである。(2) は上の例を起動的視点から捉えたものである。

(2)

		The boat The cloth	sailed tore
起動的解釈/中間態		媒体	過程中核部
	Mary The nail	sailed tore	the boat the cloth
起動的解釈/実効態	起動者 (Agent)	過程中核部	媒体

起動的解釈では、過程が生じるための外的要因として機能する参与要素を起動者 (Agent)、それを通してその過程が実現される参与要素を媒体 (Medium) とする。これを他動的 (transitive) 解釈と対照すると、節の意味解釈がさらに促される。(2)を他動的解釈の視点から捉えると、(3) のようになる。

(3)

		The boat The cloth	sailed tore
他動的解釈/中間態		行 為 者 (Actor)	過 程 中 核 部
	Mary The nail	sailed tore	the boat the cloth
他動的解釈/実効態	行 為 者 (Actor)	過 程 中 核 部	対 象 (Goal)

起動的解釈が過程の因果関係を捉えるのに対して、他動的解釈では、行為者が何らかの行為を行った場合に、「その行為が行為者を超えて何か他の事物に拡張するのかしないのか」(Halliday 1994)、つまり他動的・自動的の区別に関わる「拡張」が問題とされるのである。Halliday (1994) は、こうした視点の転換を称して、「壺」か「向き合う横顔」かを認識するために、「図」と「地」を交代させるといった知覚再構成をはからなければならないとしているが、全く言っているといえよう。しかし問題が残る。両者において実効態では、解釈上の参与要素は変わるものの、文自体は変わらないのである。

例えば、The problem improved (他動/起動的解釈・中間態) といった場合、問題が一人ではなくなったわけではなく、起動的解釈から言えば、そこにカウンセリングが介在したがために、改善したはずである。しかし他動的・起動的両者の中間態では、陳述自体が同じであるため、他動的解釈からすれば、問題事象がひとりでに改善したのかかもしれないが、起動的解釈では、外部起動者によって改善されたのかかもしれないという二重の解釈が成り立つ。Counseling improved the problem(起動的解釈・実効態)として、起動者を明示することによって、行為を起こした主体が明示されるが、陳述自体は他動的解釈の文と変わらないため、他動・起動的解釈の両義性を抱えたままである。そこで2者の解釈を明確に区別するために、Halliday (1985:263)は起動的解釈の起動者をあらわす意味は、節の使役構造を通して分析的に表されることができるとしている。

それでは起動、他動的解釈の別を明確にする必要があるのだろうか。セラピーの一定の治療段階では、起動者の明示が求められるが、起動的解釈と他動的解釈の二重性の区別をつけることが、セラピーにおいてどのような意味を持つのかについて、次節において検分する。

### 3.2 Thibault による解釈

Thibault (1993:134-137) の議論をみながら、3.1 の議論をさらに進めてみよう。

Halliday (1979: 64) は、起動的経験構造は線上ではなく核心的であるとしている。次の例をみてみよう。

- (4)     a. John kicked the ball.     (他動的/実効態)  
          b. John kicked.           (他動的/中間態)
  
- (5)     a. John rolled the ball.         (起動的/実効態)  
          b. The ball rolled.           (起動的/中間態)

Halliday に従えば、(4)a と (4)b は線上の他動モデルで、(5)a と (5)b は非線上の核心的起動モデルである。(4)a と (4)b に代表される線上の他動モデルは、ゴール志向で、意味上の行為者 (Actor) の意図的な行動と関係し、また行為者によって行われた行動が、他の参与要素に拡大されるのかどうかを視点とした解釈であるとされる (Davidse 1991: 23)。しかしこの説明だと、行為者が無生物の場合、解釈に難を生じる場合があるため、Thibault (1993) は「ひとつの変数がもうひとつの変数へ作用する」過程として定義し直している。Bateson(1980:112-113)の物理学のビリヤード・ボールのモデルに従えば、(4)a の場合、A が B を蹴り、A が B にエネルギーを与え、B が A が与えたエネルギーで応えるといった捉え方である。それは本質的に、物理学の世界におけるメカニカルな原因結果を表すニュートンモデルであり、正確に言えば、力と衝撃という常識的な因果関係からみた言語現象なのである (Thibault 1993)。

Thibault (1993) は、起動的モデルには、ただの一般的な「因果関係」の意味以上のものが関係するとする。他動的モデルの線上でメカニカルな因果関係と違い、自己調整的な循環因果関係の論理を文法化しているとするのである。この観点からすると、(5) a では、作用を実行するエネルギーは、ボールに蓄えられていて (意味上、媒体)、意味上の起動者である John は、他動的モデルのように、ボールにエネルギーをやることはせず、ボールに蓄えられているエネルギーを放つのにボール自身のエネルギーを使うのである。媒体+過程中核部は一つのシステムを形成しているが、そのエネルギーは媒体を通して流れる。これが起動的モデルの考え方で、媒体と過程中核部の間の関係は非線上で核心的である。なぜならそれは一つの変数が別の変数に作用するのではなく、全体として環となる「エネルギー上の依存」と関連しているからである (Bateson 1980:120)。

図 1 は、参与要素が 1 つと参与要素が 2 つの場合の起動的過程の力学関係を示したものである。

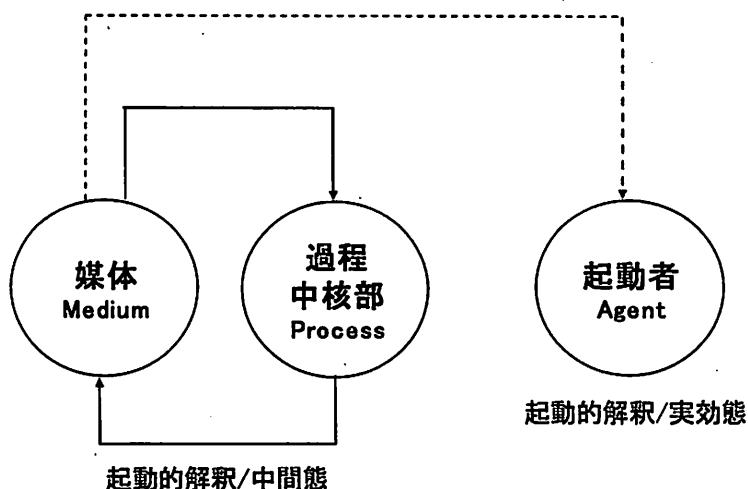


図 1 起動的解釈モデルの力学関係図: 参与要素が 1 つのものと 2 つのものととの比較 (Thibault 1993:135)

図 1 では、媒体＋過程中核部の関係は、因果関係の自己調整の円環をなしている。点線は、潜在的な起動者の存在を示している。図から、起動者が直接、媒体＋過程中核部に、外部の力として作用するのではなく、全体の要素の一部としてのみ存在することがわかる。つまり起動者は単に外から媒体＋過程中核部に作用する独立変数として存在するのではなく、起動者が文法化された時に、一つの自動調整の円環の中で、起動者、媒体、過程中核部をつなぐ因果関係の回路のもう一つの部分として機能することになるのである。文法化されない場合は、因果関係の円環は存在はしているが、媒体＋過程中核部という基本的な核に還元されている。

節の文法の経験的意味論における他動的視点と起動的視点の二重の意味解釈は、事実上、因果関係の二つのモデルを具現している。Mary shook her hand は、他動的視点から見ると、Mary (行為者) did something to her hand (Goal)であり、Mary は対象に直接作用する。一方、起動的解釈では、Mary (Agent) caused her hand (Medium) to do something と捉えられる。その際、Mary の行動は故意の行為から生じたのかもしれないし、あるいは不本意な力による間接的作用だったのかもしれない。

上述の例で、John rolled the ball の場合、他動的解釈では単に、John did something to the ball と捉えられるが、その場合、因果関係の説明 (John の行動の理由、意図など) を求めるようなことはない。他動的解釈は単に、John の行動がマルコフの連鎖の論理に従って直接、ボールを転がらせると述べているに過ぎない。一方、起動的解釈では、John と ball の間に直接的な関係はないが、因果関係の説明を暗に示している。ボールの働きにおける John の役割の因果関係、つまりその中で、

起動者の行為の陰に横たわる因果的理由や力（例えば、John の能力、信念、意図、願望他）に思いを馳せるよう仕向けられるのである。この場合の解釈は *John → did something → to the ball → the ball rolled* となり（Thibault 1993）、John の行動に対する理由づけが暗示されるのである（Thibault 1993:134-138）。

#### 4 セラピーの設定への応用

上述の Thibault の解釈による起動的視点を、実際の面接セッションに適用してみよう。図 2 は、Thibault の解釈に従って、クライアントと当人を取り巻く世界との関係を図示したものである。点がほどこしてある部分がセラピー開始時におけるクライアントの経験世界の状態で、それは他動的・中間態あるいは起動的・中間態の状態としてクライアントには解釈されている。そのため、クライアントは問題＝自己自身という問題と自己自身が同一視された状態におかれたままということになる。そこで、セラピーによって起動的解釈の可能性が示唆され、外的起動者の存在の同定を促されて、外的起動者を特定することによって、クライアントは問題から自分を切り離し、今までとは別の経験世界の解釈を得ることができるようになる。客観的現実世界は不変のままだが、クライアントによって捉えられる経験世界に違いがもたらされるのである。それが図 2 では、点線部分を囲む外枠の部分である。

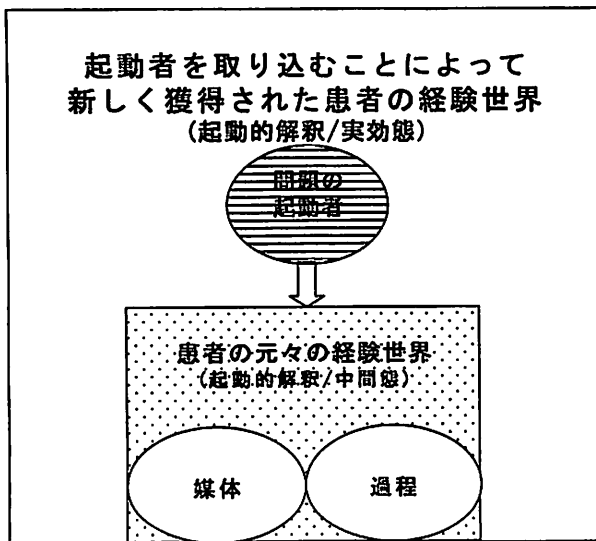


図 2 クライアントの経験世界 1

外部起動者を特定することで、クライアントは問題が人物に本来備わっているものとしてではなく、外在化された事象として眺めることが可能となる。問題を

自己に本来備わった属性としてみなせば、クライアントは自己自身を変えることは難しいと諦め、無力感を抱くことになる。こうして問題が永続することになるのである。しかし問題を外在化することで、クライアントは問題から切り離された自己、あるいは自己から切り離されたものとしての問題を体験することができるようになる。こうした操作が、ある特定の文法資源を用いることによって可能となるのである。実際に言語表現の例をあげて検討してみよう。

(6)にあるように、クライアントが“I troubled”と述べたとしよう。上述、他動・起動的解釈より、2つの解釈が生じる。

(6)

	I	troubled
他動的/中間態	感覚者 (Senser)	過程中核部：心理過程
起動的/中間態	媒体	過程中核部：心理過程

他動的・中間態の解釈では、問題の外的な起動者は、クライアントの経験世界では示唆されない。そのため、クライアントは自分自身が‘troubled’の原因であるとみなさざるをえない状態に置かれる。自分と問題の同一視である。しかしここで、起動的・中間態の見地から経験世界を捉えたと、そこに外的起動者の存在が潜在することに気づかされる。クライアントが起動的解釈から、‘I’を媒体として認識することで、そこに問題としての外的起動者の存在が示唆されるのである。

(6) より外的起動者を、クライアントの母親として特定されたものが、図3である。

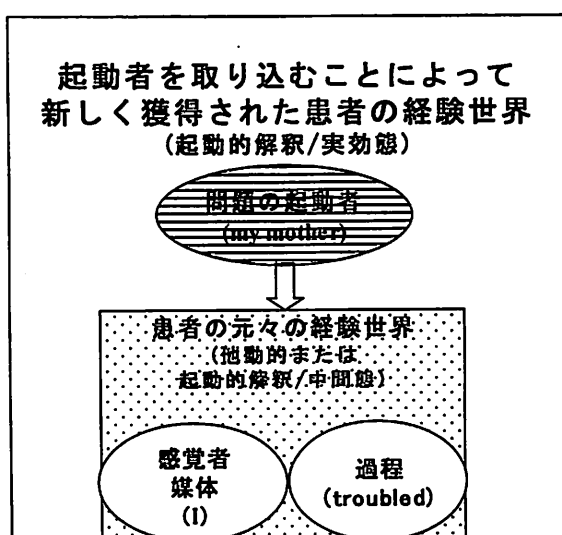


図 3 クライアントの経験世界 2

(6) の段階では、クライアントが認識する経験世界は、点がほどこしてある部分である。ここからクライアントがサイコセラピーを通して新しい世界、つまり外的起動者を獲得すると、陳述は (7) のようになる。

(7) 非使役構造

	My mother	troubled	me
他動的/実効態	行為者	過程中核部：物質過程	対象 (Goal)
起動的/実効態	起動者	物質過程	媒体

(7)では、起動的・実効態の解釈からすると、my mother が起動者である。しかしここでも二重解釈がつきまとい、他動的・実効態の解釈からすると行為者ということになる。自動・他動の視点である「行為と拡張」よりも、サイコセラピーでは、起動的視点である「原因と結果」をクライアントに認識させることが目的とされるので、この非使役構造の二重解釈性は、患者の認知を促すという点で曖昧性を残す。従って、上述の Thibault (1993 : 137) の解釈に従えば、my mother did something to me ではなく、My mother → did something → to me → I troubled という認知を、曖昧性を残さずに患者に植え付けなければならない。他動的解釈では、my mother が me に及ぼした直接的な影響を定義しているが、起動的解釈では、起動者としての mother の行動の根底にある原因となる理由(母親の能力、信念、願望など)が暗に含まれる。起動的解釈では my mother と me の間の直接的なエネルギー放出の流れが問題とされるのではなく、出来事が非線上の連鎖として捉えられるように、原因結果の論理的結論づけへと導かれるのである。

分析的使役構造 (analytic causatives) は、上述の二重の解釈から生じる曖昧さを除く文法資源である。(7)を分析的使役構造を使って表すと、(8)のようになる。

(8) 分析的使役構造

My mother	made	me	trouble
起動者 Agent	過程中核部：使役	媒体	過程中核部：心理過程

分析的使役構造をとることにより、起動者の積極的な役割が明確になり、上述の二重解釈より生じる曖昧性がなくなる。

起動的モデルは特に自己調整回路の因果関係を示し、それは他動的モデルの機械的な線上の因果関係の表現と対照をなしている (Thibault 1993:134)。媒体と過程の間の関係に見られる「エネルギーの依存」は、はっきりと起動モデルの非線性的性格を示しているのである(Bateson 1980:120)。

分析的使役構造の使用は、セラピーの設定において、問題の外在化を明確にするためのより効果的な文法資源の一つである。そして問題に対する外的起動者の存在を明確にすることは、クライアントに問題解決に向けた希望をもたらすのである。

## 5 面接セッションの分析

このセクションでは、上述の理論上の解釈が、Sullivan のセラピーの中でどのように使われているかを検分する。先ず、次の例をみてみよう。

### (9) the 2<sup>nd</sup> session

[47.2] **What [Agent] makes you think you are getting worse?**

(9)では分析的使役構造が wh-疑問文の中で使用されている。外的起動者の存在がここでは **what** として、患者に直接特定させようとしている。この前のターンで、患者は「自分はどんどん病状が悪くなっている」と言っているが、セラピストは患者が「自分が悪くなっている」ということを、外的起動者に起因させようとしている。ここでセラピストは動詞 **think** という心理過程節を使うことで、クライアントがそう言っていることは、あくまで患者自身の考え、信念または想像といった心理過程として処理させようとしている。

このセッションでは、**what** を外的起動者として分析的使役構造を用い、外的起動者を探る過程が大きなウェイトを占めている。(9)は、**why** を使って表現することもできるが、その場合、クライアントの認知上、大きな違いを生じる。(10)は(9)を **why** で言い換えたものである。

### (10) **Why do you think you are getting worse?**

(9)がはっきりと起動的解釈に基づいた分析的使役構造をとるのに対して、(10)は、起動的解釈をとると、起動者はあくまで **you** であり、従って問題と自己自身が同一視された状態で、問題はあくまで患者の内界に留まったままである。従って、患者の経験世界の解釈において違いを生むことはない。

同じような例を、同じ Sullivan の他の面接場面でみてみよう。(11)と(12)では、分析的使役構造を使うことによって、セラピストは「偽り」の外在化された起動者の存在を特定しようとしている。統合失調症者は引きこもりが始まると、自己の保全操作が損なわれ、さらにそこから恐ろしく、忌まわしい思考や感情に支配される。パニックに支配される体験様式が自己の意識を侵食して、不気味で伝達

不能な感情で患者を満たす。この薄気味悪いものの正体は何なのか早急に意味づけする必要に迫られて、患者は今自分が被っている体験に何とか意味づけを行い、つじつま合わせをしようとする。そこに妄想が生じる。患者は意味づけをしたことで、とりあえず薄気味悪さから逃れ、「偽り」の安心保全感を手にする。Sullivanの治療では、その「偽り」の安心保全感が徹底的に攻撃され、妄想破壊が試みられ、それによって患者に病の初期状態であるカタトニア(緊張病)を生じさせ、寛解に至らせるのである。

統合失調症患者は、保全操作に失敗すると、上述のように自分が今被っている混乱に、一貫性と意味を吹き込み、保全感を得るために意味づけを行う。そうすることによって妄想、つまり「偽りの精神的平穏」を請合う存在を作り上げるのである。例えば、幻聴の形で患者に何かをするように命令、あるいは指示する神、悪魔、あるいは政府のスパイといったような実体を創りあげ、問題をこれらの外的起動者のせいにする。以下はその「偽りの精神的平穏」を作り上げる存在を特定しようとするセラピストによる試みのやりとりである。

#### (11) 第4回セッション

- [2.1] S Mr. (patient's name) tells me that somebody dies every day on his account.
- [2.2] Do you believe that?
- [3] P Yes.
- [4] S **What [Agent] makes you think so?**

#### (12) 第8回セッション

- [7] S You think that you were responsible for the storms in California last week?
- [8] P Yes.
- [9] S Are you to blame for the Chinese revolution?
- [10] P To blame for everything.
- [11] S And did you[Agent] cause Byrd to fly over the pole?
- [12] P What?
- [13.1] S **[Agent omitted] Did cause Mr. Byrd to fly over the North Pole?**
- [13.2] Are you to blame for Cal Coolidge?
- [14] P To blame for it all.

(11)の[4]、(12)の[13.1]のような外的起動者の存在について聞かれた時、患者の答えは以下のように、発言過程になっている。

発言過程節：報告

(13) 第5回セッション

[102.5] P *The devil will say "Do this," "Do that," "Don't do this," "Don't do that."*

[102.6] Don't you hear him?

[103.1] S No.

(14) 第5回セッション

[56.1] P I destroyed my insides-

[56.2] so they made-that made-

[56.3] *The Lord said then, "Well, you should live-*

[56.4] *you have got to die for the rest of the world,"*

[56.5] and I didn't do it.

発言過程節：引用

(15)第4回セッション

[41.5] P *and I guess Jesus Christ said if I lived everyone else would get that.*

[41.6] *Bury myself*

[41.7] *or starve myself for other people*

[41.8] it would have been all right.

(13)、(14)、(15)では、患者の妄想によって生み出された外的起動者の存在が、明らかになっている。(16)は否定的使役(negative causatives)の例で、ある行為がなされないようにする外的起動者の探索である。

(16) 第8回セッション

[93] S Well, **what [Agent] prevents** your telling me?

[94] P Should have starved myself.

[95.1] S **What [Agent] prevents** your telling me about this sin that you committed?

[75.2] **What [Agent]** is it that serves to **prevent** your telling me about this terrible sin that you committed--which you say you know about but which I don't believe you know about?

(16)では、セラピストが患者にどんな外的起動者が彼に罪について話すのを妨げているかを尋ねている。否定的使役例を導く動詞としては、prevent の他に、keep...from...や、refrain...from...などがあげられる。

分析ケースは統合失調症者のものであり、治療の初期のセッションである。この時期は問題の内在化の時期にあたり、セラピストが妄想の産物である外部起動者の存在を確認する段階であるため、上述の例に見られるように、もっぱら外的起動者の特定に使役構造が用いられている。こうしたやり取りが重ねられる中で、セラピストはその外的起動者の存在が特定されると、次にその存在の否定をはかっていく。否定をはかっていくことで、問題を患者自身の中に内在化していくのである。(17)はセラピストによる外部起動者の否定例である。

### (17)第3回セッション

[37.2] S That it is a guilty conscience and that nothing [Agent] ails your stomach?

この外的起動者否定の段階を越すと、患者が偽りの保全操作を否定されたことで、著しい不安定状態に置かれる。そこから新たに真の問題の外在化、つまり通常のカウンセリングの場合と同様の問題の外在化過程が展開される。

## 6 結論

人はともすると自分を悩ませている問題を、変えることのできない自身に本来備わった属性から来るものとみなしがちである。しかし自分を変えることはほとんど不可能に近く、結果、問題解決に対して無力感を抱く。もし自分自身が問題であるならば、あるいはその対人関係が問題であるのなら、自分の意志に逆らって生きる以外に、自分ができることはない

サイコセラピーでは、言語による相互作用によって、クライアントのこの固定化した経験世界の解釈を変える試みがなされる。それは問題を外在化する過程によって実現される。起動的視点を取り入れ、分析的使役構造のような語彙文法資源を用いることによって、問題が一旦、クライアントから切り離される。起動者としての問題を外在化することで、クライアントの問題を、当人の人格に本来備わった局面というよりもむしろ、思考に供することのできる外在化された事象として捉えることが可能となるのである。

起動的視点をサイコセラピーに取り込むことによって、問題解決へのアプローチが実現されていくのであるが、Halliday(1994)の言葉で言えば、「壺」と「向き合う横顔」を見るために、「図」と「地」を換える視点を獲得することで実現されるものといえよう。

但し、多くの統合失調症患者の場合、問題を妄想の産物である神、悪魔といったような偽りの外的起動者のせいにすることによって、外在化がすでになされている。精神疾患のない患者にカウンセリングをほどこす場合と違って、セラピストが先ず取り掛からなければならないことは、そうした存在を特定することであ

る。そうした存在が特定された後、それを否定するプロセスに入る。つまり外在化された問題を否定して、一旦問題の内在化をはかる。この前段階を踏んだ後、通常のサイコセラピーと同様、今度は妄想相手ではなく、現実在即した問題の外在化が新たに始まるのである。

#### 註

Harry Stack Sullivan (1892~1949)。新フロイト派に分類されるアメリカの精神医学者。精神医学は対人関係の学であるとする病理論をうちたて、精神医学に初めて対人関係の視野を取り込んだ。

#### 参考文献

- Bateson, G. 1980. *Mind and Nature. A Necessary Unity*. London:Fontana.
- Davidse, K. 1991. *Categories of Experiential Grammar*. Unpublished PhD Dissertation , Katholieke Universiteit, Leuven.
- Eggs, S. 1994. *An Introduction to Systemic Functional Linguistics*. London: Pinter Publishers.
- Halliday, M.A.K. 1979. "Modes of Meaning and Modes of Expression: Types of Grammatical Structure, and their Determination by Different Semantic Functions." In D.J. Allerton et al (Eds.). 57-79.
- Halliday, M.A.K. and Hasan, R. 1985. *Language, Context, and Text: Aspects of Language in a Social-Semiotic Perspective*. Geelong, Vic.:Deakin University Press.
- Halliday, M.A.K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.  
(山口登、笈寿雄 訳『機能文法概説：ハリデー理論への誘い』 東京:くろしお出版. 2001年)
- Kato, S. 2007. A Study of Meaning between a Psychiatrist and his Patients: Based on the Transcribed Psychiatric Sessions by Harry Stack Sullivan. Ph.D Dissertation, Tohoku University.
- Thibault, P. J. 1993. "Using Language to Think Interpersonally: Experiential Meaning and the Cryptogrammar of Subjectivity and Agency in English." *Cultural Dynamics* 6, 1.
- White, M. and Epston, D. 1990. *Narrative Means to Therapeutic Ends*. New York: W.W. Norton & Company.

日本語テキストの Subject と Predicate の役割に対する一考察

**The Role of Subject and Predicate in the Japanese Text**

水澤祐美子

**Yumiko MIZUSAWA**

オーストラリア国立ウーロンゴン大学

**University of Wollongong**

**Abstract**

This paper will explore the role of Subject and Predicate in the Japanese text. Broadly speaking, unlike English, a Japanese clause does not necessarily need Subject. When Subject can be ellipsed in a clause, however, some clues are provided through a text. This study will examine the role of Subject and Predicate through the Mood analysis. Every language has the Mood system. However, Mood elements differ depending on languages (Matthiessen & Halliday, 1997). For example, whereas the Mood elements in English are Subject and Finite, the Mood element in Japanese is Predicate and Negotiator (Fukui, 1998, in press; Teruya, 1998, 2004, 2007). By analysing the Mood in the Japanese written texts, I attempt to demonstrate the role of Subject and Predicate. In order to recover Subject when it is ellipsed, I referred to honorifics. The result will suggest the role and the relation between Subject and Predicate.

1. はじめに

本稿の目的は、日本語における Subject と Predicate<sup>1</sup>の役割を選択体系機能理論の視点から考察することである。日本語では必ずしも Subject を必要としないことから、Subject の役割はこれまでも多く議論され、研究の対照となってきた。確かに、「黒板に『明日は休み』と書いてあった」(金谷, 2002, p.65)という文では英語の Subject に相当する要素は見受けられない。本稿では、Mood 分析を行い日本語の Subject と Predicate が果たす役割を考察していく。

## 2. Subject とは

Subjectという用語は、多様な意味を持つ。日本語のテキストでは、clause<sup>2</sup>がPredicateのみで成立できることから、Subjectは省略されることも多く、これまでに多くの定義がなされ、長い間研究の対象となってきた(大槻, 1987, 草野, 1987; 1899, 三上, 1963; 2002, 金谷, 2002, etc.)。三上(1963)による主語廃止論が持ち上がり、その後も議論されてきたが、未だ最終的な結論を出すにいたっていない(金谷, 2002)。三上も、以下に引用するように、日本語に動作主としての役割を持つ語が無いと述べているのではない。

英語のsubjectiveはsubjectである。

日本語のsubjectiveはsubjectiveに止どまる。

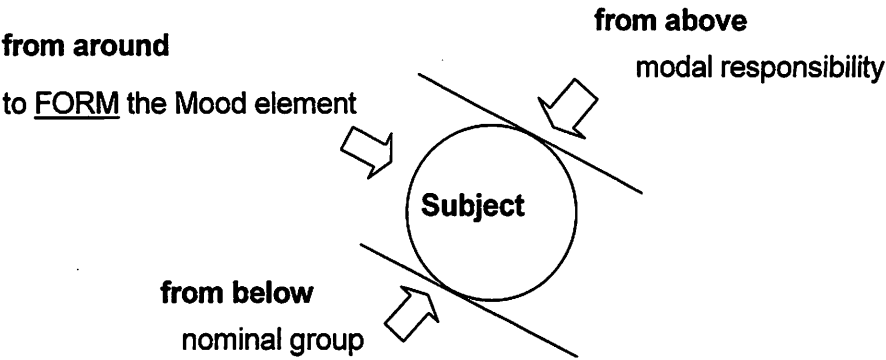
(三上, 1963: 192)

英語におけるSubject (主語) は日本語のsubjective (主格) に相当するものの、範囲が狭く、日本語の動作主はsubjective (主格)であり、Subject (主語) をも含む概念であると述べている。

Subjectという概念は、近代日本文法の成立する明治期以前の国学において、主語という概念は扱われておらず、「は」は係り結びの関係と見做されていた。明治期になり、西洋文法の記述に倣った大槻が、主語という概念を日本語文法の記述に使用するにいたった。Subjectは明治以降に導入され発展した近代日本文法が、英文法に倣い作り出した語である(金谷, 2002)。しかしながら、三上が認めているように、日本語にも動作主として役割をなす名詞句があるということに関しては研究者の認識は同じである。

選択体系機能理論の見地から、Hori (1995) による敬語とSubjectless<sup>3</sup>についての研究や、Subjectマーカーとなる助詞「は」の機能について、Themeとの関連についての研究も行われてきた(龍城, 2000, 長沼, 2007 etc.)。

一方、英語におけるSubjectは、理論により多様な解釈があるものの、clause内で普通省略されることは無い。選択体系機能理論において、clause内の他の構成要素と共に、幅広い、多岐にわたる機能を持っている<sup>3</sup>と定義されている(Halliday と Matthiessen, 2004, p.119)。英語におけるSubjectを三方向からの視点(trinocular perspective)に従い位置づけたものが図1である。



(Halliday & Matthiessen, 2004: 119)

図 1: Trinocular perspective から見た英語における Subject の位置づけ

図 1 からわかるように、英語では、Subject は Finite と共に Mood の構成要素となる。一方、日本語においては、Mood を構成する要素は Predicate に加え、Negotiator (Fukui, 1998, in press; Teruya, 2004, 2007) とされている。Negotiator は clause の最後に位置し、話し手・書き手の態度等を示す。疑問詞の「か」「の」「かい」や、念を押す間投助詞「ね」などが例として挙げられる (Teruya, 2007)。

例文を用い、両言語における Mood の構成要素の違いを説明する。表 1 は英語と日本語の clause を Mood 分析を用い示した。

英語

I	will	go	for a walk
Subject	Finite	Predicator	Adjunct
Mood		Residue	

日本語

散歩に	いきます
Adjunct	Predicate
Residue	Mood

表 1: 英語と日本語における Mood の違い

英語の Mood の構成要素は clause の初めのほうに位置するが、英語と異なり、日本語の Mood の構成要素は clause 終わりにいたるまで Mood type は決まらない。さらに、Teruya が示した Mood の構成要素である Predicate と Negotiator で成り立つ clause 例を表 2 に挙げる。

読まなければならなかったのかい。

<i>yom</i>	<i>anakereba</i>	<i>narana</i>	<i>katta</i>	<i>kamoshirenai</i>	<i>no</i>	<i>kai</i>
'read'	COND	'must'	PAST	'might'	EMP	INT
Process						
MODULATION						
TENSE						
MODALIZATION						
Predicate					Negotiator	
Mood						

(Teruya 2004)

表 2: Predicate における対人機能的可能性 (interpersonal potential)

日本語では、clauseの終わりに近づくとつれ、対人機能的可能性 (interpersonal potential) が増していく。また、表2の例ではSubjectは存在していない。このclauseだけを見る限り、Subjectは相手かもしれないし、その場に居合わせない第三者かもしれない。このような場合、Subjectはテキスト内、もしくはコンテキストから類推される。それでは、表3と表4の例における、Subjectはどうなるだろうか。

申し上げました。

<i>mooshiage</i>	<i>mashita</i>
humble-say	formal-PAST
Predicate	
Mood	

表 3: Predicate における謙譲語+丁寧語

仰いました。

<i>osshai</i>	<i>masita</i>
honorific-say	formal-PAST
Predicate	
Mood	

表 4 : Predicate における尊敬語+丁寧語

表3はPredicateに謙譲語が使用された例を、表4は尊敬語が使用された例を示した。表3のSubjectは話し手(書き手)、若しくは話し手側(書き手側)に属する者となる。表4のSubjectは聞き手(受け手)若しくは敬意を払うべき第三者となる。このように、尊敬語もしくは、謙譲語がPredicateに存在すると、存在しない場合よりも、Subjectが類推しやすくなる。

選択体系機能理論のから見た、日本語におけるSubjectは 'modal responsibility' 負う (Teruya, 2007) としている点で、英語とは変わらないが、例示したようにclause上に必ず

しも表出するとは限らない。以上を踏まえて、図2に日本語におけるSubjectをtrinocular perspectiveから位置づける。

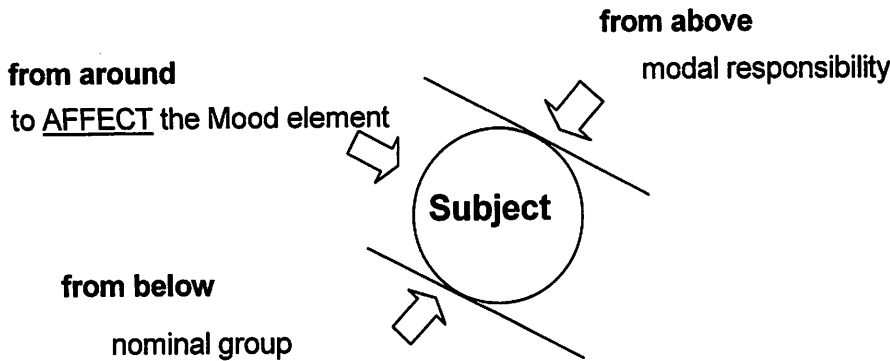
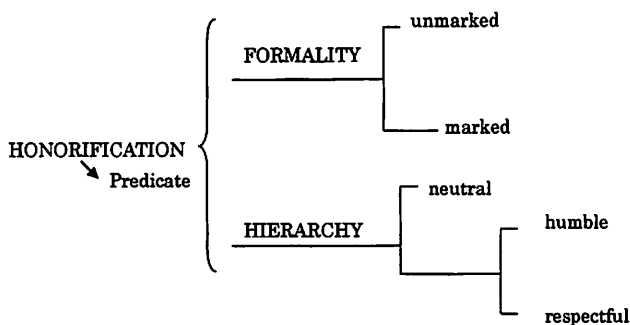


図 2: Trinocular perspective から見た日本語における Subject の位置づけ

英語では、図1でしめたように、SubjectがMoodの構成要素となるのに対し、日本語のSubjectはMoodの構成要素であるPredicateに影響を及ぼす可能性がある。このことは、Predicateに尊敬語と謙譲語が存在する場合に顕著となる。このような分析は、図3で示した、Mood システムと共に起こりうるHONORIFICATIONのシステムで可能となる。



以上を踏まえた上で、次節で、分析について、続いて、その結果を記す。

### 3. 分析

Mood 分析を用いテキストを分析した。Mood 分析を用いた理由は、Mood が語彙文法層において、対人関係を表現する要素であることによる。実際に教育機関や、会社等、様々な組織で使用された命令・依頼表現を含む書類をコーパスとし分析の対象とした。

コーパスは 56 テキストからなり、497 free clauses<sup>4</sup> の Predicate を分析し、更に、clause 上 Subject が表出しているか、表出していないかを調べた。Subject が表出していない clause に関してはテキスト、およびコンテキストから Subject を類推した。Subject を回復する際に、HONORIFICATION のシステムを参考にした。表出された Subject 及び類推された Subject を人称によって分けた。

#### 4. 結果

Subject が同一 clause に認められなかったものは 412 あった。一方、表出されている Subject も 85clause で認められた(表 5 参照)。

	I	we	you	3 <sup>rd</sup> person	類推不可	合計
Subject 無	247	1	130	23	11	412
Subject 有	0	0	0	85	-	85

表 5: Subject の有無と類推された Subject の内訳

類推できる Subject が 1 人称・2 人称の場合、全ての clause で Subject は省略されていた。1 人称・2 人称に較べると、Subject が 3 人称の場合には Subject は省略されることは少なかった。省略された 3 人称の Subject は 23clause だったが、表出された 3 人称の Subject は 85clause だった。その多さは 3 倍以上である。それぞれの代表例は表 6 に記載する。

Subject が同一 clause に存在しない例	類推される Subject
表題の件提出いたします。	1 人称単数 'I'
習慣づけましょう。	1 人称複数 'we'
お知らせ下さい。	2 人称 'you'
原簿のみで結構です。	3 人称 'non-human'
Subject が同一 clause に存在した例	Subject
損害は 莫大なものになりかねません。 Subject	3 人称 'non-human'

表 6: 省略/表出された Subject の文例

また、Subject が特定できない clause も 11clauses 存在した。全 11clauses を表 7 に記載する。これら 11clauses において、共通の特徴が認められた。常に、Predicate は名詞 + copula 「だ」の丁寧形「です」となり、Predicate に続く接続詞「が」の存在が共通している。さらに内容から、11clauses は 2 つの分類が可能となるった。以下、分類の内容を詳述する。

文例
1) 来週ですが、
2) ご依頼いただきました S C E 標準 P C ですが
3) パソコンの修理 (repair) ですが
4) 先日の教授会でお話させていただきました室内プレートですが、
5) 早速、ご質問にありました件ですが、
6) XX さんのトレーニングの件ですが、
7) 日程についてですが、
8) さっそくですが、
9) お手数ですが
10) 内容をご確認の上、お手数ですが
11) なお、ご承諾の上は、お手数ですが

表 7: Subject の特定が難しい 11clauses の文例

例えば、表 7-3)「パソコンの修理ですが」表 7-9)「お手数ですが」では、Subject の類推において違いが生じる。いずれの場合も、Subject を敢えて類推するとすれば、表 7-3)が「パソコンの修理ですが」⇒「[φ: この email は]パソコンの修理についてですが」となる。一方、表 7-9)は更に受け手の解釈を必要とし、敢えて、Subject を類推するならば、「お手数ですが」⇒「[φ: 私はあなたに]お手数[φ: をおかけして申し訳ありません]ですが」というようになるだろう。2 例とも、Subject の類推に、かなりの解釈を必要とする。しかし、いずれの場合も Subject を類推した clause は、不自然で、実際に使われることはない。11clauses は、表 7-3)の例に見られるように、類推した Subject が 3 人称となる場合と、表 7-9)の例に見られるように、類推した Subject が 1 人称となる場合の 2 分類が可能となった。表 8 は 11clauses を上記 2 分類に当てはめたものである。

3 人称の Subject が省略されており、なおかつ Subject の類推が適切でない場合は、話題的主題(topical Theme)的、1 人称の Subject が省略されており、Subject の類推が適切でない場合は comment Adjunct 的に使用されている。例えば、上記の例において、「パソコンの修理の件ですが」は、これから扱う話題を、「お手数ですが」は comment Adjunct が持つ機能である、その後続く clause に対する書き手の態度 (Teruya, 2007: 147)<sup>5</sup>を表していると言することができる。

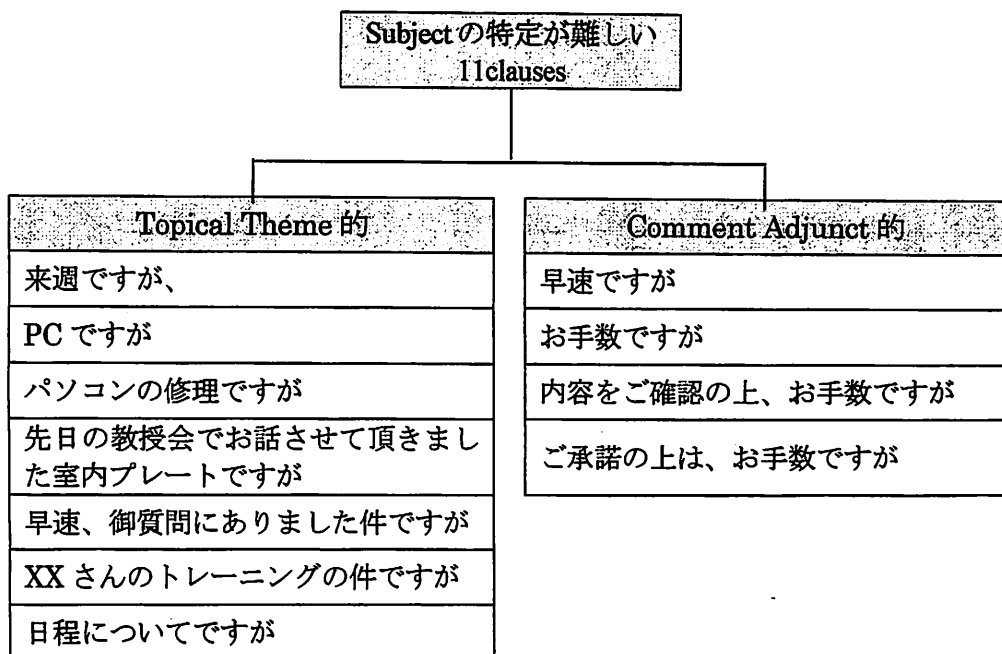


表 8: 主語の類推が難しい Predicate を持った clause の 2 分類

以上のように、Subject の類推が難しい clause は Subject が省略されているというよりも、Predicate が英語でいう前置詞句的、副詞的な役割を担っていると考えられる。これらは、書き手が丁寧さを加える為、敢えて丁寧語の「です」を使用していると考えることといえるのではないだろうか。

これまで見てきたように、日本語の Predicate は、Mood の構成要素であるとともに、Subject の類推をも可能にさせることもできる。加えて、Adjunct 的に使用できたり話題的主題 (topical Theme) の提示と、英語に比べると幅広いということがわかった。

## 5. おわりに

本稿は、Mood 分析を用い、日本語のテキストにおける Subject と Predicate を考察した。日本語における Mood の構成要素は Negotiator とともに Predicate であるとされているが、分析の結果、Teruya が述べたように Subject も modal responsibility を負うものとして Predicate の選択に影響を及ぼすことは明らかであった。さらに、Predicate、名詞+「です」は、接続詞「が」を伴い、topical Theme 的な役割を担ったり、comment Adjunct の役割を果たすことがわかった。敢えて、丁寧語を使用することで、書き手が読み手に対する敬意を表しているようである。三上は英語の Subject と日本語の動作主とを較べ、Subjective という言葉を用い、日本語の動作主は、その包括する概念が広いと述べた。

日本語の Mood の構成要素である Predicate も、英語の Finite に較べ、その包括する概念が広いといえるだろう。

## 参考文献

- 大槻文彦 (1897). 『広日本文典』 大日本出版
- 金谷武洋 (2002). 『日本語に主語はいらない』 講談社
- 草野清民 (1897). 「大槻氏の広日本文典を読みて所見を陳ぶ」 帝国文学, 第 3 巻 (第 6).
- 草野清民 (1899). 国語の特有せる語法-総主. 帝国文学, 第 5 巻 (第 5)
- 龍城正明 (2000) 「テーマ・レーマの解釈とスープラテーマ・プラーグ言語学派から選択体系機能言語学へ」 小泉保編『言語研究における機能主義』 くろしお出版
- 長沼美香子 (2007) 「日本語テキストにおける Theme の有標性への視点」 Proceedings of JASFL Vol.1
- 三上章 (1963). 『日本語の論理』 くろしお出版
- 三上章 (2002). 『構文の研究』 くろしお出版
- Fukui, N. (1998). *A description of the Mood system of a set of Japanese spoken dialogic text*. University of New South Wales, Sydney, Australia.
- Fukui, N. (in press). *Description of Mood in Japanese*. In E. A. Thomson & W. Armour (Eds.) *Systemic functional perspectives of Japanese*. London: Equinox publishing.
- Halliday, M. A. K., & Matthiessen, C. M. I. M. (2004). *An introduction to functional grammar* (3rd ed.) London: Arnold.
- Hori, M. (1995). *Subjectlessness and honorifics in Japanese: A case of textual construal*. In R. Hasan & P. H. Fries (Eds.) *On subject and theme: A discourse functional perspective* (pp. 151-186). Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Co.
- Mathiessen, C. M. I. M. (1995). *Lexicogrammatical cartography: English systems*. Tokyo: International Language Sciences.
- Mathiessen, C. M. I. M., & Halliday, M. A. K. (1997). *Systemic functional grammar: A first step into the theory*. Unpublished manuscript.
- Teruya, K. (1998). *An exploration into the world of experience: A systemic functional interpretation of the grammar of Japanese*. Macquarie University, Sydney, Australia.
- Teruya, K. (2004). *Metafunctional profile of the grammar of Japanese*. In A. Caffarel, J. R. Martin & C. M. I. M. Matthiessen (Eds.), *Language typology: A functional perspective* (pp. 185-254). Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Co.
- Teruya, K. (2007). *A systemic functional grammar of Japanese (Functional descriptions of language)*. London; New York: Continuum.

註

<sup>1</sup>研究者により、名称が異なる。Fukui (1998; in press)は Predicate と呼ぶが、Teruya (1998; 2004; 2007) は Predicator としている。本稿では Predicate を使用する。これは、英語の Mood 分析で Residue として扱われる要素のひとつに Predicator があるが、英語と日本語では、その機能が異なることに由来する。日本語において Mood 分析の対象となる要素は、英語の Finite に Predicator を加えた機能に近い(2004, 2007)ので、誤解を避けるためにも本稿では Predicate を使用する。

<sup>2</sup> 選択体系機能理論において、本稿では、分析の単位を clause とする。

<sup>3</sup> 原文では以下のように記述されている。“a thick [and] well-rounded category along with all the other elements in the structure of the clause” (Halliday & Matthiessen, 2004, p.119)

<sup>4</sup> Free clause に限定したのは、Mood を選択するのは free clause に限られるからである (Matthiessen, 1995)。

<sup>5</sup> Teruya (2007: 362) は、副詞句の modal Adjunct に加え、「失礼ですが」、「すみませんが」や「わるいけど」といった clause を modal adjunct と定義している。

## **Honorifics and Interpersonal Function**

— **from the perspective of Japanese and Polish addressee honorifics** —

**Mirosława KACZMAREK**

**Tokyo University of Foreign Studies**

### **Abstract**

Japanese is widely known as a language very difficult to acquire for foreign students. One of the biggest problems they face is the proper manipulation of honorifics in everyday speech.

Neustupny (1982: 107) points out that from the point of view of the use of honorifics two extreme types of foreigner communication behavior can be distinguished. One type involves constantly deploying the casual speech level, with no use of honorifics. The other type is constantly formal in behavior, using the polite speech level to everybody and on every occasion.

Many Japanese scholars also raised questions on formality and honorifics in Japanese. Ide (1989) makes sharp distinction between honorific languages like Japanese and non-honorific languages like English maintaining that they “look like entirely distinct systems of language use working in different languages and societies” (Ide 1989: 245). Similar distinction is made by Usami (2001: 25) who claims that in order to contrast English and Japanese on a common ground, a discourse framework is needed, because a sentence or clause are too limited in perspective.

Functional linguists are traditionally interested in how people use linguistic structures in interaction and claim that linguistic structures are always influenced by the social and cultural contexts of their use. They also suggest that the three register variables: mode, field and tenor can be evenly applied to any culture and any language. This paper has focused its attention on the variable of tenor and tries to relate the highly frequent linguistic forms that are being exchanged by speech participants to their social roles in interaction.

Assuming that formality is closely related to the manipulation of addressee honorifics, this paper focuses on the manipulation of addressee honorifics by speakers. Addressee honorifics in Japanese are associated with the polite speech levels of final sentence forms, while addressee honorifics in Polish correspond to the second person pronouns and the accompanying them third person verb forms (in the function of the second person).

Accordingly, for the purpose of the present study, the manipulation of addressee honorifics by speakers has been associated with the linguistic forms that are known in literature as shifters (Jakobson 1984, Silverstein 1976). It is suggested that despite differing linguistic forms and lexical meanings encoded in Japanese and Polish linguistic repertoires, interpersonal shifters when analyzed from a discourse level perspective will show certain overall regularities in the negotiation of interpersonal meanings between speakers.

Consequently, two different types of marked linguistic behaviors are presumed to exist on the

speaker – addressee deictic axes in Japanese and Polish. One of them is the behavior of the use of addressee honorifics, while the other one functions in the opposite direction and can be described as the behavior of the non-use or avoidance of addressee honorifics in interaction. Both types of these behaviors are defined as marked because by performing deictic function in the discourse, they have the property of explicitly marking the social relationship of speakers in the on-going conversation. It is suggested however, that due to differing socio-cultural norms, conventions and expectations, these behaviors correspond to different socio-psychological functions in interaction, complying with either negative or positive face wants (Brown & Levinson 1987) of the speakers.

## 1. Introduction

According to Halliday (1994), the functional character of language is understood as a meaning - making device. One of the major claims Halliday advocates in his theory is that language meanings are influenced by the social and cultural context in which they are exchanged. He states moreover that the process of using language is a semiotic process, a process of making meanings by choosing.

The main idea proposed for this study is to uncover the relationship existing between linguistic forms of addressee honorifics and the interpersonal (politeness) function in Japanese and Polish discourse. Addressee honorifics in Japanese unlike their referent counterparts tend to reoccur very often during conversation that makes them directly dependent on the surrounding context of interaction.

Considering the notion of linguistic function and the notion of meaning, Halliday (1994) and other linguists (Eggins 2004) argue that language is structured to make three main kinds of meanings simultaneously. Ideational meanings are about how experience is represented in language. Interpersonal meanings are about role relationships with other people and people's attitudes to each other. Textual meanings are about cohesion and coherence in texts, i.e. how what people are saying hangs together and relates to the surrounding context.

This study has centered its attention on the interpersonal function and interpersonal meanings linguistic structures defined in literature as addressee honorifics perform in Japanese and Polish spoken interactions. It is a contrastive discourse analysis on Japanese and Polish spoken corpora.

## 2. Honorifics

In Comrie's (1976) classification of honorifics in world languages, three deictic axes of honorific usage are distinguished: speaker – addressee, speaker – referent and speaker – bystander. The most wide-spread are the first two axes: speaker – addressee and speaker – referent, which are characteristic for both Japanese and Polish linguistic systems. The only difference between them is that in the case of Japanese honorifics these axes may split, while in the case of Polish honorifics they will always overlap.

### 2.1. The problem

In the area of second language education, honorifics have already become an enormous research

discipline. For learners whose mother tongue does not possess a system-based honorifics like Japanese, they are very likely to become one of the major obstacles in natural conversation and face-to-face contact with native speakers.

Neustupný (1982:107) distinguishes two extreme types of foreigner communication behavior that is related to the misuse of honorifics. One of them involves constantly deploying the casual speech level with no use of honorifics, while the other one constitutes constantly formal type of behavior with the use of the polite speech level to everybody and on every occasion.

Japanese scholars raised similar problems related to formality and honorifics in Japanese. Ide (1989) for instance makes sharp distinction between honorific languages like Japanese and non-honorific languages like English maintaining that they 'look like entirely distinct systems of language use working in different languages and societies' (Ide 1989: 245). Similar distinction is made by Usami (2001: 25), who claims that in order to contrast English and Japanese on a common ground, a discourse framework is needed, because a sentence or a clause are too limited in perspective.

This study takes the perspective that there are two distinct system rules governing the use of addressee honorifics in Japanese and Polish. Japanese addressee honorifics are used according to the rules of the honorific system (keigo) encoded in Japanese grammar, while Polish addressee honorifics are used according to the rules encoded in the verbal paradigm of the category of person. In order to find a common ground for contrasting the use of Japanese and Polish honorifics a discourse perspective has been adopted, i.e. face-to-face interactions were recorded, transcribed and analyzed in similar Japanese and Polish settings.

## 2.2. Honorifics and face wants

Brown & Levinson (1987) in their seminal monograph on politeness *Politeness, Some universals in language usage* adopted a new meaning of face, distinct one from the ordinary folk notion. The new notion of face is endowed with a general meaning that directly corresponds to socio-psychological 'wants' of an individual. It consists of two opposite face 'wants' corresponding to two kinds of face meanings.

According to Brown&Levinson (1987), negative face means 'the want of every competent adult member that his wants be unimpeded by others' (Brown&Levinson 1987:62), while positive face means 'the want of every member that his wants be desirable to at least some others' (Brown&Levinson 1987:62).

Face is strongly associated here with 'wants' that are interpreted as strong psychological constraints on human activities. This kind of dualism in face wants can be shortly summarized as a form of existing oppositional relations between wants for non-imposition versus wants for involvement, or between wants for distance versus wants for proximity. This opposition in wants served as the basis for Brown and Levinson (1987) for claiming the universality of the concept of negative and positive face that was supposed to be shared by all societies and cultures.

This study combines the notions of negative and positive face wants with the Halliday's notion of interpersonal function. Moreover, it draws out the linguistic structures of Japanese and Polish addressee honorifics and analyzes them in the light of the above dualism of wants. It inquires whether the addressee

honorific structures in Japanese can be interpreted as linguistic markers of negative face wants, and whether the addressee honorific structures in Polish could be interpreted as linguistic markers of positive face wants.

### 2.3. Honorifics in Japanese

In the tradition of Japanese grammar, honorifics are classified into three main parts: *sonkeigo* (exalting forms), *kenjōgo* (humble forms) and *teineigo* (courteous forms). In the view of the earlier mentioned deictic axes, *sonkeigo* and *kenjōgo* correspond to the speaker – referent axis and belong to referent honorifics. *Teineigo* on the other hand, is related only to the speaker - addressee axis and belongs therefore to addressee honorifics in the Japanese system. Examples are given below:

Verb: <i>iku</i> – go	(non-honorific)	neutral, dictionary form
<i>irassharu</i> – go	(referent honorific)	<i>sonkeigo</i> , exalting form,
<i>mairu</i> – go	(referent honorific)	<i>kenjōgo</i> , humble form
<i>ikimasu</i> – go	(addressee honorific)	<i>teineigo</i> , courteous form
<i>irasshaimasu</i> – go	(referent + addressee honorific)	<i>sonkeigo</i> + <i>teineigo</i> , exalting + courteous form
<i>mairimasu</i> – go	(referent + addressee honorific)	<i>kenjōgo</i> + <i>teineigo</i> humble + courteous form

It can be seen from the above examples that the characteristic feature of Japanese honorifics is the fact that the speaker-addressee axes split apart contrary to Polish honorifics where they overlap.

### 2.4. Honorifics in Polish

Compared to Japanese, Polish does not possess a system-based honorifics. In the tradition of Polish grammar it is not the honorifics that draw attention of teachers and researchers, but verbal paradigms that constitute various grammatical categories. One of the most important verbal categories is the category of person that distinguishes three persons in singular and plural.

In order to illustrate the use of addressee honorifics that are dependent on the category of person, two types of situations; casual and formal are distinguished in the examples below.

Casual situation (non-use of addressee honorifics)

1. (ja) mam	I have	1. (my) mamy	We have
2. (ty) masz	You have	2. (wy) macie	You have
3. on ma	He has	3. oni mają	They have (male)
ona ma	She has	one mają	They have (female)
ono ma	It has		

# Formal situation (use of addressee honorifics)

1. (ja) mam	I have	1. (my) mamy	We have
2. pan ma	You have (male)	2. panowie macie/mają	You have (males)
pani ma	You have (female)	panie macie/mają	You have (females)
3. pan ma	He has	państwo macie/mają	You have
pani ma	She has		(males&females)
		3. panowie mają	They have (males)
		panie mają	They have (females)
		państwo mają	They have
			(males&females)

As can be noted addressee honorifics accompany the second person pronouns, the third person pronouns<sup>i</sup> and verb forms. As the name ‘addressee honorifics’ suggests, they point to the addressee. The addressee is the hearer whose presence is manifested in the language structure by the 2<sup>nd</sup> person verb morphemes and the 2<sup>nd</sup> person pronouns. Being somebody different from the speaker, his face wants need to be marked by addressee honorifics in formal situations. Addressee honorifics therefore are used exclusively for formal situations, while referent honorifics are less dependent on the context of situation and show more commitment to the process of elaborating human relationships. They may also become highly grammaticalized like for instance in the following examples.

*Pozwolę sobie zauważyć, że....*      **I will let myself notice that....**

*Czy byłaby pani łaskawa, żeby....*      **Would you (madam) be kind to...**

*Czy byłby pan uprzejmy zająć miejsce?*      **Would you (sir) be kind to take your seat, please?**

It must be also emphasised that in the view of the fact stated before, i.e. that referent and addressee honorifics overlap, the referent of the speech situation very often becomes the addressee and therefore it is not always easy to state clearly their function in the text. One may say that when referent and addressee honorifics overlap, they perform a double function in the text.

## 3. Shifters as duplex structures

According to Pierce’s classification of signs into icons, indexes and symbols, icons are those sign vehicles that show some isomorphism (up to identity) with those of the entity signalled. The most common icons are onomatopoeias, like for instance the English “buzz” or the Japanese “pera pera”. Indexes on the other hand, are those signs where the occurrence of a sign vehicle token bears a connection to the occurrence of the entity signalled. Symbols are the residual class of signs, where neither physical similarity nor contextual contiguity hold between sign vehicle and entity signalled. They form the class of arbitrary signs traditionally spoken of as the fundamental kind of linguistic entity. (Silverstein 1976: 27)

Jakobson (1984) states that any linguistic code contains a particular class of grammatical units which

Jespersen (1922) labelled shifters, where the general meaning of a shifter cannot be defined without a reference to the message. Jakobson notes also that according to Pierce, a symbol (e.g. the English word *red*) is associated with the represented object by a conventional rule, while an index (e.g. the act of pointing) is in existential relation with the object it represents. He claims that shifters combine both functions and belong to the class of indexical symbols.

Silverstein (1976) developed the research on shifters in further directions. He suggested that the duplicity of shifters might be endowed with additional meaning, different from the one already discussed by Jakobson (1984). Jakobson distinguished four kinds of duplex type structures existing between code and message: message referring to message (M/M), code referring to code (C/C), message referring to code (M/C) and code referring to message (C/M). In this classification shifters take the place of code structures directly referring to message, constituting thus a link between the linguistic structures and the information that is going to be transmitted through them.

Silverstein (1976: 29) observed that symbols constitute only one mechanism for achieving reference in actual referential speech events. Shifters in contrast with symbols are defined as referential indexes and make up a mechanism in which there is no abstract system of prepositional equivalence relations, only the rules of use, which specify the relationship of actual referent of the sign token to the other variables of the context. The referential value of a shifter is therefore constituted by the speech event itself. In other words, Silverstein discovered that one of the characteristic features of shifters is the constituency in the paradigmatic structure of language use as well as their dependence on grammar. Shifters are supposed to “shift” regularly depending on the factors of the speech situation and are expected to reoccur in text. In contrast with symbols they are indispensable in texts and for this reason they play duplex functions of reference and textual cohesion.

### 3.1. Shifters, face wants and addressee honorifics

The value of shifters as referential indexes makes them extremely vulnerable to ever changing speech situation. The general pattern of their use is similar.

Some aspect of the context spelled out in the rule of use is fixed and presupposed. And in this sense, reference itself is once more seen to be an act of creation, of changing the contextual basis for further speech events. Recall that one of the ways in which the presupposition of the deictic can be satisfied is to have referred to the entity in question. (Silverstein 1976: 34)

Following Silverstein (1976) the use of shifters is inevitably connected with reference. Shifters need to refer to some entity in the outer world in order to accomplish the task they perform. In the case of honorifics for instance, they will either refer to the speaker, the addressee or the bystander (Comrie 1976).

As far as this study is concerned however, the question remains whether the linguistic morphemes of addressee honorifics in Japanese and Polish can be similarly defined as shifters in both languages. In Polish they are associated with the second person verb forms<sup>ii</sup> and the accompanying them second person pronouns, taking thus the addressee as a reference. In Japanese however, addressee honorifics

correspond to polite final speech level forms and it appears that there is no reference for them in the external context of conversation.

Furthermore, when applying negative and positive face wants (i.e. interpersonal function) to the Japanese and Polish 'duplex structures' (i.e. shifters), we will obtain a set of a two-element grammar choice with the content of the utterance remaining the same. Examples are given below.

#### JAPANESE

the use of addressee honorifics

polite speech level

##### NEGATIVE FACE WANTS

(1) a. *daigaku e ikimasu.*

I am going to the university.

(2) a. *atsui desu.*

It is hot.

the non-use of addressee honorifics

non-polite speech level

##### POSITIVE FACE WANTS

(1) b. *daigaku e iku.*

I am going to the university.

(2) b. *atsui.*

It is hot.

#### POLISH

the use of addressee honorifics

second person verb form

##### POSITIVE FACE WANTS

(1) a. *Będzie pan łaskaw się tutaj podpisać.*

Would you be kind to sign here, please.

(2) a. *Czy mogłaby mi pani pożyczyć długopis?*

Could you lend me a pen, please.

the non-use of addressee honorifics

first person verb form

##### NEGATIVE FACE WANTS

(1) b. *Proszę się tutaj podpisać.*

(I ask you to) Sign here, please

(2) b. *Chciałbym pożyczyć długopis.*

I would like to borrow a pen, please.

#### 4. Interpersonal function and interpersonal meaning

Halliday and Hasan (1976: 2) maintain that text is a 'unified whole' not in terms of forms, but in terms of meanings. They state that people negotiate texts in order to make three main kinds of meanings simultaneously: ideational, interpersonal and textual. The choice of the linguistic form against other linguistic forms in the text symbolizes one of its meanings and therefore corresponds to its function in the text. Halliday (1994) states that this multifunctional language structure is possible because language is a semiotic system, a conventionalised coding system, organized as a set of choices.

This study takes into account the interpersonal (or rather interactional?) level of language structure, which is concerned with speakers' role relationships. The role relationships are unequal, as the speech participants are academic teachers interviewing their students.

Before setting about separate analyses of Japanese and Polish texts, a model for the afterward, contrastive reference area was constructed first. It included two types of macro-meanings that arise from the sequential implicativeness<sup>iii</sup> of the text. The meanings express speech participants' role relations that are being created in the processes of exchanging highly frequent linguistic morphemes between two neighbouring utterances. It is presumed that the interpersonal (or interactional) meanings they convey are the same for Japanese and Polish texts. They are illustrated below.

[up/down] : interpersonal meaning of superiority

characteristic behaviour of a supervisor towards his/her subordinate

Jap: [P/N] a speech level shift from polite to non-polite final speech level form, see: 5.2.1.

Pol: [SP/HE] a personal verb form shift from the first to the second person verb form, see: 5.2.2.

[down/up] : interpersonal meaning of subordination

characteristic behaviour of a subordinate towards his/her supervisor

Jap: [N/P] a speech level shift from non-polite to polite final speech level form, see: 5.2.1.

Pol: [HE/SP] a personal verb form shift from the second to the first person verb form, see: 5.2.2.

## 5. Method

In order to illustrate the relationship between the above mentioned models of macro-meanings that constitute patterns of the recurring addressee honorific usage in Japanese and Polish speech, a discourse analysis has been chosen as a method for the present research.

### 5.1. Linguistic material

As mentioned earlier, the linguistic material used in this study consists of interviews recorded between academic teachers and students on writing student's graduate dissertation. 12 interviews were recorded at Casmir the Great Academy, Bydgoszcz, Poland, in March 2003. Three months later, 12 interviews between academic teachers and students were recorded at Tokyo University of Foreign Studies in Tokyo, Japan.

### 5.2. Data analysis

The recorded material was transcribed into a database of computer software Excel 2000. 10 minutes of each interview were transcribed into a computer database. Japanese text was transcribed according to the Basic Transcription System for Japanese (BTSJ) proposed for Japanese by Usami (2003), while transcription process of the Polish material followed transcription conventions proposed for Polish by Kaczmarek (2006).

Transcribed utterances were analyzed according to two topics.

First topic was confined to analyzing single utterances, where all utterances were classified into analytic categories. The main analytic category for this study comprised of utterances containing linguistic structures marked for interpersonal function. In the case of Japanese it was a sentence final speech level form, either a polite *~desu*, *~masu* ending or a non-polite *~da* ending. In the case of Polish on the other hand, it turned out to be either the second or the first person verb morpheme. In other words, all the Japanese and Polish morphemes belonged to the category of indexes.

Second topic of analysis was of a different nature than the first one. As long as the first topic was confined to the choices made by single speakers and the analysis was carried out in the boundaries of single utterances and did not take into account the surrounding context of other utterances and other

speakers, the second topic was related to the choices made by both the speaker and the hearer and had a more context sensitive nature. It aimed at describing not only linguistic forms, which are always language specific (as is the case of the first topic) but also and first of all the processes of exchanging the linguistic forms between speakers.

Although both topics can be defined as instances of language use, because when making a choice one has to take some action, the first topic reflecting the action of only one speaker was more of a static kind than the second one. The second topic, reflecting the action of both the speaker and the hearer, had a more dynamic nature and could therefore be characterized as the type of language use in its proper name.

This paper claims that linguistic function as understood by Halliday and his associates is more applicable in the previously mentioned second topic of analysis, i.e. in the processes of exchanging the linguistic forms by speakers rather than in the first topic that comprises single utterances uttered by individual speakers.

### 5.2.1. Coding of Japanese

As stated above, the coding process of the Japanese data consisted of two topics.

The analysis of the first topic was confined to single utterances. All utterances were divided into three types that corresponded to the three kinds of choices on the part of the speaker. They included utterances containing polite final speech level forms, utterances containing non-polite final speech level forms and all the rest of utterances that contained no markers of final speech level forms. They were coded in the following way:

Topic 1: utterance final speech level forms

[P] : POLITE final sentence speech level form

[N] : NON-POLITE final sentence speech level form

[NM] : NON-MARKED utterances not marked for final speech level forms

The analysis of the second topic was based on the results of the first topic and took into account only those utterances that contained either polite final sentence forms [P] or non-polite final sentence forms [N]. They had to be a pair of two neighboring utterances uttered by different interlocutors and had to be of the opposite type. They were coded in the following way:

Topic 2: speech level shift

[P/N] : Down-shift of a speech level

shift from the preceding utterance containing POLITE final speech level form [P] to the following utterance containing NON-POLITE final speech level form [N] and occurring between different Interlocutors.

[N/P] : Up-shift of a speech level

shift from the preceding utterance containing NON-POLITE final speech level form [N] to the following utterance containing POLITE final speech level form [P] and occurring between different Interlocutors.

The coding process of the first and second topic with the example of the interview transcript is presented below.

LINE NO.	UTT. NO.	UTT. END	SPEAKER	CONTENT OF UTTERANCE	UTT. FINAL SPEECH LEVEL	SPEECH LEVEL SHIFT
104	102	*	JTF01	あの一、中国は香港映画を年20本って限定してると書いてありますよね。 well, it says here that China limits Hong Kong films up to 20 pieces a year.	P	
105	103	*	JSF05	はい。 yes, I see.	NM	
106	104	*	JTF01	香港のほうは中国映画は限定してるんですか、じゃ相互主義で？。 what about Hong Kong?, does it limit Chinese films too, as a kind of revenge?	P	
107	105-1		JSF05	いいえ、限定して<いない>[<], no, it doesn't limit.	/	
108	106	*	JTF01	<していない>[>]。 it doesn't.	N	
109	105-2	*	JSF05	です。 it doesn't limit.	P	N/P
110	107	*	JTF01	っていくらでも入ってこれる。 so regardless how many, everything may enter.	N	P/N
111	108	*	JSF05	はい。 yes.	NM	

### 5.2.2. Coding of Polish

Coding of the Polish data like the coding process of Japanese data consisted of two topics

The analysis of the first topic was confined to single utterances. All utterances were divided into three types that corresponded to the three kinds of choices on the part of the speaker. They included utterances containing second person verb forms, utterances containing no second, only first person verb forms and all the rest of utterances that contained neither second nor first person verb forms. They were coded in the following way:

Topic 1: personal verb forms

[SP]: SPEAKER no second, only first person verb form in an utterance

[HE]: HEARER second person verb form in an utterance

[NM]: NON-MARKED no mark of either second nor first person verb form in an utterance

The analysis of the second topic was based on the results of the first topic and took into account only those utterances that contained no second, only first person verb forms [SP] and utterances that contained second person verb forms [HE]. They had to be a pair of two neighboring utterances uttered by different interlocutors and had to be of the opposite type. They were coded in the following way:

**Topic 2: personal verb form shift**

[SP/HE] : shift from the preceding utterance containing no second, only first person verb forms [SP] to the following utterance containing second person verb forms [HE] and occurring between different Interlocutors.

[HE/SP] : shift from the preceding utterance containing second person verb forms [HE] to the following utterance containing no second, only first person verb forms [SP] and occurring between different Interlocutors.

The coding process of the first and second topic with the example of the interview transcript is presented below.

LINE NO.	UTT. NO.	UTT. END	SPEAKER	CONTENT OF UTTERANCE	PERS. VERB FORM	PERS. S. VERB FORM SHIFT
27	25	*	PTF04	bo ten, y-, ten tom, m, z p, w którym jest "zagadnienia frazeologii europejskiej", tam gdzie jest też tekst pana (nazwisko) i mój, to pani już oglądała ten tom?, taki niebieski, z gwiazdkami?, nie <śmiejąc się>. <i>because well, er -, that volume, in which there is 'problems of European phraseology', there is also a text written by Mr (surname) and by me, you have already seen that volume?, the blue one, with stars?, no &lt;laughing&gt;.</i>	HE	
28	26	*	PSF09	A nie, nie, <widziałam go>{<}. <i>oh, no, no, I have seen it.</i>	SP	HE/SP
29	27	*	PTF04	<tak, tak?>{>}. <i>oh yes, yes?.</i>	NM	
30	28	*	PSF09	tak, tak, <widziałam>{<}. <i>yes, yes, I have.</i>	SP	
31	29	*	PTF04	<bo ja, może go mam>{>}, chciałam sprawdzić. <i>because I, I may have got it, I wanted to check it.</i>	SP	
32	30	*	PSF09	przypominam sobie. <i>I can recall it.</i>	SP	
33	31	*	PTF04	ale tam nie wszystko (mhm) się nadaje (tak), tak żeby pani mogła z tego skorzystać, bo wiadomo, że pani czegoś konkretnego szuka, żeby już pod tym kątem. <i>but not everything there (right) is going to be useful (yes), so that you can make use of it, because as long as we know that you are looking for something, so that you keep looking for it in this direction.</i>	HE	SP/HE

## 6. Results and Discussion

Results of data analyses are presented in three parts.

The first part provides general information regarding the linguistic material and the transcribed utterances.

The second part highlights the results of the first topic of analysis contrasting the frequency of Japanese and Polish utterances marked with shifters (indexes) versus other utterances that are not marked with shifters (indexes), i.e. are non-marked.

The third part highlights the results of the second topic of analysis, i.e. the shifting behaviors that occurred between neighboring utterances containing shifters (indexes) between academic teachers and students. The stress of the analysis is put on illustrating the relationship between addressee honorifics in Japanese and Polish and the interpersonal function they perform (face wants they conform with).

### 6.1. General information

Information regarding the number of interview data, time of recording, total number of transcribed utterances [N], mean length of utterances in a single interview [M], as well as the standard deviation [SD] from the mean length value, is provided below.

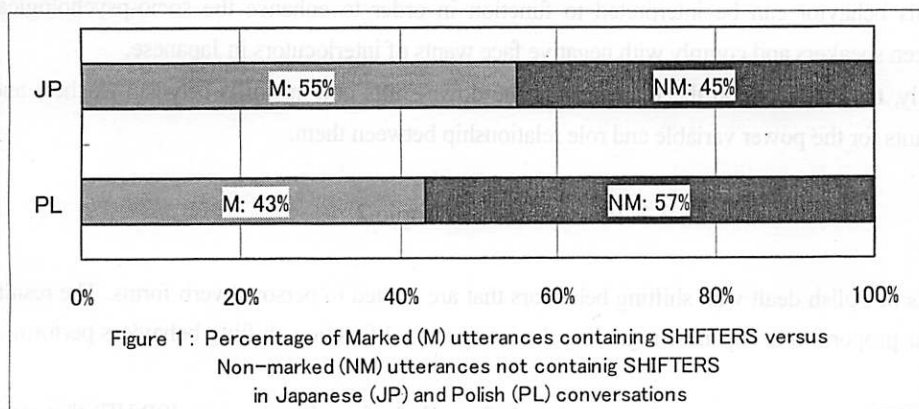
Table 1: General information

Language	Number of interaction data	Time of recording	Transcribed utterances		
			N	M	SD
Japanese	12	120 minutes	1225	102.1	37.2
Polish	12	120 minutes	1198	99.8	20.8
Total:	24	240 minutes	2423	101.0	8.2

### .2. Results of Topic 1

In the total of 24 interviews performed between Japanese and Polish academic teachers and students, it was discovered that the quantity of shifters (indexes) in Japanese data had a tendency to exceed half of the total number of utterances (55%). In Polish data on the other hand, the number of utterances containing shifters (indexes) showed the opposite tendency of not reaching half of the total number of utterances (43%).

The results of Japanese and Polish data are contrasted in the figure below.



The above results show that the use of the linguistic forms marked with shifters (indexes) (M) has a default value (over 50%) in Japanese, while the use of the linguistic forms not marked with shifters

(indexes) (NM) has a default value in Polish.

The results can be interpreted in the following way.

Considering the premise that the use of utterances containing shifters (indexes) plays a function of directly contributing to the creation and maintenance of interpersonal meanings in interaction, the default value (over 50%) in Japanese can be interpreted as a background for conveying other meanings. On the other hand, the default value of the linguistic forms not marked by shifters (NM) in the Polish data, suggests that the behaviour of creating and maintaining interpersonal meanings is not a necessary condition for the interaction management, because the expected behaviour of speakers is not necessarily focused on maintaining and creating interpersonal meanings.

### 6.3. Results of Topic 2

The results of Topic 2 constituted a two-utterance level analysis and dealt with the analysis of the marked linguistic behaviors, i.e. behaviors involving utterances that contained shifters (indexes) and that were conducted between speakers of different social statuses (teachers and students). It was presumed that the behaviors of the use and the non-use of addressee honorifics would show different frequency according to the speaker's social role and status.

#### 6.3.1. Japanese results of Topic 2

The analysis of Japanese concentrated on speech level shifts from interlocutors.

The occurrence of Down-shifts from Interlocutors (P/N) that stand for the behavior of the non-use of addressee honorifics (-HON) was higher in the teachers' utterances. This behavior can be interpreted to function in order to diminish the socio-psychological distance between speakers and comply with positive face wants of interlocutors in Japanese. On the other hand, the percentage of Up-shifts from Interlocutors (N/P) that stand for the behavior of the use of addressee honorifics (+HON) was higher in students' utterances. This behavior can be interpreted to function in order to enhance the socio-psychological distance between speakers and comply with negative face wants of interlocutors in Japanese.

Consequently, the difference in the frequency of the down-shifts and up-shifts between teachers and students accounts for the power variable and role relationship between them.

#### 6.3.2. Polish results of Topic 2

The analysis of Polish dealt with shifting behaviors that are related to personal verb forms. The results showed similar proportion to Japanese regarding the interpersonal function shifting behaviors perform in interaction.

The occurrence of the first to second personal verb form shifts from Interlocutors (SP/HE) that stand for the behavior of the use of addressee honorifics (+HON) was higher in teachers' utterances. This behavior can be interpreted to function in order to diminish the socio-psychological distance between speakers and comply with positive face wants of interlocutors. On the other hand, the occurrence of the

second to first personal verb form shifts from Interlocutors (HE/SP) that stand for the behavior of the non-use of addressee honorifics (-HON) was higher in students' utterances. This behavior can be interpreted to function in order to enhance the socio-psychological distance between speakers and comply with negative face wants of interlocutors.

As in the case of Japanese discourse level phenomena, the proportion between first to second (SP/HE) and second to first (HE/SP) personal verb form shifts from Interlocutors can be interpreted as reflecting the power variable and role relationship between teachers and students.

### 6.3.3. Japanese and Polish results of Topic 2 contrasted

The above results of Japanese and Polish data imply the following interpretation.

The linguistic behaviors of the use of addressee honorifics (+HON) play different interpersonal functions in Japanese and Polish interaction. They comply with negative face wants in Japanese and positive face wants in Polish. In the case of linguistic behaviors of the non-use of addressee honorifics (-HON) they comply with positive face wants in Japanese and negative face wants in Polish.

Moreover, when analyzed from a discourse level perspective these behaviors show certain regularities in the frequency of the 'expected' shifting behaviors that function as markers of the interlocutors' social roles and statuses. (see also Kaczmarek 2007)

## 7. Conclusion

Brown & Levinson (1987) claim that the concept of face and its related negative and positive face wants are universal concepts and can be applied to any society and any culture.

In the light of their theoretical framework and the findings of the present study, it can be stated that due to different expectations related with face wants in Japanese and Polish societies, the linguistic behaviors of the use and the non-use of addressee honorifics are related to different face wants of interlocutors in interaction.

In Japanese, the behavior of the use of addressee honorifics is related to negative face wants of the speakers, while in Polish it seems to comply with their positive face wants and has a positive politeness function in interaction. On the other hand, the behavior of the non-use of addressee honorifics in Japanese seems to comply with the positive face wants of speakers, while in Polish it seems to be related to their negative face wants and play a negative politeness function in interaction. It is supposed that this opposition of face wants reflected in the use of addressee honorifics may have already influenced the perception of speakers, who when confronted with a foreign language system may find it a hindrance on their way to gain pragmatic competence and fluency in spoken Japanese.

Moreover, regarding the linguistic behaviors that involve shifters or indexes, which are supposed to play explicit roles in the negotiation of interpersonal meanings between interlocutors, it was found that these behaviors when contrasted from a discourse level perspective constitute a background behavior (have a default, unmarked value) for conveying other meanings in the Japanese mode of interaction, while in Polish they function as secondary (marked) meanings.

## References

- Brown, P. & Levinson, S.C. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, B. 1976. *Linguistic politeness axes: speaker-addressee, speaker-referent, speaker-bystander*. Pragmatics Microfiche 1.7:A3. Dept. of Linguistics. University of Cambridge.
- Eggins, S. 2004. *An Introduction to Systemic Functional Linguistics (2nd Ed.)*. New York London: Continuum.
- Halliday, M.A.K. and Hasan, R. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Halliday, M.A.K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar (revised edition)*. London: Edward Arnold.
- Ide, S. 1989. Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua* 8-2/3. 223-248.
- Jakobson, R. 1984. Shifters, verbal categories and Russian verb, in: Halle, M., Waugh, L.R. (edit.), *Russian and Slavic Grammar Studies 1931-1981*, Berlin-New York-Amsterdam: Mouton Publishers.
- Jespersen, O. 1922. *Language: Its Nature, Development, and Origin*. New York: The Norton Library, W.W. Norton & Company.
- Kaczmarek, M. 2006. Polski tekst mówiony jako przedmiot zainteresowań lingwisty – propozycja systemu transkrypcji oraz metod analizy tekstu – [Spoken Polish text as a subject of an interest for the linguist – a proposal for the system of transcription and the methods of text analysis], *Slavia Occidentalis Iaponica*, vol. 9, Japan Association of Occidental-Slavic Studies, 81-116.
- Kaczmarek, M. 2007. Honorifics and interpersonal meaning in face-to-face interaction - a contrastive discourse analysis of Japanese and Polish -, *Language Area and Culture Studies*, No. 13, Graduate School of Tokyo University of Foreign Studies, 69-86.
- Neustupný, J.V. 1982. *Gaikokujin to no komyunikēshon* (Communicating with Foreigners), Tokyo: Iwanami shinsho.
- Silverstein, M. 1976. Shifters, Linguistic Categories, and Cultural Description, In: Keith H. Basso & Henry A. Selby, eds., *Meaning in Anthropology*. Albuquerque: University of New Mexico Press.
- Usami, M. 2001. Danwa no poraitonesu – poraitonesu no danwa riron kōsō, *Danwa no poraitonesu Discourse Politeness*. Kokuritsu kokugo kenkyūjo, Dai 7 kai Kokuritsu kokugo kenkyūjo kokusai shinpojiumu dai 4 senmon bukai, 9-58.
- Usami, M. 2003. Kaiteiban: Kihonteki na mojika no gensoku [Revised version: Basic Transcription System for Japanese: BTSJ] *Tabunka kyōseishakai ni okeru ibunka komyūnikēshon kyōiku no tame no kihonteki kenkyū* [Basic research for education on communication in the multi-cultural society], Heisei 13-14, kagaku kenkyūhi hojokin, kihan kenkyū C(2) (kenkyū daihyōsha : Usami Mayumi) kenkyū seika hōkokusho. 4-21.

<sup>i</sup> The third person pronouns and verb forms are accompanied by addressee honorifics only if the person talked about (the third person) is actually present at the communication scene.

<sup>ii</sup> Linguistic structure however, is identical with the third person form.

<sup>iii</sup> Sequential implicativeness arises from the fact that language is tied to linear sequence, so that one part of a text (a sentence or a turn at talk) must follow another part of the part (the next sentence or turn at talk). The outcome of this is that each part of the text creates the context within which the next bit of the text is interpreted.

イデオロギーの復興  
**The Restoration of Ideology**

南里敬三  
**Keizo NANRI**  
大分大学  
**Oita University**

**Abstract**

In the first half of the 1980s, Martin proposed an ideology-centered linguistic semiotic model (which will be referred to as LS モデル in the present paper), a model that attempts to elucidate the process of text generation. However, in 1997, the level of ideology was deleted from the LS model. The present paper attempts to restore ideology in his LS model, revising the model. The discussion to be presented in the paper will be restricted to the following points, (1) the definition of ideology, (2) feedback from the context of situation (register) to ideology, and (3) feedback from the context of culture (or genre) to ideology. The third point will be suggested by analyzing some *Asahi* and *Yomiuri* editorials. It should also be noted that the entire discussion will be restricted to editorial genre in Japanese.

1. はじめに

ジム・マーティンは 1980 年代の前半にイデオロギーを中心に据えた LS モデルを発表した。クレス、ファウラー、トゥルーらのクリティカル・ディスコース・アナリシス (CDA) の研究家の影響を強く受けたマーティンは、言語活動の中核にイデオロギーの作用を見出し、原則として言語活動はイデオロギーの具現であるとの仮説を立てるに至る。

しかし、この LS モデルも 1997 年にはイデオロギーのレベルが削除されイデオロギー的特殊性は極度に薄められることとなる。この削除に関してマーティンは、イデオロギーをまずは主観性 (subjectivity) の問題と捉えなおし、その上で、その主観性は三つの異なる次元においてある程度の時間的スパンの中で観察されるべきものと主張する (Martin, 1997: 10)。第 1 の次元は、テキスト生成の次元。マーティンはこの次元でのテキスト生成を「ロゴジェニシス」と呼ぶ。第 2 の次元は、テキスト生産者 (話し手、又は、書き手) の恐らくはその生涯に渡る思想変容の次元。マーティンはこのような思想変容を「オントジェニシス」と呼ぶ。第 3 の次元は社会を構成するグループの間における覇権掌握関係が観察可能な次元。マーティンはこのような観察が可能になるには数世代に渡る観察が必要であろうと示唆しており、この次元

での変容をファイロジェニシスと呼んでいる。この三つの次元は、ファイロジェニシス（社会内の覇権掌握関係の変容）がオントジェニシス（テキスト生産者個人の思想変容）に環境を提供し、オントジェニシスが今度はロゴジェニシス（テキスト生成を通してのテキスト内あるいはテキスト間に観察される思想変容）に環境を提供するという関係にある（Martin, 1997: 9）。

このような重層的捉え方をしてイデオロギーとは見えてくるものであって、特定集団の（恐らくは共時的な）思想の束だにとらえると思思想主体（subjects）であるテキスト生産者の思想を鑄型に無理やりはめてしまうことになることになるとマーティンは述べている。そして、これがイデオロギーレベルの削除の理由であるとしている（Martin, 1997: 10）。（話をわかりやすくするために、上記三つの次元で観察されるイデオロギーをそれぞれ「ファイロ・イデオロギー」「オント・イデオロギー」「ロゴ・イデオロギー」と呼ぶことにするが、本稿ではロゴ・イデオロギーの考察は行わない。これはロゴジェニシスの実態が明らかにされていないことによる。）

本稿はまず、上述のイデオロギーに対する3次元アプローチの必然性がイデオロギー削除の理由ではなく、ファイロ・イデオロギーを目的論的イデオロギーと見なしたことがその理由であることを示唆し、イデオロギーをオント・イデオロギーに限定する。次に、状況のコンテクストからのフィードバックの有用性を論じた後、朝日新聞及び読売新聞の社説分析を通してジャンルからのフィードバックの必要性を説く。最後に、イデオロギー指向のLSモデルの提示を行う。

## 2. イデオロギー

先に、「特定集団の（恐らくは共時的な）思想の束だにとらえると思思想主体であるテキスト生産者の思想を鑄型に無理やりはめてしまうことになる」<sup>1</sup>との理由からイデオロギーのレベルが削除されたことを述べたが、鑄型強制の原因はイデオロギーのレベルの設定にあるのではなく「ファイロ・イデオロギー」をイデオロギーと見なしていることに、まずは、起因すると思われる。

CDAの研究者から影響を受けたと自ら認めるだけあって（Martin, 1992: 582）、マーティンのイデオロギーの定義はCDA研究家のそれとほぼ同じであり<sup>2</sup>、「異なる世代、性別、民族、社会階級に属する特定集団が用いる、コンテクストと密接に関連付けられている言葉の使われ方（contextually specific semantic styles）を通して具現される」「意味の仕方の方向性（coding orientations）」の束（あるいはシステム）であると定義されている（Martin, 1992: 507）。これはオント・イデオロギーに相当するものと思われる。そして、このイデオロギーの定義に、権力の分配機能が付け加えられる。権力分配機能とは、Martin（1985: Chapter 3, 1986）によれば、社会を、右派と左派、及び、プロタゴニストとアンタゴニストに分割していく機能のことである。これはファイロ・イデオロギーの作用によるものであると考えられる。

マーティンのLSモデルではこの二面性を持つイデオロギーが出発点となってテキストが生成される。図1<sup>3</sup>を参照されたい。イデオロギーは先ずはジャンルによって具現される。ジャンルとは、いくつかのステージを設定しそ

のステージを通り抜けていくことで社会交渉を行おうとする行為あるいはそのような計画のことである。交渉戦略と考えてもよい。交渉戦略が決まると、その戦略はレジスターによって具現される。マーティンにとってレジスターは状況のコンテクスト (context of situation) を指し (Martin, 1992: 495)、そこで適切な活動領域、役割関係、伝達様式が選択され、その選択結果が最終的にある特有の言語スタイルを有するテキストとして具現される。引き金はイデオロギーであり、その目的論的意図 (telos) <sup>4</sup>がジャンル、レジスター、言語と次々に具現されテキスト生成がなされるとこの LS モデルは主張している。

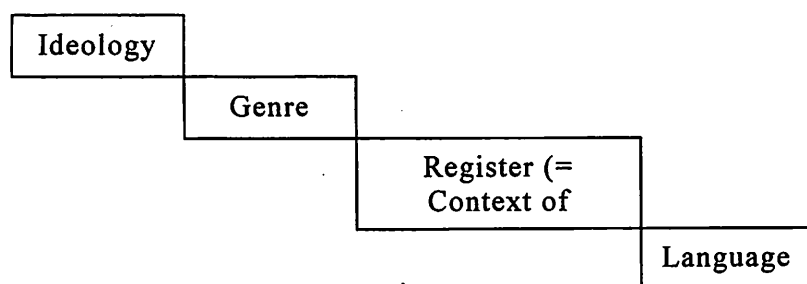


図 1. マーティンの LS モデル

そこで、その引き金となるイデオロギーがファイロ・イデオロギーであるとうなるかである。ファイロ・イデオロギーが LS モデルの最上階にある場合、社会全体を数世代に渡って支配する権力分配機能あるいは覇権関係維持機能が社会的交渉から言語まで目的論的に具現されているとなる。もしこれが正しいのなら、オント・イデオロギーの出る幕はない。どんな思想主体者が現れようと、テキストの生成は社会全体を通時的に支配する力の具現に他ならないからである。そして、これはオント・イデオロギー、即ち、思想主体であるテキスト生産者の思想を鋳型に無理やりはめてしまうことに他ならない。

筆者は覇権関係維持機能の存在を否定はしない。しかし、それをオント・イデオロギーと同様に何かを目的論的に遂行する力と見なした瞬間、LS モデルは極端に硬直化してしまう。このような極端な硬直化から抜け出す道は覇権関係維持機能を目的志向のイデオロギーとは見なさないことである。よって、本稿ではファイロ・イデオロギーはイデオロギーとは見なさない。オント・イデオロギーをイデオロギーと見なす。

但し、特定の集団が共有する意味の仕方の方向性という定義だけでは文化と同値になってしまう。そこで Martin (1985: 50) での主張、即ち、イデオロギーとは権力志向であるとの主張を取り入れ、イデオロギーを下記のように定義する。

イデオロギーの定義：

異なる世代、性別、民族、社会階級に属する特定集団が用いる、コンテクストと密接に関連付けられている言葉の使われ方を通して具現される意味

の仕方の方向性の束で、権力志向のもの。

では、イデオロギーをオント・イデオロギーに限定するだけでイデオロギーの復活は可能なのか。可能だが、少なくともひとつ条件がある。その条件とはLSモデルにイデオロギーへのフィードバックを付け加えることである。

### 3. 状況のコンテキストからのフィードバック

マーティンのLSモデルにはいわゆる「外界」が存在しない。ここでいう外界とはイデオロギーの外の世界である。テキストはイデオロギーの具現だとの立場をマーティンは取っているので、外界とはテキストの外の世界であるとも定義できる。では、テキストが生み出される状況はどうか。これはテキストの外に存在し得るものではないのか。マーティンにとって状況のコンテキストはメタ機能であり、情報の束にすぎない。活動領域も役割関係も伝達様式もLSシステムの一部であり、その存在はイデオロギーによって目的論的に保証されている。よってイデオロギーの意向に反するような状況のコンテキストは原則的にあり得ない。

しかし、LSモデル始発点がオント・イデオロギーであるとするれば、これは受け入れ不可能な理論である。もし仮に受け入れ可能であるとするならば、テキスト生成に関わる状況のコンテキストの一切の要素はテキスト生産者のイデオロギー的創造物であるとの結論に達せざるを得なくなるからである。

Nanri (1993) は状況のコンテキストの役割関係に焦点を当て、どのような社会階層の人のびとがテキスト生産者、及び、テキスト消費者になり得るかはその時々、社会経済状況によって異なると指摘した後、外界に社会経済のダイナミズムの存在を想定し、そこから、状況のコンテキストの役割関係を通じてイデオロギーに働きかけがなされているはずだと主張している。つまり、外界から状況のコンテキスト経由でフィードバックがあり、それがイデオロギーに変容を要求していると論じている。

同様に、イデオロギーへのフィードバックは活動領域、伝達様式についても不可欠である。でなければ、例えば、ブログによる匿名のブログ管理人から不特定多数の読者への情報伝達という活動領域もブログ製作者のイデオロギーの具現であるとなってしまうし、また、ブログという情報伝達媒体もブログ製作者のイデオロギーの具現であるとなってしまう。ブログ作成という活動領域もブログという情報伝達媒体もオント・イデオロギーの具現と言うより、インターネットの発達の過程で出てきたもので、テキスト生産者はイデオロギー具現のためにそれらを使用したに過ぎない。となればそれらを使用することでテキスト生産者のイデオロギーはそれらから制約を受けているはずである。即ち、イデオロギーへのフィードバックが存在しているはずである。

筆者の提案するLSモデルでは状況のコンテキストからイデオロギーへのフィードバックを想定するものである。

#### 4. ジャンルからのフィードバック

先にジャンルを交渉戦略と説明したが、Martin (1992: 495) はジャンルを「文化のコンテクスト」(context of culture) であると説明している。文化を様々な交渉戦略の集合体と捉えているわけである。ではイデオロギーとの違いは何なのか。違いは権力志向であるか否かのうように見受けられる。因みに Halliday & Hasan (1985: 46-47) では文化のコンテクストをテキストの解釈を可能ならしめる一切の文化的要因を含むものであると説明しており、権力志向という狭い解釈はなされていない。もしマーティンの言う文化のコンテクストが権力志向以外の社会的交渉も含むものであるとするのなら、ジャンルはイデオロギーの具現であるとは言えない。むしろ、ジャンルがイデオロギーを包含すると考えるほうが妥当であるように思える。そして、もしこのような包含関係が存在するのなら、ジャンルはイデオロギーに対して制限要素として働いている可能性が出てくる。つまり、イデオロギーが文化的制約を受けている可能性があるということである。以下、社説分析を通じて文化からのイデオロギーへの制約（あるいはフィードバック）の存在を示唆する。

#### 5. テキスト分析

##### 先行研究

イデオロギーとの関連で文化的制約（あるいは文化的共通性）の解明を社説分析で行っているものに南里の一連の研究がある。南里 (2001) は朝日新聞の社説を分析した結果、次のような修辞構造がよく用いられていることを指摘している。即ち、文章頭である（「一般」との対比での）「特殊な」出来事が発生したことを告げ、これが政治的問題を引き起こしているとした後、文章末において、文章頭で導入された政治問題を生み出したシステム（例えば政治システムや法体系）全体の批判を行い、そのシステムを矯正する、または、システム全体で取り組むことが問題解決につながると論じる修辞構造である。（この修辞構造を「特殊 - システム構造」と呼ぼう。）更に南里 (2001) は、ユング心理学を援用し、特殊 - システム構造が日本社会の根底に流れる母性原理の影響を受けたものであらうと示唆している。

この調査結果を受けて Nanri (2004, 2005) は西暦 2000 年に起きた 911 アメリカ同時多発テロを日本の新聞 18 紙がその社説でどのように論じているかを調査し、朝日を代表とする反政府（あるいは反自民）・反米的新聞に特殊 - システム構造が一樣に用いられていることを指摘している。更に、Nanri (2006) は三つの政局（2000 年の加藤政局、2004 年の年金国会、2005 年郵政民営化政局）に関する朝日論説委員の記事を調査し、数は減ってきてはいるが、特殊 - システム構造が半数以上の朝日の記事に用いられていると報告している。朝日のみならず三大ブロック紙（北海道新聞、中日新聞、西日本新聞）及び多くの地方紙も特殊 - システム構造を多用している事実。これをどう見るか。文化的な要因がイデオロギーの表出に介入していると考えられないだろうか。

以下、朝日新聞の社説、それに、親政府・親米的と言われている読売新聞の社説の分析も交えて、文化からイデオロギーへの制約、即ち、ジャンルからイデオロギーへのフィードバックの存在を示唆してみたい。

#### データ

データは、2000年11月に起こった加藤政局を論評した朝日と読売の社説5本ずつの計10本。加藤政局を社説のトピックとして選んだ理由は、この政局が当時「加藤の乱」としてメディアで取り上げられ、正にメディアを二分した出来事であったからである。朝日新聞は政局収束間際まで加藤紘一氏をヒーローに祭り上げ、これで永田町が改革されると論じたのに対して、読売は加藤氏をトラブルメーカーと見なし、政治混乱は国益を損ねるとの立場を貫いている。政府自民党を攻撃する朝日とそれを弁護する読売の対立はイデオロギー分析には理想的なデータだと言えるだろう。

#### 特殊 - システム構造：朝日の場合

まずは朝日新聞から調べてみる。既に述べたように、特殊 - システム構造は特殊な出来事の紹介から始まる。「もう後には戻れない」と題された朝日の社説（11月12付け）はこのような書き出しになっている。

##### テキスト1.（朝日 001112/15）<sup>6</sup>

P1： 自民党の加藤紘一氏が「森政権のままでは、わが国が壊れていく」と述べ、森首相の退陣を迫る姿勢を打ち出した。

加藤氏の倒閣発言と取れる言動が文章の出発地点となっている。続く第2段落では加藤氏の発言はもっともであるとの見解を示し、加藤発言が何をもたらすべきかの議論が続く。そしてこの社説が辿り着いた結論は下記のとおりである。

##### テキスト2.（朝日 001112/15）

P14： いずれにせよ、日本政治の今後を左右する本当の焦点は、「自民党内の政局ではなく、自民党を超えた政局になるかどうか」である。

P15： 加藤氏は「森内閣の問題ではなく、この国の政治をどうするのか。この国の将来が問われている」と言った。本気でそう考えるなら、探るべき道はおのずから定まる。

自民党内の問題にしてはならない、既存の政治体制全体を変えねばならないと議論は発展する。一政治家の言動が政治体制全体の再編へと話が拡大している。朝日は4日後また加藤政局を取り上げ、社説をこう始めている。

##### テキスト3.（朝日 001116/17）

P1： 加藤紘一氏の倒閣宣言で始まった自民党内の抗争が激化してきた。

第2段落では加藤倒閣宣言の波紋が広がり与党内でも動揺が見られるとし

たあと、テキスト2で言及されている自民党を超えた政局と言うテーマが現われてくる(第6段落)。その直後話は「日本の民主主義」のレベルまで登り、政界再編をせよと加藤氏に要望することになる(第14段落)。

テキスト4.(朝日 001116/17)

P6: 重要なのは、今回の政局を単なる自民党内の権力争いという、小さな姿で終わらせてはならないということである。

P7: 真に問われているものは、森氏という一政治家の去就を超えたところにある。それは、日本の民主主義の「品質」そのものにほかならない。

P14: ...大がかりな政界再編も展望する鮮明な「旗」を掲げることが必要ではないか。

特殊な政治問題を大きなシステムのレベルまで上昇させ、そこから解決策を探るという修辞構造は他の三つの朝日社説にも用いられている。「政治を変える絶好機だ」と題された11月18日の社説は、加藤氏が起こした当時の森首相退陣要求運動が、森内閣に対する不信任案決議の問題に発展したことを文章頭で述べ、不信任案が可決されることが「存在意義さえ疑われ始めた政党政治」(政治システム全体)の問題として捉えられ(第6段落)、続く第7段落では「政治そのもの」の問題であるとされ、第12段落では「政党政治の危機」となり、最後の第18段落は社説をこう締めくくっている。

テキスト5.(朝日 001118/18)

P8: 残された時間は少ない。好機がいつまた訪れるとも限らない。政治の危機への感度が、重く問われている。この週末、一人ひとりの政治家に、よくよく考えてもらいたい。

どの政党の問題というのではなしに「政治の危機」であるという認識は特筆すべきである。

さて、加藤政局は結局は加藤氏の敗北に終わる。その敗北が確定した11月21日の朝日社説はこう始まる。

テキスト6.(朝日 001121/15)

P1: 森善郎内閣の不信任決議案は、倒閣を目指して賛成の構えだった自民党非主流派の加藤、山崎両派が採決直前、欠席戦術に転換したため、否決される見通しとなった。

同社説はまずは意外な展開だったとコメントし(第2段落)、政治転換を期待していた国民への裏切り行為だと断じ(第7段落)、テキスト5にあるように「政治」全体への批判を繰り返す。そして最終段落直前でこう述べている。

テキスト7.(朝日 001121/15)

P14: 経済の高度成長が終わり、自民党の利益の分配にあずかってきた保守層の間でさえ、意識化が進む。古い殻を脱皮できず、変化への感受性を鈍らせてきた自民党は、二十一世紀の最後の年、いよいよ解体への過程を突き進むのではないか—。

P15: そう思わせた政治ドラマはしかし、唐突に断ち切られた。

高度成長期が終わったというマクロな経済学的視野から自民党の行動を総括して、社説は第 15 段落の短い結びへとつなげている。

最後の社説「それでも民意は動いた」(11 月 22 日付け)は加藤氏が自分のホームページに掲げたメッセージを出だしとする。

テキスト 8. (朝日 001122/18)

P1: 「改革は政治家だけでできるものではありません。国民である皆さん自身が改革の必要性を自覚したとき、初めて世の中は変わっていきます」

一政治家の言動に始まるこの社説は、加藤政局失敗の理由は「永田町の論理」にあるとし(第 8 段落)、いずれは国民の怒りを買うと断言し(第 16 段落)、その根拠として有権者が健全な意識をもっているからだと述べ(第 17 段落)、最後にこう締めくくっている。

テキスト 9. (朝日 001122/18)

P18: 民意は確かに動いたのだ。あとはお互い、志を持続することを心がければいい。

全ては「民意」とう不特定多数の有権者の集団(ある意味大きな政治システム)に委ねられるという形を取っている。

特殊 - システム構造: 読売の場合

さて、これに相對する読売はどう書いているかを見てみよう。11 月 12 日付の「国政を混乱させてはならない」と題された社説は、まず一般的なコメントを出した後、そのコメントの対象がどのような出来事であるのかの説明へと移り書き出しとする。

テキスト 10. (読売 001112/21)

P1: 政局がにわかに流動化の兆しを見せ始めた。

P2: 自民党の加藤紘一元幹事長が森首相の退陣を求め、野党の内閣不信任案採決の際に欠席もありうるとの考えを表明したからだ。

加藤氏の首相退陣要求に始まるこの社説は一貫して加藤氏の行動を非難する。なぜか。それは「政治空白」を作るからであり(第 12 段落)、「自律的回復に向かいつつある景気動向に冷や水を浴びせ、取り返しのつかぬ事態を招きかねない」からである(第 14 段落)。それぞれ政治システム全体、経済

体制全体に悪影響を及ぼすからと言う理由で加藤氏批判が繰り広げられている。そして締めくくりはこうなっている。キーワードは「国政」。

テキスト 11. (読売 001112/21)

P21: 今後、どう展開するにせよ、国政の混乱を招くことがあってはならない。

朝日と同じく次に加藤政局が取り上げられるのが4日後の11月16日。「政治再生へ建設的な政策論議を」と題された社説がそれである。出だしはこうなっている。

テキスト 12. (読売 001116/17)

P1: 政局の混迷が深まってきた。

P2: 自民党の加藤紘一元幹事長が口火を切った森首相の退陣を求める声が、首相を支えるはずの主流派の一部や与党の公明党からも浮上してきたからだ。

加藤氏の行為は与党内部に動揺をもたらしたと述べているこの社説も、先の読売社説同様、加藤批判に終始している。どうして非難されるべきなのか。それは「日本が置かれている状況」というレベルから判断するとそうなる。この社説は主張している。下記に文章末の三段落を紹介する。

テキスト 13. (読売 001116/17)

P15: 政局の混迷は、株価などの市場にも影響を及ぼしている。会期が残り少なくなった国会では、補正予算案や少年法改正案など重要な案件を処理しなければならない。

P16: 日本の置かれている状況を考えれば、長期の政治空白が許される状況にはない。

P17: 与党は主流、非主流を問わず、政治の混迷回避に全力を挙げるべきだ。

既存の政治システムに支障をきたすという理由で加藤氏のとった行動は非難すべきものであると述べている。残りの3本の読売社説の文頭、文末の段落を下記に紹介する。

テキスト 13. (読売 001118/20)

P1: 政局が抜き差しならない局面に入ってきた。自民党の加藤紘一元幹事長は、野党の内閣不信任決議案への「賛成」を明言し、「勝算はある」と言い切っている。

P20: 内外の課題が山積している時、国政の停滞をもたらすような政治の混迷や空白を避けなければならない。この点は改めて強く求めておきたい。

テキスト 14. (読売 001121/17)

P1: 野党提出の内閣不信任決議案は二十日夜、衆院本会議に上程されたが、反対討論をしていた保守党議員が野党席にコップの水をかけたため議場が混乱、採決は二十一日に持ち越された。

P20: 党内対立の後遺症は残るかもしれない。だが、単なる党内抗争ではなく、政治再生への貴重な契機としてもらいたい。

テキスト 15. (読売 001123/15)

P1: 補正予算が成立し、政局の焦点は内閣改造に移りつつある。

P20: ここは、迅速果敢な政策遂行と政党政治の再建を担う強力な政治体制を一刻も早く構築するべきだ。

いずれも特殊な出来事に始まり、その出来事が起こっている大きなシステム(「国政」「政治(再生)」「政治体制」)のレベルでの対策が必要であると主張している。

以上見てきてわかることは、イデオロギー的立場が異なっている朝日と読売だが、問題の捉え方は同一である。関係する大きなシステムがどうなってしまうのか、あるいは、そのシステムをどうしたらいいのかという視点で政論が披露されているのである。つまり、特殊—システム構造がイデオロギー表出の共通の資源として用いられているのである。南里(2001)の示唆に従えば、朝日も読売も日本社会の根底を流れる母性原理で政治を論じていると結論付けられる。LSモデルに立ち返れば、ジャンルからイデオロギーに制約という形でフィードバックが存在しているということになる。

## 6. モデル提示

ここまでをまとめる。まず、イデオロギーはオント・イデオロギーに限定すべきであり、ファイロ・イデオロギーは排除すべきである。理由は決定論を回避するためである。次に、状況のコンテキストからイデオロギーに対してフィードバックが存在する。最後に、ジャンルとイデオロギーの関係だが、この両者は別の二レベルとするより、ジャンルにイデオロギーが埋め込まれ、ジャンルから絶えず制約を受けていると解釈するのが妥当のように思われる。図2を参照されたい。

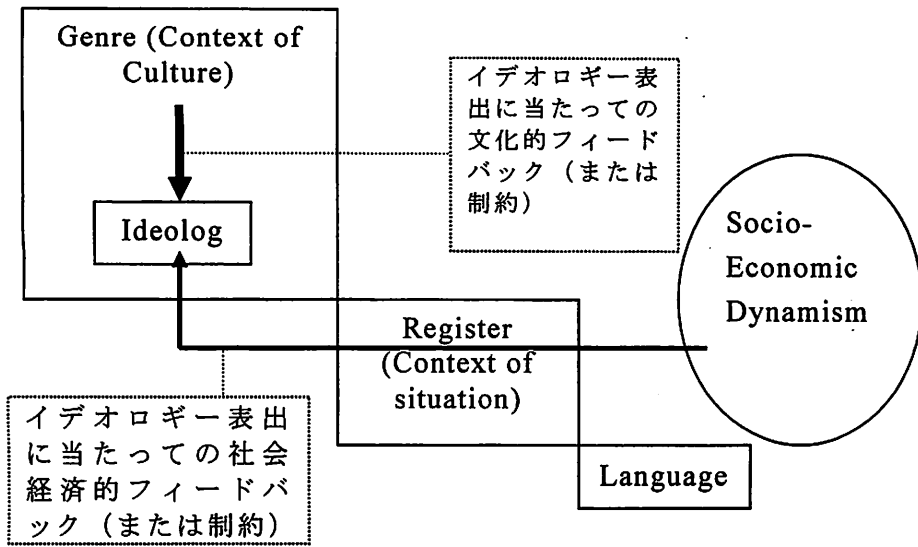


図 2. 筆者提案の LS モデル

## 7. 終わりに

本稿で提示した LS モデルはまだ納得のいくものではない。特にジャンルの解釈はそうである。これを文化のコンテキストと呼ぶのなら、交渉戦略だけの問題ではないからである。また、当初本稿で議論する予定にしていた思考モードの問題もある。マーティンの言うようにジャンルが *schematic structures* に関わるものであるとするなら、思考パターンとしてジャンルを捉えなおす必要が出てくる。Martin (1992: Chapter 4) で例をとるなら *conjunctive relations* と *schematic structures* の関係がどうなっているかの問題である。考えられる全てのテキストが *conjunctive relations* に分解できるのならそれらのテキスト即ち *schematic structures* は *conjunctive relations* という思考単位に分解可能であることになるからである。つまりあらゆる *schematic structures* は認知的思考パターンのユニットの結合体として認識され得るのである。しかし、この遠大な計画は本稿では着手できなかった。これはこれからの課題として取り組みたい。

## 註

<sup>1</sup> これは筆者の意識。原文はこうなっている。‘One of the dangers inherent in modelling subjectivity along these lines is that of locking subjects in and eliding agency, thereby effacing their potential for resistance and transformation’ (Martin 1997: 10).

<sup>2</sup> CDA におけるイデオロギーの定義は Trew (1979: 95)、Fairclough (1995: 12)、Bloor & Bloor (2007: 10) を参照のこと。

- <sup>3</sup> この図は Martin (1986: 227) で提示されたものをもとに作成したものである。
- <sup>4</sup> Martin (1992: 503) を参照のこと。
- <sup>5</sup> 「文章末において」という表現は、Nanri (2004, 2005) においては「文章の最後のほうの部分で」と修正されている。
- <sup>6</sup> スラッシュの前の数は記事が新聞に掲載された日付。スラッシュの後の数はその社説がいくつの形式段落で成り立っているかを示している。また、分析において用いられている「P」は段落 (paragraph) を意味し、例えば、P1 は第一形式段落を意味する。

## 参考文献

- Bloor, M. & Bloor, T. (2007) *The practice of critical discourse analysis: an introduction*. London: Hodder Arnold.
- Fairclough, N. (1995) *Media Discourse*. London, New York, Sydney & Auckland: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. & Hasan, R. (1985) *Language, context, and text: aspects of language in a social-semiotic perspective*. Victoria: Deakin University Press.
- Martin, J.R. (1985) *Factual writing: exploring and challenging social reality*. Victoria: Deakin University Press.
- Martin, J.R. (1986) 'Grammaticalising ecology: the politics of baby seals and kangaroos.' In Threadgold, T., Grosz, E.A., Kress, G., & Halliday, M.A.K. (Eds.) *Language semiotics ideology* (pp.225-267). The Sydney Association for Studies in Society and Culture.
- Martin, J.R. (1992) *English text: system and structure*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins.
- Martin, J.R. (1997) 'Analysing genre: functional parameters.' In Christie, F. & Martin, J.R. (Eds.) *Genre and institution: social processes in the working place and school* (pp.3-39). London and Washington: Cassell.
- Nanri, K. (1993) *An attempt to synthesize two systemic contextual theories through the investigation of the process of the evolution of the discourse semantic structure of the newspaper reporting article*. Ph.D. dissertation, University of Sydney.
- 南里敬三 (2001) 「テキストの中の母性」. 山口登 (編) 『機能言語学 JASFL occasional papers』 Volume 2 No.1, Autumn 2001: pp.129-143.
- Nanri, K. (2004) An anatomy of the homogeneity and innocuousness of Japanese editorials. In the Proceedings of the Asian Studies of Association of Australia Conference held in Canberra on June 28 to July 2, 2004. Retrieved November 23, 2004, from <http://coombs.anu.au/ASAA/conference/proceedings/asaa-2004-proceedings.html>.
- Nanri, K. (2005) The conundrum of Japanese editorials—polarized, diversified and homogeneous. *Japanese Studies*, Vol.25, Issue 2, 2005, pp.169-185.
- Nanri, K. (2006) *Asahi's fuhenfutō* principle. In the Proceedings of the Asian Studies of Association of Australia Conference held in Wollongong University on June 26 to 29, 2006. Retrieved March 29, 2008, from <http://coombs.anu.edu.au/SpecialProj/ASAA/biennial-conference/2006/proceedings.html>
- Trew, T. (1979) 'Theory and ideology at work.' In Fowler, R., Hodge, B., Kress, G., & Trew, T. (Eds.) *Language and control* (pp.94-116). London, Boston & Henley: Routledge & Kegan Paul.

「は」と「が」そのメタ機能からの再考：the Kyoto Grammar の枠組みで

**Reanalysis of “Wa” and “Ga” in the Metafunctional View:**

**From the Kyoto Grammar Approach**

龍城 正明

**Masa-aki Tatsuki**

同志社大学

**Doshisha University**

**Abstract**

A good number of analyses of Japanese particles “Wa” and “Ga” have been investigated so far both in the framework of Japanese linguistics (Kokugogaku) and general linguistics. These analyses, however, cannot satisfy many native speakers’ intuition or many examples of Japanese texts. It seems to me that the main problem is the treatments of “Wa” and “Ga” as if having the different functions: the former as the indicator of theme and the latter as the indicator of subject. This treatment seems not to be appropriate to solve the Japanese text analysis. It might be possible then to reconsider that “Wa” and “Ga” are respectively treated in the textual (theme) and the interpersonal metafunction (subject) in the framework of SFL. It is well known that in SFL, one element should be simultaneously realized in three meanings of metafunction. This being so, the above two particles should be treated in three metafunctions simultaneously, and not to be treated only from the specific metafunction, i.e., either from the textual or from the interpersonal only.

Accordingly this paper will reconsider the functions of “Wa” and “Ga” from the metafunctional levels and propose to assign several parameters to “Wa” and “Ga” each, in order to realize three meanings of metafunctions, i.e., ideational (semantically), interpersonal (grammatically) and textual (thematically) meanings simultaneously. Viewed from this angle, “Wa” and “Ga” will be reanalysed in the framework of the Kyoto Grammar by making use of the actual editorials of Japanese newspaper.

## 1. はじめに

日本語の助詞「は」と「が」の機能については、国語学の観点からのみならず、現在までに言語学の様々な枠組みにより数多くの分析がなされてきた。しかしどの分析を見ても現代日本語のテキスト分析の観点から見ると、今ひとつ明確な分析結果が得られていない、と感じるのは筆者のみではなかろう。本論では国語学、言語学の先行研究を参考にし、そこでの問題点を明らかにしつつ、選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistics=SFL) の枠組み、とくに現代日本語分析のために構築されつつある the Kyoto Grammar の分析方法を用いて「は」と「が」の再考察を進めていくことにしたい。

本論での目的は、従来の「は」と「が」が2つの異なる機能をもつ助詞であるという見解や分析法を検証し、この2つの異なる機能が、それぞれの助詞に限った機能であるかどうかを検証する。さらに、この2つの助詞をメタ機能という観点から見た新たな分析法を提案することにしたい。

## 2. 言語学の枠組みにおける先行研究

近代日本語における「は」と「が」のパイオニア的分析といえば、三上章があげられるであろう。日本語を母語とする話者からは、この2つの助詞はともに主語であると解されることが多い中で、彼はその著『象は鼻が長い』(1960)で主題と主格という2つの機能を用いて、この2つの差違化を試みた。三上によると、『は』は主題であり、主語ではなく、『が』は主格であって主語でない」と分析することで、「日本語には主語はない」、と主張する。即ち、日本語に「主格の絶対的優位」を具現する現象はないと言うのである。さらに「は」を伴う要素は係助詞である性質から心理的(虚)作用が大きく関わり、結果としてピリオド超えが生じるとした。一方「が」は格助詞であることから、論理的(実)作用により、それを伴う要素には小さく関わるとした。さらに「は」に関して、「Xは」は「Xが」を兼務する機能があるとした。その反面、「は」の本務としては、文末にあるムード「ます」に関わり、文を「主題」と「題述」に二分する役割を担い、その結果、「は」は主題を表すとした。これにより、従来の二重主語と解されるような「象は鼻が長い」の類の文も「象は」が主題であり、「象が」が主格と解することが可能となり、このような例に見られる二重主語という解釈が避けられるようになったのは有名である。

次に久野暉はその著『日本語文法研究』(1973)で、「は」と「が」の機能をさらに詳しく分析し、概ね以下のように分析する。

- |     |          |            |
|-----|----------|------------|
| (1) | 1 「は」の機能 | 2 「が」の機能   |
|     | ① 主題を表す。 | ① 総記を表す。   |
|     | ② 対照を表す。 | ② 中立叙述を表す。 |
|     |          | ③ 目的格を表す。  |

ここでも注目すべきは、2つの助詞に主語としての機能を付与していない点である。

次に野田尚史は『「は」と「が」』(1996)で、「は」は格を表さない故に主題を表し、「が」は主題でないことを表す故に格を表す、としてこの2つを分類した。例えば「八木は」という主題を表す形をあえて使わないから「八木がホームランを打った。」という文として具現することになると言う。ここでも野田は2つの助詞に関し、主語という術語の概念をあえて使うことなく、主題と格という機能を付与することにより、この2つの分類を試みているのは、先例と同じくする分析として興味深い。

さらに大野晋はその著『日本語練習帳』(1999)で、「は」の機能を4項目に、また「が」の機能を2項目に列挙することにより、以下に示すように、「は」と「が」の異なる機能を分析しようとする。

- (2) 1 「は」の機能
- ① 題目提示  
問題 (topic) を設定して下にその答えがくることを予約する。
  - ② 対比
  - ③ 限度
  - ④ 再問題化 (=再審)

- 2 「が」の機能
- ① 名詞と名詞をくっつける = 接着剤機能
  - ② 現象文を作る

したがって、大野は『「は」』と『「が」』を主語、述語の形で扱ってもうまく分析できない。」とし、ここでも主語という概念を使用することに極めて否定的な見解をとる。

以上見てきた分析は現代の言語学的手法をとりいれた言語学的分析といえるものであるが、ここでいう言語学的とは日本語の特徴のみならず、世界の言語と比較対照して「は」と「が」を分析したらということであり、意味的観点からの格の概念や談話構造観点からの主題という概念が大きくその分析に関与していると思われる。そこで、日本語独自の分析法を模索してきた国語学の観点から、この

2つの助詞はどのように分析されているのかを以下に見ていくことにしたい。

### 3. 国語学の枠組みによる「は」と「が」の分析

国語学の枠組みでは、日本語の語彙は「詞」と「辞」という二つに大別される。時枝(1950:240)によると、詞とは「思想内容を概念的、客体的に表現したものであることよって、それは言語主体、即ち、話し手に対立する客体界を表現」するものであり、辞とは「専ら話し手それ自体、即ち言語主体の種々な立場を表現する」ものであるとする。時枝も言うごとく、この2つによって表現される思想内容そのものからみれば、そこで具現される意味内容は、客観的な事物と主観的な感情や意思であり、それぞれに対して差違を見いだすことはできないが、表現という観点からみれば根本的な相違があるとされる。言い換えれば、意味とそれによって具現される表現、という二つの側面に分類して考えているところが、興味ある分析と言えよう。この二つが一つの文を構成していることになり、詞と呼ばれる部分が客体的なものを具現し、辞と呼ばれる部分が主体的な部分を具現していることになる。要するに詞と辞の関係が客体的なもの、主体的なもの、統一されるものと統一するものという関係にある、と言うのである。ここでも辞と呼ばれるものが主体的であり、統一するものであるという点から、これによって話し手の内容が左右されると言っても過言ではあるまい。その点に関して、ここでいう辞に相当するものが、国語学では何を指してきたのかというと、「てにをは」のことであり、これらは国文法でいうところの助詞であることに他ならない。即ち、本論で問題とする「は」と「が」は辞に属するものであり、この辞は以下のように分類されてきた。

辞に属する助詞は文末助詞と文中助詞に分けられるが、「は」と「が」は文中助詞に属し、この文中助詞は、間接、係、副、格、接続、並立といった機能により分類される。その中で、「は」は係助詞、「が」は格助詞として分類されてきた。さらに、「既知と未知」、「とりたてと普通」という2つの型として分類され、それぞれの型の中で、前者が「は」を、後者が「が」の機能を持つとして分析されてきた。このように「は」と「が」は辞の中で、各々に異なる分類がなされ、その機能も区別されてきたのである。それでは国語学では「は」と「が」の機能をどのように分析してきたのか。これについては以下に見ていくことにしたい。

「は」の機能に関しては、山田孝雄は係り助詞として「陳述をなす用言に係属する語に付属して、その陳述に勢力を及ぼすもの」と言い、橋本進吉は『辞』に属し、断続のしるしなきもので、接続以外に続くもの。種々の語につく。接続関係重視。」とした。また松下大三郎は、「概定、不定、不自由なものとして題目を示すもの、即ち提題措定するもの。」とし、佐久間鼎は、「事実の判定、例えば『雪は白い。』といった場合の『雪というものは白いものだ。』という事実の判定を述

べる。」とした。

一方、「が」に関して言えば、山田は格助詞という機能に着目し、「語について下語への論理関係を示す、即ち格を示すもの。対象を約束して言い定める。接続以外で続き、体言のみにつくもの」とした。これに対して、松下は平説指定するものという観点から「未定、可変、自由」なものを具現することから、「は」の提題指定に対し、平説を具現するものとした。さらに佐久間は「雪が白い。」という文に見られるように、現前の事実として叙述して表現されたもので、現前の場合から遊離しきってない事柄を述べるのに用いられる。即ち、「は」は事実の判定を述べるのに対し、「が」は事実の叙述を述べるのに用いられるとした。

以上の分析から、著名な国語学者の分析には2つの助詞を「文法的機能」と「意味的・表現的機能」という異なる機能から分類したように見られるが、様々な日本語がもつ言語事象から判断すると、必ずしも先人の分析通りにうまく分類されるとは限らない。例えば「未知」の働きにしても目撃しないものを初出するときを使用するのは良いが、未知のものを承けるのは一部の範囲に限られるのではないかという疑問が残る。即ち、これには既知のものを承ける場合もあり、この例として考えられる、「今泣いたカラスが、もう笑った。」などは「泣いたカラス＝子供」は決して未知のものではない。さらに抽象事実の叙述では初出の場合も「は」が用いられることがある。

### (3) 桜は春に咲く。

太陽は東から出て西に沈む。

先述したように、時枝(1950:63,216～)によると、古く鎌倉時代から行われた分類法である、ことばを詞と辞という大きく二つに分けられた枠組みでは、助詞は辞に属することから、詞のような主体的表現で陳述の表現ではないことに着目されるべきある。したがって、辞である助詞は客体的な事柄に対する話し手の立場、言語主体の感情、情熱、意思、欲求などの表現であるとされる。そこで、時枝は係助詞と格助詞との差違は、話し手の意識がどのように異なるのか、という観点から、「観察者自身の心的経験として存在する。」とし、2つの助詞を以下のように分類した。

- (4) ① 係助詞としての「は」は限定を具現する助詞で、事柄の認定の仕方の表現に用いる。
- ② 格助詞としての「が」は格を具現する助詞で、関係を表す論理的な表現に用いる。

ここでも限定を具現する、即ち題目を示す機能と、格としての論理構造を示す

機能とをその分類の根拠としているのだが、これを一步推し進めた分析として、山田みどり(1984:206 ~7) の以下の分析を見てみよう。

(5) 1. 係助詞「は」とは

- ① 必ずしも文中には表れないものとの比較などに基づいて、文中に表れる詞を評価し、提出する。
- ② 承ける語のみを関係するわけではなく、承ける語を他と異なる特殊性を持ったものとして表現自体が提出していることを表す。

(事実の判定)

2. 格助詞「が」とは

- ① 文中に具現する詞と詞の関係を表現主体がどう受け止めているかを表す。
- ② その承ける語がどのような動作、行動をするか、どのような状態であるのかを表す (事実の叙述)

ここでの分類は格という論理構造に言及することなく、事実を「判定するのか」、あるいは「叙述するのか」という観点から分析したものであり、これは事実の意味内容に対する話し手の判断ということになる。言い換えれば、文法的機能としての主語や、論理構造としての格という観点から外れた視点で、助詞の「は」と「が」を捉えたものと言え、その点で先行研究とは異なる分析として興味深い分析と言える。そこで、以上の点もふまえ、次節では the Kyoto Grammar の枠組みで、「は」と「が」を見ていくことにしたい。

#### 4. The Kyoto Grammar から見た「は」と「が」

前節までで見たように、「は」と「が」という2つの助詞に関して、先行研究では2つの助詞のそれぞれに、異なった機能を付与しようとしてきた。この2つの異なる助詞、一方は係助詞であり、他方は格助詞としてその機能を区別されてきたのであるから、この分析法は当然といえば当然である。しかし、これではそれを含む節(文ではない)には単一の機能しか付与されないことになる。言い換えれば「は」で具現される節には主題のみが付与され、情報としては既知であり、一方「が」で具現される節には主格のみが付与され、情報としては未知であるということになる。この分析は、2つの助詞を差違化するには極めて有効な手段であるように見えるが、それでは「は」には格がなく、また未知情報は一切含まれないのか。という疑問が残る。同様に、「が」には主題が付与されることはなく、既知情報は含まれないのかという、単純な疑問が生じる。確かに『桃太郎』や『一寸法師』などのおとぎ話の談話構造を見ると、例えば『桃太郎』の出だしの部分

で、「昔むかし、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。」「おじいさんは山へ柴かりに、おばあさんは川へ洗濯に・・・。」というように、従来の「は」と「が」の分析によれば、この2つの差異を解決するには、この考え方は有効な手段といえる。しかし、日本語の記述文法からみれば、(3)で見たように、未知情報を扱っているにもかかわらず、「太陽は」と「は」で始まるものもあれば、「彼が」や「それが」のように代名詞と共起する「が」(代名詞であるから当然既知情報を扱っていることになる)も日常の談話ではその例に枚挙のいとまがない。また後述するが、新聞の社説などでは「は」で始まるもの、「が」で始まるものは、その数において「が」が少々上まわっているとは言えるものの、「は」で始まる例も多く見られる。さらに、主題と格という分類がなされるならば、文法的機能としての主語という概念はどのように扱うのが適切なのであろうか。かろうじて格が主語の機能を担うとするならば、主題を担う「は」で具現される要素には主語という概念が適用されないであろうか。勿論、「日本は桜が美しい。」や「太郎は頭が良い。」などという、いわゆる総主語文といわれる二つの助詞が混在する節では、どちらか一方が主語(この場合はともに「が」を伴う要素)という分析が可能であろう。しかし、「は」や「が」が単独で具現する節の場合はどうなるのか。この他にも「は」と「が」に関する扱いには様々な疑問が生じてくる。

周知のごとく、選択体系機能言語学(=SFL)では節が具現するには3つのメタ機能が同時に具現するというのがその根本理論である。これにより、メタ機能と呼ばれる観念構成的機能、対人的機能、テキスト形成的機能の3つの機能がそれぞれの要素に同時に具現されるというならば、先行研究で見てきたように、ある要素には主題のみが具現し、ある要素には格のみが具現するという分析は極めて不自然と言うことになる。「は」も「が」もそれと共に具現する要素は、それぞれが3つのメタ機能を具現していると考えるのがSFLに沿った自然な考え方であろう。このように考えると、「は」と「が」の先行分析で問題となった諸点の解決の糸口が見いだせそうである。以下では、「は」と「が」について、それぞれの3つのメタ機能からの分析を行うこととする。

#### 4. 1 観念構成的機能からみた「は」と「が」

観念構成的機能、特に経験的意味から見た場合は、「は」と「が」を伴った要素が具現される経験的意味とは、節全体を表す意味の中でその要素が担う意味化(semanticization)を考えると、その要素のもつ「射程の幅」によって決定されるということができる。即ち経験的意味をもつ参加者のテキスト全体に参与する射程により、その要素がもつ「低射程(narrow scope)」か「広射程(broad scope)」かが決定されることとなる。通常、無標の場合は、「が」が低射程で「は」が広射程を担うことになるが、テキスト全体の意味から節の一要素が担う射程の範囲は

常に一定しているとは限らない。しかし、この2つの助詞が担う要素をこのように経験的意味という観点から分析すると、当然ながら、この2つが「同じく」射程という経験的意味を具現している点は見逃すべきでない。

#### 4. 2 対人的機能から見た「は」と「が」

対人的機能とは話し手と聞き手の関係であるが、そこで具現されるムードは英語では主語(Subject)と定性(Finite)により決定され、モダリティーは定性と呼ばれる要素によって具現される。しかし日本語では主語の選択も含み、モダリティーは節末でモダリティー標識(The Kyoto Grammar による術語)によって具現される。従って、明確な意味で主語と定性という関係は具現され難い。そのことが通常、日本語には「主語はない」と言われる現象を引き起こしているようであるが、主語の選択は述語(predicator)を含む述部(predicative)によって決定されるので、その意味では主語が無いとは言えない。the Kyoto Grammar ではこのような隠れた主語を覆面主語(Veiled Subject)と呼んでいる。覆面とは、表面的にはそれが無いかの如く扱われるが、ある要素によってそれが恰も覆面を外して表れてくる如く具現する要素を言う。これについては以下の例を見てみたい。

- (6) a. そう、言いました。  
b. そう、仰いました。  
c. そう、申しあげました。

日本語には敬語表現の尊敬語彙、謙譲語彙、丁寧語彙、が存在する。(6)は「言う」という語彙の変化を見たものであるが、確かに(6a)の場合は、丁寧語という観点から1~3人称主語をとることは可能である。しかし、(6a)は「仰る」という尊敬語彙から主語は2人称か3人称であることが分かり、1人称ではありえない。また(6b)からは主語は1人称か3人称であることがわかり、2人称ではありえない。この場合、3人称かどうかの判断は前後のコンテキストから容易に判断されるが、ここでも当然 the Kyoto Grammar の概念である「伝達的ユニット(Communicative Unit=CU)」と呼ばれる節を超えた単位での分析が必要とされる。その結果、コンテキストによっては、日本語母語話者に限らず、そのテキストを解釈する誰もが主語の同定を間違えることはない。このことから「6(a-c)において、事実上主語は表面的には具現されていないが、それらは単なる覆面主語であり、決して主語が存在しないのではない。」と言うことができる。とすれば、日本語の主語の存在は、述語(predicator)によって、その存在が確定することができるということになる。その他、ジェンダーの違いにより、その発話の主語が男性か女性かも明確に理解できる。したがって、英語の翻訳でも日本語では常に、「彼」とか

「彼女」という代名詞を主語として頻繁に用いる必要はなく、ジェンダーによる文体を用いれば発話者の同定に関する問題は生じない。これらのことから対人的機能においても日本語には主語という概念は存在するものと言える。そうなれば、今問題となっている「は」と「が」に関しても、それぞれに、当然ながらこの二つをとともなう要素には「主語」という概念が存在することになる。言い換えれば、「は」と「が」には主語を表示する機能が存在することにもなる。

いずれにしても、通常の発話で「主語がない節」というのは意味内容を理解できないばかりか、発話者の特定もなされないということになり、これではコミュニケーションの成立をも否定しかねない。勿論、この場合、主語が表面的に具現するか否かを言うのではなく、覆面主語としての存在が明らかになるなら、それが表面上の主語としての具現か否かは問題ではなく、それが具現されるであろう対人的意味の必要性が問われることになる。節内容は話し手の心的状況によって選択されるのが普通であるから、対人的機能の観点からは、その節が具現するムードから見て「事実の判定」か「事実の叙述」かの選択がなされることになろう。その結果、無標では「は」が判定、「が」が叙述という機能を担っていると言えることができる。ここでも重要な点は、「は」と「が」の双方に対人的意味が具現されていることである。

#### 4. 3. テキスト機能から見た「は」と「が」

テキスト形成的機能から見た分析では、話し手のもつ情報・内容が自分（話し手）のみに関わっているのか、あるいは、その場にいる自分（話し手）を含む多くの第三者にも関わっているかにより、テキスト的意味の選択が成されると言えよう。話し手を含む多くの人たちがその話題に関与している場合は、復元可能情報であり、共有情報とすることができる。ハリデーによれば、主題とは“*What I am talking about*”と定義されるが、*the Kyoto Grammar*では日本語の「は」と「が」という二つの助詞それぞれに無標主題が付与されるとして、「は」も「が」も共に、主題を担うべき機能によって具現されるとする。ひとつはハリデー言うところの“*What I am talking about*”であり、これは、話し手のみが持つ、専有情報である。今一つは、話し手と聞き手がもつ共有情報としての主題、“*What we are talking about*”である。このように考えると、共有情報を担う要素が「は」で具現されることが多いのは、これが無標では復元可能＝既知情報を扱う為、“*What we are talking about*”であると解釈されるからである。一方、専有情報を担う要素は「が」で具現されることが多く、これは復元不可＝未知情報を扱うからである。その為結果として、焦点化が生じると見ることができ、これが、ハリデーの言う“*What I am talking about*”と解されることとなるのである。

以上のような観点から、日本語には「は」と「が」という2つの異なる主題が

具現されとする。言い換えれば、主題を担うのは「は」のみではなく、「が」も主題を担う機能があるとし、これが the Kyoto Grammar による分析である。「は」と「が」、それぞれに主題を担う機能があるとするのは、前述してきた他のメタ機能において、「は」、「が」それぞれにメタ機能の意味を付与するのと同じく、テキスト形成的機能でも「は」と「が」のそれぞれに、異なる主題としての具現があると考えからである。

以上をまとめると、3つのメタ機能という観点から「は」と「が」にはそれぞれに無標としての以下に述べるようなパラメーターを付与することができる

(7) ①「は」

観念構成的機能： 参与者 (広射程 broad scope = long distance)  
 対人的機能： 主語 (事実の判定、覆面化(veiled))  
 テキスト形成的機能： 主題 (復元可能 (recoverable),  
 共有情報 (shared information)  
 What we are talking about.

②「が」

観念構成的機能： 参与者 (狭射程 narrow scope = short distance)  
 対人的機能： 主語 (事実の叙述、覆面不化(unveiled))  
 テキスト形成的機能： 主題 (復元不可 (unrecoverable),  
 専有情報(exclusive information)  
 焦点化 (focused)  
 What I am talking about.

(7) で挙げた「は」と「が」に関する分類は、あくまでそれぞれの無標の具現形であることを前提にし、「は」と「が」それぞれを3つのメタ機能からの分析し、それぞれが持つ意味を付与したものである。ここでの重要な点は、従来の分析が、「は」は主題で、「が」が主格(主語)といった、二つの助詞に対して異なる基準で機能が付与されてきたのに対し、「それぞれに」メタ機能の観点から意味を付与している点である。したがって、格という術語は用いないまでも、参与者としての機能は「は」と「が」の共に付与されている。また主語や主題についても「は」と「が」のそれぞれについて、その機能をもっている点に留意すべきである。勿論2つの異なる助詞がある以上、それぞれの機能が異なるのは当然であるが、その異なる機能はメタ機能という3つの機能の中で、明確にその差違化が計られることになる。すると「は」については主題というテキスト形成的機能しかもたない、また「が」については主格という観念構成的機能しかもたない、という考え方は不適切と言うことになる。言い換えれば、それぞれの助詞に単独の機能しか

付与しないということではない。このように考えると、「は」も「が」もテキスト形成的機能からみれば、両方とも主題という機能をもつことになり、その中で、一方は共有情報であり、他方は専有情報であるということで差異化を明確にすることができる。したがって、「は」のみが主題を具現するのではなく、「が」も同じく主題を具現する機能を持ち合わせていると解釈するのが the Kyoto Grammar による分析である。このように分析する方が日本語の記述、テキスト分析には極めて好ましい分析であるといえる。

以上の分析をもとに、以下では実際のテキスト例に則して分析を試みることにする。

## 5. 新聞社説に見る「は」と「が」

上述の「は」と「が」に関する the Kyoto Grammar の分析が現代日本語の分析に適切かどうかを確かめるのに、本節では新聞の社説を例にとりて考察していくことにしたい。

ここでは、伝達的単位にもとづいて、社説を分析することとするが、特に問題となるのは「は」と「が」の初出の頻度であろう。すなわち、従来の理論的枠組みで、「は」がテーマを提示する機能があるとするなら、社説の始まりにはそのテーマの提示と共に、「は」で始まる節が具現するはずである。一方、「は」は既知情報であるから、社説の始まりには、新しい情報を承ける「が」が必要とされるはずである。もしそうなら、「は」で始まる節は極めて少ないと言わねばならない。現在までに行われた分析の多くは、ある単独の節を用いて、それに「は」が伴うか、「が」が伴うかで判断されてきた向きがある。しかし、言語の本質を見極めるには、複数節からなるある一つのテキストを用い、その中で、様々な言語事象がどのような形で具現するか、またそれがどのようなコンテキストで具現されたのかをテキスト全体の中で見極める必要がある。その意味で、テキストとしての社説の初出の節に具現する「は」と「が」の頻度を調べることは、それぞれの機能を見極めるのに意味があると思われる。

対象としたテキストは『読売新聞』2007年9月1日から30日までの一ヶ月間の社説である。読売新聞は毎日2編の社説を掲載するが、日によってはその内容の重要性により、1編の場合もあり得る。今回調査した社説では、総数が56編になった。その結果は以下の通りである。

(8) 初段 CU 第1節に具現した「は」	12回
初段 CU 第1節に具現した「が」	27回
初段 CU の「は」、「が」の具現なし	17回

初段 CU 第 2 節に「は」

4 回

初段 CU 第 2 節に「が」

13 回

(8) の結果を見る限り、初出の助詞は必ずしも主題を担う「は」である必要はない。反対に、初出であるからと言って、新情報を担う「が」である必要もないことが分かる。因みにここで言う初段とは、社説をいくつかの CU に分割し、その最初の CU を言い、そこで具現する節 (S,F を備えていない疑似節を含む) の中で具現した「は」と「が」の具現状況を今回の調査の対象とした。また「は」と「が」の具現がない例とは以下のような場合である。

(9) 学力低下判断の多かった「ゆとり教育」路線から、脱却できるのか。文部科学省が、今年度を目標に進めている学習指導要領の改訂作業では、まさにそこが問われよう。

(読売新聞 2007 年 9 月 2 日)

(9) の例では、CU 内で第 1 節には「は」も「が」も具現していないが、この場合は覆面主題としての「我々は」が考えられる。即ち、話し手は聞き手との共有情報として「我々は」、「ゆとり教育路線」とは何かを理解しているのは当然のことである、という観点から「我々は」を覆面主題と考えられる。第 2 節で「文部科学省が」となるが、これは「どこがどのような内容について考えているのか」は定かでないので共有情報とは言えない。したがって、ここでは専有情報としての「が」が具現する。このような話し手と聞き手が共有情報を担う CU の場合は、第 1 節の主題自体が覆面となることが多く、初段の「は」や「が」が具現しないことが多いと言える。しかし、この場合は (9) に見るように覆面主題であっても、それが「が」を伴った主題としては具現することはない。このように分析すると、たとえ、初段に「は」が具現しなかったとしても、そこに見えてくるのは「は」が付加された覆面主題ということになり、その結果、初段 CU での「は」の具現頻度はさらに高くなると言えることができる。

「は」と「が」の初出に関して言えば、次の例に見られるように、CU の第 1 節から具現する例が多く、「は」と「が」の優先権なるものは存在しないことになる。

(10) 自民党総裁選は、下馬評通り福田康夫・元官房長官が大勝した。福田赳夫元首相の長男として、初の親子 2 代の総裁の誕生である。

ここでは「自民党総裁選は」という現在の話し手と聞き手にとっては共有情報

として話題性の高い情報であるので、「自民党総裁選は」と「は」が具現する。さらに「福田康夫が」と話し手の専有情報による主語の提示があり、それに続く第2節には主語がないように思える。しかし、これは第1節からの続きとして、「福田康夫は」と覆面主題として捉えることができる。次に「が」で始まるCUを見てみよう。

(11) 電機業界や家電量販店で再編の動きが加速してきた。シャープとパイオニア、ビックカメラとベスト電器がそれぞれ、資本・業務提携することで合意した。

ここでの「動きが」は共有情報として認識できるだろうか。再編の動きには「政党の再編」もあるし、ここでいう「電機業界や家電量販店の再編」もある。したがって、ここでは前段のCUで電機業界等の再編にふれられてない限り、「は」を伴った「再編の動き」はないであろう。さらに、その具体的な会社名が共有情報として知られているはずはないとの認識で、第2節の「ビックカメラとベスト電器が」のように、再度「が」が具現することになる。

ここでの留意点は、あるCUにおいて、「は」のみが主題を提示する機能を持つというのではなく、「は」も「が」も共にそのCUのコンテキストから判断された上で主題としての機能を担っているという点である。さもないと、(10)の「自民党総裁選は」は「は」を伴っているので主題であるとするなら、「は」を伴わない(11)には主題が具現しないことになってしまう。言い換えれば、英語の主題分析に用いられる、話題主題(topical theme)という要素が問題となってくるわけで、単に節頭にある要素が主題であるとは言い難い。即ち、(11)では「電機業界や家電量販的で」が状況を表すtextual themeとなるという分析は可能であろうが、主題域の中で大切なのは話題主題であって、それ以外の主題はあくまでも主題域の中で考えられるものである。すると、ここでの話題主題としては当然「再編の動きが」となるわけで、この「が」を伴う要素も主題として分析しなければSFLの理論に適合しないことになってしまう。

以上の点から、英語の主題がその位置関係(節頭)の具現と主題域の中の参与要素を担うとされる話題主題をその主要主題とすることから考察すると、日本語の場合は、「は」も「が」もそれと共に具現する要素は、当然ながら話題主題としての機能を担うこととなる。したがって、この2つが対等に主題となる候補者に成りうるということになる。この分析により、テキスト内で「は」を伴って具現する要素が初出したとしても、またそれが「が」を伴う要素であっても、それぞれに主題という機能を付与することができる。またこれにより、あるCUでは主題が存在するが、あるCUには主題が存在しないという不都合な分析を避けることもできる。これはとりもなおさず、対人的機能から見た分析では、あるCUに

は主語があり、ある CU には主語がないと言う混乱した分析を避けることにもつながるのである。そもそも主語がない節など意味上から考えても極めて奇異な構造であり、その内容を意味化するのは不可能なことと言わざるを得ない。したがって、以上のような分析をすれば、CU 内のどの節（疑似説を含む）にも対人的機能から見た主語、テキスト形式的機能から見た主題が存在すると分析することができる。勿論、これらが経験的機能からみれば、参与者としての行為者たる機能を担っているのは言うまでもない。

## 6. おわりに

本論では日本語における「は」と「が」の扱いについて、the Kyoto Grammar の枠組みによる新しい分析を試みた。従来の「は」と「が」の分析が行ってきたように、それぞれに対し、「主題」と「主格」という異なる機能を付与するのではなく、「は」と「が」双方に「主題」、「格」、「主語」という SFL でいう 3 つのメタ機能の解釈を取り入れる。こうすることで、「は」も「が」もともに「主題」であり、「主語」であるという分析の提案をした。そうすることで、「は」から始まる CU も「が」から始まる CU も共に主題をもっていることになり、さらに「は」も「が」もない CU に関しては覆面主題が存在するとして、そこでは「は」が付与された覆面主題の存在を提案した。これによって、日本語には主語や主題がないと言う、言語分析としては極めて不適切な分析は避けられることになる。

SFL のメタ機能という概念を日本語記述文法である the Kyoto Grammar に応用し、「は」と「が」の機能は 2 つの異なるものではなく、それぞれが 3 つのメタ機能の意味を保持しながら、その中で異なる機能を有すると分析することの利点は、主題という概念が話し手にとっては極めて重要な概念であり、それ故、どの CU にも存在しなくてはならないという基本的解釈に沿った分析が可能となることである。従来の「は」と「が」に主題と格という異なる機能を付与してきた分析ゆえに、日本語のテキスト分析では様々な混乱が生じてきたと言えよう。「は」と「が」の双方にテキスト形式的機能から見た「主題」という機能を付与すれば、これらの問題は解決できると考える。大切な点は、「は」と「が」が情報構造の観点から「共有＝既知」、「専有＝未知」という異なる機能があるとしても、メタ機能としてのテキスト形式的機能からは 2 つとも同じ「主題」として扱うという点である。また、同様に「は」も「が」も対人的機能からは「主語」であり、観念構成的機能からは「行動者」であるという点である。このようにメタ機能という概念のもとで、(7) で見たように「は」と「が」を 3 つの機能に分析し、さらにそれぞれのメタ機能の下で下位分類として「は」と「が」がもつ異なる機能を分析するという手法をとることにより、より明確な分析が可能となった。これによ

り日本語がもつ「は」と「が」の差異化を問題なく分析することができると思う。

要するに、今回の提案では SFL におけるメタ機能という概念を用いることにより、いかなる要素にも 3 つの機能が同時的に具現されるという解釈を援用し、日本語における「は」と「が」によって具現される要素に対し、3 つのメタ機能からの分析を試みた。これによって、「は」と「が」が 2 つの異なる要素としてではなく、それぞれに 3 つのメタ機能が付与されるとし、「行為者という格」、「主語」「主題」がそれぞれに具現されていると分析することが重要なのである。

SFL という言語理論の枠組みを日本語の記述文法としての the Kyoto Grammar に援用し、「は」と「が」という 2 つの助詞についての分析を試みた。本論が日本語を勉強する外国人の方々や、よりよく日本語を理解したいと思っている日本語の母語話者の方々のお役に立つことを願ってやまない。勿論言うまでもないが、SFL 理論を用いた日本語分析を行っている研究者の方々にとって日本語記述モデルとして参考にしていただければ、筆者としては望外の喜びである。

#### 参 考 文 献

- 大野 晋 (1999) 『日本語練習帳』 東京：岩波書店  
久野 暉 (1973) 『日本文法研究』 東京：大修館書店  
佐久間 鼎 (1940) 『現代日本語法の研究』 東京：厚生閣  
時枝 誠紀 (1950) 『日本語文法 口語編』 東京：岩波書店  
根来 司 (1979) 『てにをは研究史』 東京：明治書院  
野田 尚史 (1996) 『「は」と「が」』 東京：ひつじ書房  
橋本 進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』 東京：岩波書店  
松下大三郎 (1928) 『改撰標準日本文法 (復刊)』 東京：勉誠社  
三上 章 (1960) 『象は鼻が長い』 東京：くろしお出版  
山田 孝雄 (1969) 『日本文法論 (復刻版)』 東京：宝文館出版  
山田 みどり (1984) 「助詞の諸問題」『研究資料日本語文法：助詞』 東京：明治書院

# **JASFL**

## ***Occasional Papers***

Volume 1 Number 1 Autumn 1998

### **Articles (論文)**

- Thematic Development in *Norwei no Mori*: Arguing the Need to Account for Co-referential Ellipsis.....5**  
ELIZABETH THOMSON
- Synergy on the Page: Exploring *intersemiotic complementarity* in Page-based Multimodal Text.....25**  
TERRY ROYCE
- Intonation in English - Workshop .....51**  
WENDY BOWCHER
- 日本語の「主語」に関する一考察.....69**  
On the Definition of "Subject" in Japanese  
塚田浩恭 HIROYASU TSUKADA
- イデオロギー仮説の落とし穴.....79**  
Theoretical Pitfall in the Ideology Hypothesis  
南里敬三 KEIZO NANRI
- 談話の展開における「観念構成的結束性」と書記テキストの分類.....91**  
'Ideational Cohesion' in Discourse Development and in the Classification of Written Text  
佐藤勝之 KATSUYUKI SATO
- 英語における節の主題：選択体系機能理論におけるメタ機能の視点からの再検討.....103**  
Theme of a Clause in English: A Reconsideration from the Metafunctional Perspective  
in Systemic Functional Theory  
山口 登 NOBORU YAMAGUCHI

# **JASFL**

## ***Occasional Papers***

Volume 2 Number 1 Autumn 2001

### **Articles (論文)**

<b>Linguistic Analysis and Literary Interpretation</b> .....	5
RICHARD BLIGHT	
<b>A Note on the Interpersonal-Nuance Carriers in Japanese</b> .....	17
KEN-ICHI KADOOKA	
<b>Schematic Structure and the Selection of Themes</b> .....	29
HARUKI TAKEUCHI	
<b>Theme, T-units and Method of Development: An Examination of the News Story in Japanese</b> .....	39
ELIZABETH ANNE THOMSON	
<b>セミオティックベースとそれを利用したテキスト処理について</b> .....	63
The Semiotic Base as a Resource in Text Processing Systems 伊藤紀子、小林一郎、菅野道夫 NORIKO ITO, ICHIRO KOBAYASHI AND MICHIO SUGENO	
<b>選択体系機能文法の英語教育への応用：節、過程中核部、主題の分析による作文の評価</b> .....	73
Applying Systemic Functional Grammar to English Education: Evaluating the Writing of EFL Students Base on the Analysis of Clause, Process and Theme 佐々木真 MAKOTO SASAKI	
<b>日本語の対人的機能と「伝達的ユニット」—The Kyoto Grammarによる分析試論—</b> .....	99
The Interpersonal Function and the Communicative Unit for Japanese: From the Approach of "The Kyoto Grammar" 船本弘史 HIROSHI FUNAMOTO	
<b>日英翻訳における Theme に関する課題</b> .....	115
Thematic Challenges in Translation between Japanese and English 長沼美香子 MIKAKO NAGANUMA	
<b>テキストの中の母性</b> .....	129
Maternity in Text 南里敬三 KEIZO NANRI	

# **JASFL**

## ***Occasional Papers***

Volume 3 Number 1 Autumn 2004

### **Articles (論文)**

- Lexicogrammatical Resources in Spoken and Written Texts** ..... 5  
CHIE HAYAKAWA
- On the Multi-Layer Structure of Metafunctions** ..... 43  
KEN-ICHI KADOOKA
- An Attempt to Elucidate Textual Organization in Japanese** ..... 63  
KEIZO NANRI
- A Comparative Analysis of Various Features Found in Newspaper Editorials and Scientific Papers, Including 'Identifying Clauses'** ..... 81  
MAKOTO OSHIMA AND KYOKO IMAMURA
- Constructions of Figures** ..... 93  
KATSUYUKI SATO
- Technocratic Discourse: Deploying Lexicogrammatical Resources for Technical Knowledge as Political Strategies** ..... 105  
KINUKO SUTO
- Application of Syntactic and Logico-semantic Relationships between Clauses to the Analysis of a Multimodal Text** ..... 157  
HARUKI TAKEUCHI
- An Analysis of Narrative: its Generic Structure and Lexicogrammatical Resources** .... 173  
MASAMICHI WASHITAKE
- 選択体系機能言語学に基づく日本語テキスト理解システムの実装** ..... 189  
Implementation of a Japanese Text Understanding System Based on Systemic Functional Linguistics  
伊藤紀子、杉本徹、菅野道夫  
NORIKO ITO, TORU SUGIMOTO AND MICHIO SUGENO
- タスク解決に関する対話における修辞構造を用いたステージの規定** ..... 207  
The Definition of Stages Using Rhetorical Structure in Dialogue on Task Solutions  
高橋祐介、小林一郎、菅野道夫  
YUSUKE TAKAHASHI, ICHIRO KOBAYASHI AND MICHIO SUGENO
- 外国為替記事のドメインのモデル化—機能的分析** ..... 225  
The Domain Modelling of Foreign Exchange Reports: a Functional Analysis  
照屋一博 KAZUHIRO TERUYA

*Japanese Journal  
of  
Systemic Functional Linguistics*

機能言語学研究

Vol. 4

April 2007

---

Articles

- 文法的メタファー事始め ..... 1  
The Grammatical Metaphor As I See It  
安井 稔  
Minoru Yasui
- A Systemic Approach to the Typology of Copulative Construction .....21  
Ken-Ichi Kadooka
- Text structure of written administrative Directives in the Japanese  
and Australian workplaces .....41  
Yumiko Mizusawa
- A case study of early language development:  
Halliday's model (1975) of primitive functions in infants' protolanguage .....53  
Noriko Kimura
- 日本語ヘルプテキストへの修辞構造分析と対話型ユーザ支援システムへの応用  
An Analysis of Rhetorical Structure of Japanese Instructional Texts and its Application to  
Dialogue-based Question Answering Systems .....83  
伊藤紀子、杉本徹、岩下志乃、小林一郎、菅野道夫  
Noriko Ito, Toru Sugimoto, Shino Iwashita, Ichiro Kobayashi, Michio Sugeno

Japan Association of Systemic Functional Linguistics

# PROCEEDINGS OF JASFL

Vol.1 October 2007

---

## Articles

日本語テキストにおける過程構成の統計的分析 藤田 透	1
『羅生門』の研究 ―物質過程を中心に― 鷺嶽正道	9
日中・中日翻訳におけるテキスト形成的機能： 「出発点」の特徴に関する対応分析 鄧 敏君	19
日本語テキストにおける Theme の有標性への視点 長沼美香子	31
サイコセラピーにおけるクライアントの洞察と談話の結束性との連関 加藤 澄、エアハード・マッケンターラー	45
米国の煙草の広告の Reading Path 奈倉 俊江	59
アスペクト表現における対人的機能の考察 船本弘史	65
「日本語を母国語とする幼児における Primitive functions (Halliday 1975) の出現と使用に関するケーススタディ」 木村紀子	75
日本の英語教科書にみられるジャンル 早川 知江	89
The Role of Genre in Language Teaching: The Case of EAP and ESP Virginia M. Peng	105
Texts, Systemics and Education An Expansion of a Symposium Contribution to the 2006 JASFL Conference David Dykes	115

Japan Association of Systemic Functional Linguistics

# **Notes for contributors to *Proceedings of JASFL***

- Preparation of Manuscripts:

1. Lay-out: All pages must be typed with Microsoft WORD (Times New Roman, 11 point ) on B4-sized paper, 66 letters per line, 30 lines per page, with margins of 25 mm or 1 inch on every side.
2. Abstract: An abstract of 100-200 words should be included in the beginning of the text.

- Format for References in the Text: All references to or quotations from books, monographs, articles, and other sources should be identified clearly at an appropriate point in the main text, as follows:

1. Direct quotation: All direct quotations should be enclosed in the single quotations. If they extend more than four lines, they should be separated from the body and properly indented.
2. Reference to the author and authors:
  - a. When the author's name is in the text, only the year of publication and the page should be enclosed within the parentheses, e.g. 'As Halliday (1994: 17) has observed . . . '
  - b. When the reference is in a more general sense, the year of publication alone can be given, e.g. 'Hasan (1993) argues that . . . '
  - c. When the author's name is not in the text, both the author's name and year of publication should be within the parentheses separated by a comma, e.g. (Matthiessen, 1992)
  - d. When the reference has dual authorship, the two names should be given, e.g. (Birrell and Cole, 1987)
  - e. When the reference has three or more, the first author's name should be given and the rest should be given as 'et al.', e.g. (Smith et al., 1986)
  - f. If there is more than one reference to the same author and year, they should be distinguished by use of the letters 'a', 'b', etc. attached to the year of publication, e.g. (Martin, 1985a).
  - g. If there is a series of references, all of them should be enclosed within a single pair of parentheses, separated by semicolons, e.g. (Maguire, 1984; Rowe, 1987; Thompson, 1988).
3. If the same source is referred to or quoted from subsequently, the citations should be done as the first citation. Other forms such as 'idid.', 'op.cit.', or 'loc.cit.' should not be used.

- Reference List: The Reference List should includes all entries cited in the text, or any other items used to prepare the manuscript, arranged alphabetically by the author's surname and the year of publication. This List should be given in a separate, headed, reference

section.

・ Notes: Notes should be avoided. If they are necessary, they must be brief and should appear at the end of the text and before the Reference List.

・ Figures, tables, maps, and diagrams: These items must be presented on separate sheets of paper at the end of the article, and should carry short descriptive titles. Their position within the text should be clearly indicated. They must be precisely and boldly drawn to ensure scanning or photographic reproduction.

## 投稿規定

- ・ 原稿はすべてワープロ (Microsoft WORD) でB 5 版用紙にタイプする。余白は上下左右各 2 5 ミリをとり、1 ページに 3 0 行で、1 行あたり全角 3 3 字／半角 6 6 字とする。日本語で書く場合のフォントはMS 明朝、英語で書く場合は Times New Roman で、いずれも 1 1 ポイントの文字サイズを用いる。
- ・ 要旨：論文要旨 4 0 0 字ー 8 0 0 字でまとめ、添付する。
- ・ 参照したすべての文献（著書、モノグラフ、論文他）は本文中の適切な場所で明示すること。その方法は以下を参照すること。
  1. 直接引用：原文をそのまま引用する場合は必ず「」内に入れる。引用文が 4 行を超えるときは本文の中に挿入せず、全文をインデントして本文から切り離す。
  2. 著者への参照方法：
    - a. 著者名が本文に記されている場合は、その直後に出版年とページのみを（ ）に入れて示す。例「ハリデー（1994：17）が述べているように・・・・」
    - b. 特定の個所ではなくより一般的に参照する場合は、著者名の直後に出版年のみを（ ）に入れて示す。例「ハサン（1993）は次のように述べている。すなわち・・・」
    - c. 著者名が本文中に記述されない場合は、著者名も（ ）に入れる。例（マーテン、1992）。」
    - d. 著者が 2 名の場合は二人の姓を入れる。例（バーレルとコウル、1987）
    - e. 著者が 3 名以上の場合は筆頭著者名のみを出し、ほかは「他」として全著者名は出さない。（スミス他、1986）
    - f. 同じ著者の同じ年の出版物を 2 冊以上参考文献として使う場合は、それぞれの著作の出版年に 'a', 'b' 等の文字を付記して区別する。例（マーティン、1985a）
    - g. 同一個所に複数の参考文献を付ける場合には、すべての文献を 1 つの（ ）内に入れ、各文献をセミコロンで区切る。例（マーギュリ、1984

；ロウ、1987；トンプソン、1988)

3. 同一の文献に2回目以降言及する場合にも最初の場合と同様にして、'ibid.', 'op. cit.', 'loc.cit.'等の略語は用いない。

- ・参考文献は本文で引用・参照したもの、および原稿の準備段階で使用した文献はすべてリストに載せること。例は英語版を参照のこと。
- 1. 著者の姓のアルファベット順、同一著者ならば出版年の順に並べる。
- 2. 1つの文献の記述は、著者名、( )に入れて出版年、著作名、出版地、出版社、必要ならばページの順序に出す。
- 3. 論文名は「 」内に入れ、書名は『 』内に入れる。
- ・ 注はどうしても必要な場合のみ簡潔にし、本文の最後、参考文献の前に置く。
- ・ 図、表、地図、グラフはすべて別のページにまとめ本文の最後に置く。  
それぞれの図表等には簡潔明瞭な表題を付け、本文中の該当する場所を明示する。
- ・ 原稿は3部送付すること。原則として原稿は返還しない。
- ・ 原稿はすべてコンピュータ処理の可能なディスクで提出すること。使用可能なソフトは、MS WORD (Windows or Macintosh Versions) とする。

# Proceedings of JASFL

For information about JASFL, visit the website:

<http://www2.ocn.ne.jp/~yamanobo/jasfl.html>

2008 年 10 月 1 日 印刷  
2008 年 10 月 11 日 発行

日本機能言語学会

発行者 龍城 正明

編集者 角岡 賢一

編集所 (龍谷大学)

〒 612-8577

京都市伏見区深草塚本町 67

# PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 2 October 2008

---

## Articles

- An Analysis of Adjectivals of Quality in the Framework of the Kyoto Grammar ..... 1  
Toru FUJITA
- A Study of Auxiliaries in Japanese: From Ambiguity to Multifunctionality ..... 11  
Hiroshi FUNAMOTO
- Grammatical Intricacy, Genre, Language Function and Pedagogy ..... 23  
Howard DOYLE
- “Persuasion” in Japanese and English: Ideational Meanings ..... 39  
Kinuko SATO (SUTO)
- Are There Modal Imperatives? — Just Someone Dare Say No! ..... 51  
David DYKES
- Genre and Transitivity Patterns in Education of English ..... 67  
Chie HAYAKAWA
- Patterns of Language in an Interpersonal Interview ..... 83  
Sumi KATO
- The Role of Subject and Predicate in the Japanese Text ..... 97  
Yumiko MIZUSAWA
- Honorifics and Interpersonal Function ..... 107  
Mirosława KACZMAREK
- The Restoration of Ideology ..... 123  
Keizo NANRI
- Reanalysis of “Wa” and “Ga” in the Metafunctional View ..... 135  
Masa-aki TATSUKI

**Japan Association of Systemic Functional Linguistics**